

# 第49回 日本生態学会大会プログラム

- 会 期** 2002年 3月25日(月) ~ 3月30日(土)
- 会 場** 東北大学青葉山理薬キャンパス(生物棟)  
各種委員会(全国委員会を除く)  
東北大学川内北キャンパス(講義棟)  
受付、全国委員会、口頭発表、ポスター発表、企画シンポジウム、  
公募式シンポジウム、自由集会、託児所、  
仙台国際センター  
総会、宮地賞授賞式、論文賞授賞式、受賞講演  
江陽グランドホテル  
懇親会

## 大会本部

東北大学川内北キャンパス 2階(3月26日~3月29日)  
日本生態学会第49回仙台大会組織委員会  
大会会長：西平守孝、組織委員長：河田雅圭  
Tel. 090-9749-8895 e-mail. halcyon-coromanda@ezweb.ne.jp  
大会ホームページ：<http://meme.biology.tohoku.ac.jp/eco2002/>

# 大会日程

## 各種委員会 3月25日(月) 東北大学青葉山理薬キャンパス(生物棟)

生物地学共通講義室(管理棟北側)

自然保護専門委員会 9:00~12:00

英文誌編集委員会 13:00~15:00

大会議室(生物棟4階 410号室)

将来計画専門委員会 10:00~12:00

和文誌編集委員会 13:30~15:30

50周年記念事業委員会 16:00~18:00

小会議室(生物棟6階 614号室)

外来種問題検討作業部会 13:00~15:00

生態学教育専門委員会 15:00~16:00

## 3月26日(火) 東北大学川内北キャンパス A会場

全国委員会 9:00~12:00

## 総会・受賞記念講演 3月28日(木) 仙台国際センター

総会 14:00~15:00

宮地賞授賞式 15:30~15:45

論文賞授賞式 15:45~16:00

宮地賞受賞記念講演 16:00~17:00

## 一般講演・シンポジウム・自由集会 東北大学川内北キャンパス講義棟

一般講演(口頭発表) 3月26日(火)、27日(水)

一般講演(ポスター発表) 3月27日(水)、28日(木)、29日(金)

企画シンポジウム 3月27日(水)、28日(木)

公募式シンポジウム 3月29日(金)

Annals of Botany Lecture 3月28日(木)

自由集会 3月26日(火)、27日(水)、29日(金)

## 懇親会 3月28日(木) 江陽グランドホテル(18:00~20:00)

## 公開シンポジウム 3月30日(土) 仙台国際センター(13:00~16:00)

日本生態学会 第5回公開シンポジウム(日本生態学会公開講演会実行委員会)

テーマ:生態学とは一生態学が解き明かす世界

## エコカップ案内

生態学会大会のサテライト企画として、親善フットサル大会(5人制サッカー)を開催します。会場は、2002年ワールドカップのイタリア代表のキャンプ地の一つ、泉総合運動場内『シェルコム仙台』です。参加チームは3月25日13時から会場に入れますので、14:20分までに受付を必ずして下さい。15時ごろより試合を開始します。会場へのアクセス、日程、参加チームなどは以下のページをご覧ください。

<http://meme.biology.tohoku.ac.jp/eco2002/ecocup.html>

# 注 意 事 項

## 駐車場

- ・大学構内に駐車スペースはありません。車で来られる方は、仙台市内の駐車場に駐車して、バスなどを利用してください。

## 受 付

- ・3月26日(火)10時より行います。当日受付(一般・学生とも6,000円)も可能です。
- ・会場では必ず名札をお付けください。
- ・一般講演の開始される26日(火)の昼頃は、受付の混雑が予想されます。当日受付の方は、お早めに受付を終えられることをお勧めします。なお、事前受付は2月28日まで大会ホームページ上で行っています。

## 一般講演(口頭発表)

- ・口頭発表ではOHPのみが使用できます。スライドは使用できませんので、ご注意ください。OHPの操作は講演者自身でお願いいたします。
- ・講演時間は発表12分・質疑応答3分の合計15分です。一鈴10分、二鈴12分、三鈴14分30秒です。時間を厳守するようにお願いいたします。
- ・座長:各講演者が次の講演の座長をお願いいたします。午前と午後の最初の座長は、大会組織委員会の方で依頼します。
- ・進行に関しては、座長の指示に従ってください。

## 一般講演(ポスター発表)

- ・ポスター発表者は12時までに展示を完了し、当日の17時15分までに撤去してください。
- ・展示場所は、ポスター会場(M・N・O・P会場)の展示ボードに講演番号で指示されています。
- ・ポスターの面積は一人90cm×180cm(縦長)、ボードはクリーム色です。
- ・ポスター貼付用のピンや画鋏は、なるべく各自でご用意ください(セロテープは使用できません)。
- ・12~14時の時間帯は、必ずポスターの前で発表をお願いいたします。
- ・優秀なポスター発表講演には賞を贈ります。

## 企画シンポジウム、公募式シンポジウム、自由集会

- ・設定された時間内に終了するように、進行をお願いいたします。
- ・座長が必要な場合には、各シンポジウム・自由集会の企画者が依頼してください。

## 総会・受賞記念講演

- ・生態学会総会および宮地賞授賞式・論文賞授賞式、宮地賞受賞記念講演は、仙台国際センターで開催されます。東北大学川内北キャンパスからは徒歩7分程度です。

## 懇親会

- ・懇親会は、3月28日(木)午後6時から「江陽グランドホテル」で開催されます。
- ・宮地賞受賞記念講演の後、『博物館・国際センター前』より市営バス「仙台駅前行」に乗り、『青葉通一番町』で下車してください。ここから徒歩で15分程です。
- ・当日参加の場合、学生割引はありません(一般・学生とも7,000円)。
- ・会場収容数の都合上、当日参加をお断りする場合があります。

## 講演要旨

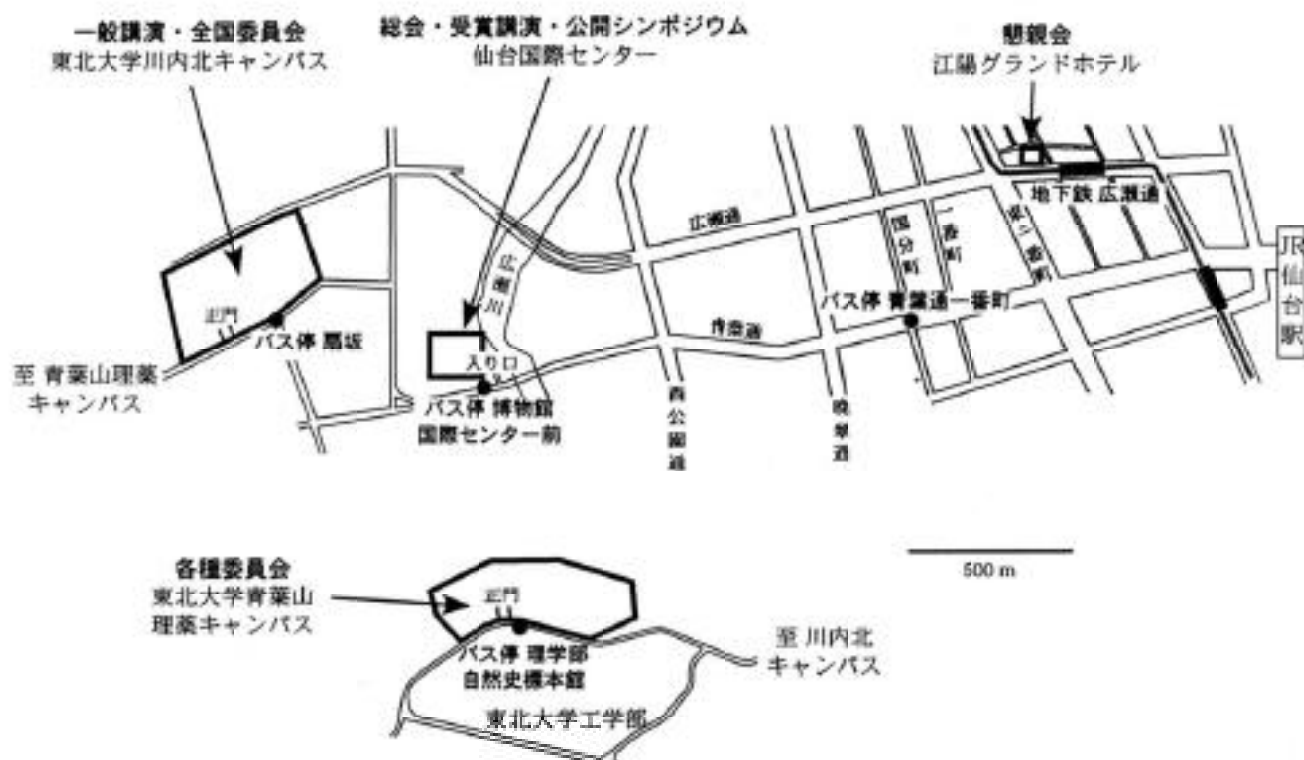
- ・大会不参加の方で、講演要旨をご希望の方は、大会組織委員会へお申し込みください。一冊5000円で承ります。代金は郵便振替で下記へお振り込みください。大会終了後に郵送いたします。
- ・郵便振替口座番号:02210-4-48478 口座名称:eco2002

## 参加者名簿

- ・参加者名簿は、プログラムに掲載しておりませんが、以下のページからダウンロードできます。必要な方は印刷してお使いください。
- ・<http://meme.biology.tohoku.ac.jp/eco2002/meibo.html>

## 託児所

- ・本大会では託児所や親子休憩コーナーを開設します。詳しくは7ページの案内をご覧ください。



## 交通案内

### 東北大学川内北キャンパス（一般講演・シンポジウム・自由集会・全国委員会）

仙台駅西口バスプールから：9番「青葉通經由 青葉城址循環」「広瀬通理工学部經由 長町営業所行」「宮教大」「青葉台」にて、扇坂下車（所要15-20分）  
：16番「広瀬通經由 交通公園」にて、川内郵便局前下車（所要15-20分）  
注意：「愛宕大橋經由 青葉城址循環」「大学病院經由 交通公園」には乗らないでください

### 東北大学青葉山理薬キャンパス（各種委員会）

仙台駅西口バスプールから：9番「青葉通經由 青葉城址循環」「広瀬通理工学部經由 長町営業所行」にて、理学部自然史標本館下車（所要20-25分）

### 仙台国際センター（総会・受賞講演・公開シンポジウム）

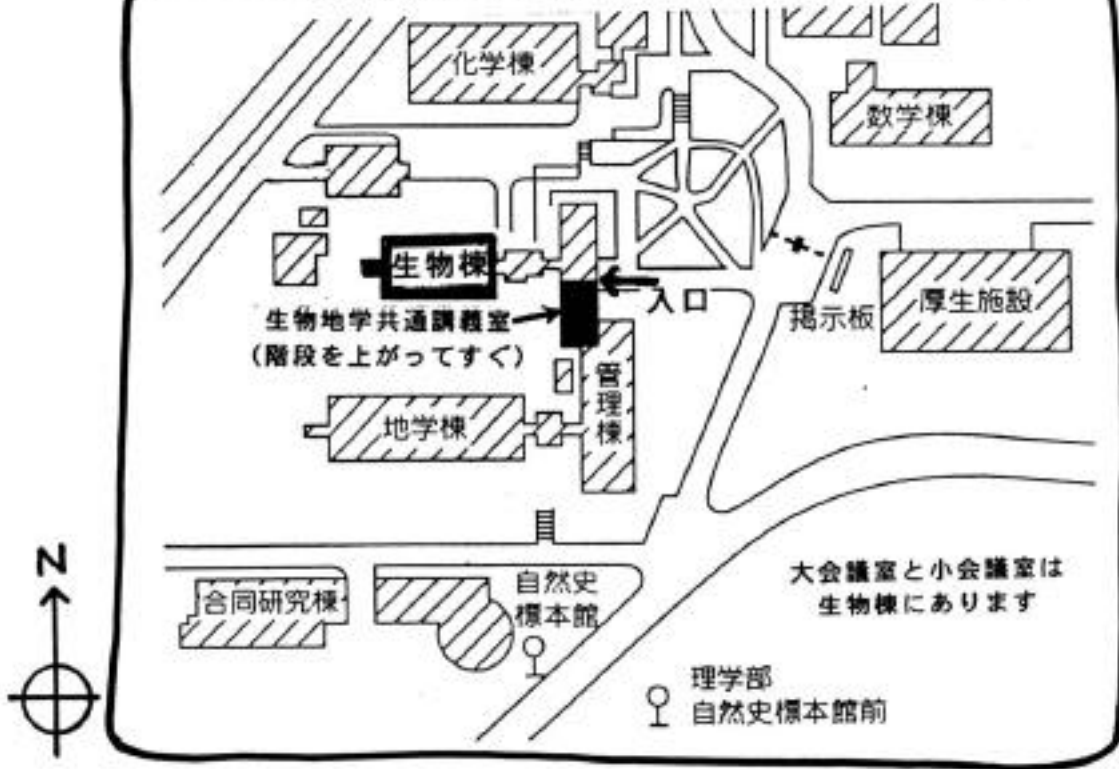
東北大学川内北キャンパスから：徒歩7分 市バスを利用される場合は、扇坂バス停から「仙台駅前行」にて、博物館・国際センター前下車（所要5分）  
仙台駅西口バスプールから：9番「青葉通經由 青葉城址循環」「宮教大」「青葉台」にて、博物館・国際センター前下車（所要13-18分）

### 江陽グランドホテル（懇親会）

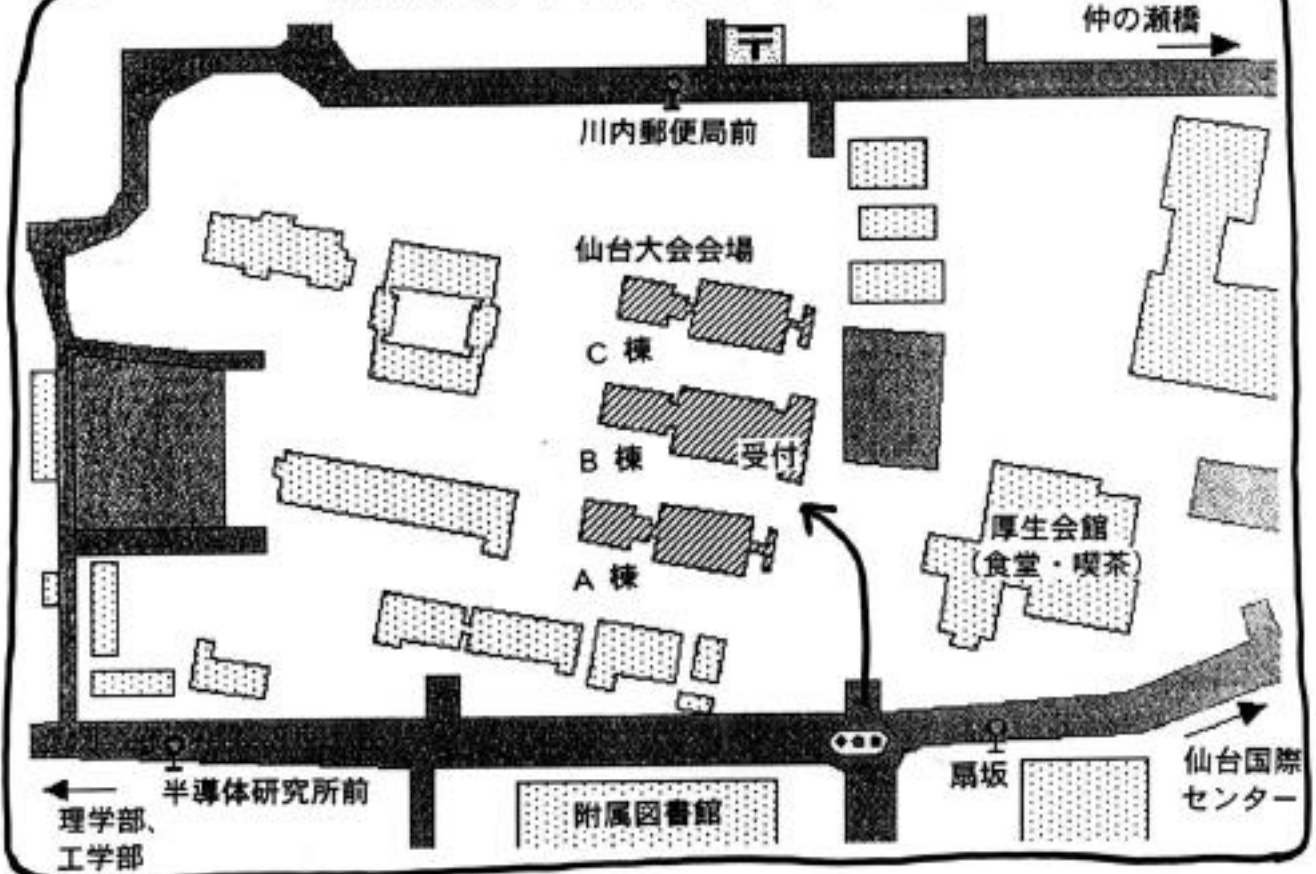
仙台国際センターから：市バス「仙台駅前行」にて、青葉通一番町下車（所要7-15分）、徒歩15分  
仙台駅から：「泉中央行」地下鉄にて、広瀬通下車（所要3分）、すぐ

仙台市交通局の案内ページ：<http://www.donto.co.jp/timetable/timeindex.html>

## 東北大学青葉山理薬キャンパス

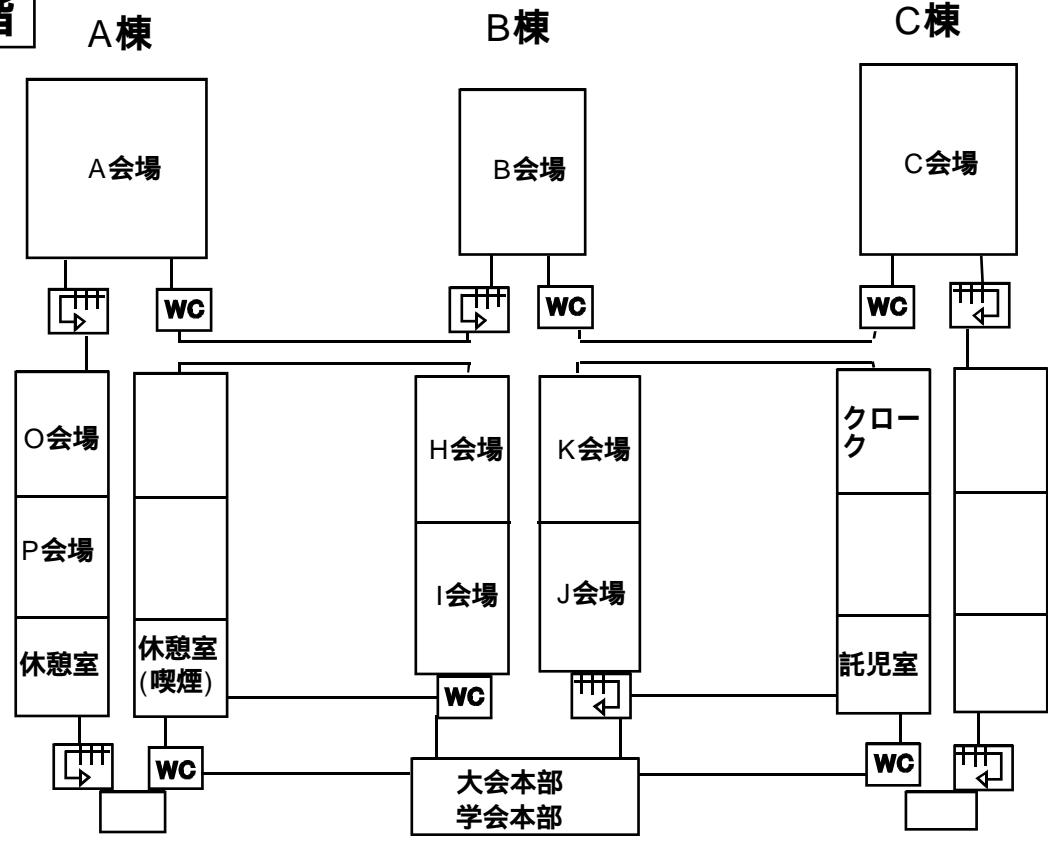


## 東北大学川内北キャンパス

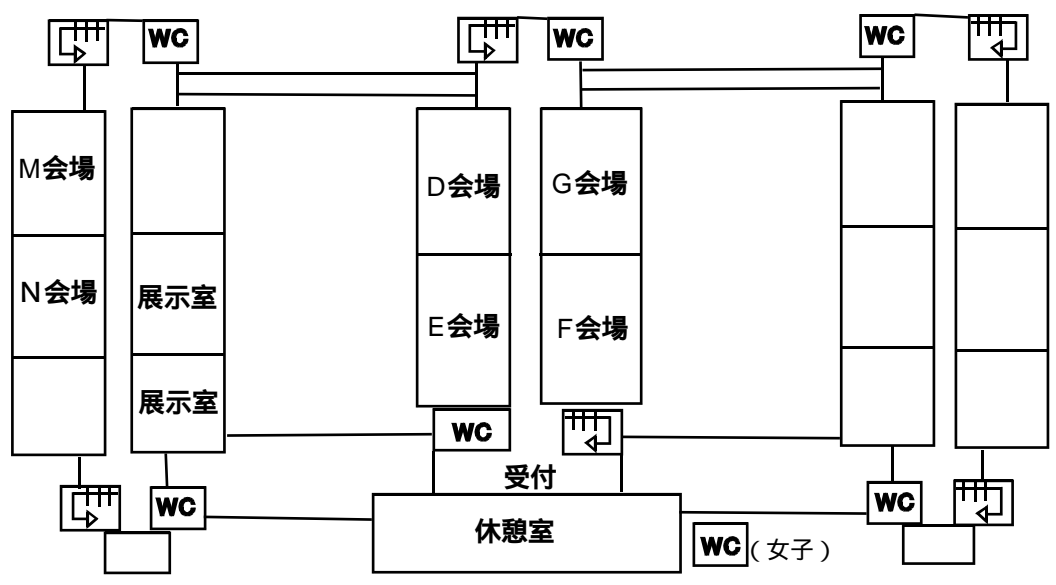


# 会場案内

## 2階



## 1階



# 託児のご案内

日本生態学会第49回仙台大会では、日本生態学会「託児に関する委員会」の支援を受け、大会期間中大会参加者が同伴されるお子さんの託児を行います。

対象年齢： 1歳 ~ 小学校低学年ぐらいまで（ご相談に応じます）

託児期間： 2002年3月26日（火） 12:00 ~ 17:30  
3月27日（水） 09:00 ~ 17:00  
3月28日（木） 09:00 ~ 17:00  
3月29日（金） 09:00 ~ 17:00

託児場所： 大会会場内（会場案内図をご覧ください）

利用料金： お子さん1人につき 1時間800円  
（ただし兄弟でお預かりする場合は、2人目から半額になります）

申込締切： 2001年3月12日（火）

なお、大会当日には、託児室とは別に、無料の「親子休憩コーナー」を会場内休憩室に設置する予定ですのでご利用ください。

以上の詳細は日本生態学会第49回大会のホームページをご覧ください。

<http://meme.biology.tohoku.ac.jp/eco2002/takujisyo.html>

託児を希望される方は、申込書を、第49回仙台大会組織委員会託児担当までお送りください。申込書は上記ホームページからコピーを取るか、組織委員会託児担当までご請求ください。なお、託児に関するご相談はお気軽にどうぞ。

組織委員会託児担当： 宮城大学事業構想学部 宮原 育子  
981-3298 宮城県黒川郡大和町学苑1  
電話： 022-377-8355  
FAX： 022-377-8390  
メール： [miyaiku@myu.ac.jp](mailto:miyaiku@myu.ac.jp)

# 大会日程表

3月25日(月)

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
<-----各種委員会の会場は青葉山理薬キャンパスです----->											
共通講義室	自然保護専門委員会				英文誌編集委員会						
大会議室		将来計画専門委員会			和文誌編集委員会		50周年記念事業委員会				
小会議室					外来種問題検討部会		生態教育				
シェルコムせんだい泉					エコカップ2002 in SENDAI						

3月26日(火)

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
		受付										
				一般講演(口頭発表)								
A会場	全国委員会				保全・景観生態							
B会場				植物と動物の相互関係								
C会場				植物群落・群集						自由集会		
D会場				進化・種多様性					W1	化学・生物農薬		
E会場				遷移・更新					W2	動物行動新展開		
F会場				植物の生理生態					W3	干潟の復元は		
G会場				植物の個体群生態					W4	植物の生理生態		
H会場				物質循環					W5	ミミズの機能		
I会場				行動・社会					W6	四次元の生態学		
J会場				動物群集					W7	生態系腐食流入		
K会場				動物の個体群生態					W8	植生の分布分化		

3月27日(水)

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
		受付										
				一般講演(口頭発表)		企画シンポジウム						
A会場	保全・景観生態				S1 生物多様性							
B会場	動植物の相互関係			S2 Community Ecol.								
C会場	植物群落・群集				S3 森林群集					自由集会		
D会場	数理生態				S4 生態学とIT				W9	一斉開花2001		
E会場	遷移・更新				S5 寄生虫生態学				W10	周防灘と長島		
F会場	植物の生理生態				S6 エコインフォマティクス				W11	Matter Flow		
G会場	植物の個体群生態								W12	植生地理学		
H会場	物質循環			W21説明会					W13	森・田の学校		
I会場	行動・社会								W14	魚類の繁殖		
J会場	動物群集								W15	数理的手法		
K会場	動物の個体群生態			一般講演(ポスター)					W16	間接効果		
M会場	<----->			M202 - M239		<----->						
N会場	<----->			N201 - N240		<----->						
O会場	<----->			O201 - O234		<----->						
P会場	<----->			P201 - P236		<----->						

# 大会日程表

3月28日(木)

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	受付										
	企画シンポジウム										
A会場	S 7 分子生態学										
B会場		L1 招待講演									
C会場	S 8 資源獲得戦略										
D会場	S 9 データマイニング										
E会場	S10 景観生態学の役割					一般講演(ポスター)					
M会場	<----->				M301 - M339		<----->				
N会場	<----->				N301 - N340		<----->				
O会場	<----->				O301 - O336		<----->				
P会場	<----->				P301 - P334		<----->				
仙台国際センター						総会		受賞講演			
江陽グランドホテル						懇親会					

3月29日(金)

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	受付										
	公募シンポジウム					公募シンポジウム					
A会場	T 1 生態系間の相互作用					T 6 分子マーカー					
B会場	T 2 植物とポリネーター					T 7 Conservation Planning					
C会場	T 3 物質循環駆動系					T 8 種子散布過程					
D会場	T 4 被食防御反応					T 9 環境変動応答					
E会場	T 5 大自由度系					T10 エネルギー消費					
F会場						T11 子供サイズ変異					
G会場						一般講演(ポスター)					
M会場	<----->				M401 - M437		<----->				
N会場	<----->				N401 - N439		<----->				
O会場	<----->				O401 - O438		<----->				
P会場	<----->				P401 - P437		<----->				
						自由集会					
						W17 生態系ネット					
						W18 中国水養分環境					
						W19 外来種の実態					
						W20 尾瀬・保護戦略					

3月30日(土)

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
自由集会											
雑木林	W21 群落談話会										
						公開シンポジウム					
仙台国際センター						生態学が解き明かす世界					
						自由集会					
川渡農場						川渡へ移動 W22 フェノロジー研究会					

3月26日(火)

開始時刻	A会場	B会場	C会場
	<b>保全・景観生態</b>	<b>植物と動物の相互関係</b>	<b>植物群集・群落</b>
12:30		B101 國武陽子・樋口広芳(東大・農・生物多様性)マルハナバチ媒介植物において植物個体群の個体群サイズ密度が繁殖成功に与える影響	
12:45		B102 小林史郎(九大院・理・生物科学)小型ハナバチは株間送粉率が低いのか?	C102 田中義幸(東大・海洋研)・仲間雅裕(千葉大・自然科学研究科)熱帯性海草の種ごとの分布上限は干出耐性が決めているのか?
13:00	A103 青島正和(大成建設)森林生態系の貨幣換算価値に関する一考察	B103 市岡孝朗(名大・生命農)・他10名一斉開花に対するオオミツバチ個体群の反応	C103 渡辺雅子(北大・フィールド科学セ・厚岸臨海)・仲間雅裕(千葉大院・自然科学)・向井 宏(北大・フィールド科学セ・厚岸臨海)北海道東部の海草2種(Zostera asiatica and Zostera marina)の乾燥耐性と分布の関係
13:15	A104 宮脇 昭・阿部聖哉(国際生態学セ)アマゾン低地熱帯林再生プロジェクト-植栽樹種の組み合わせの異なる植分の10年目の生育比較	B104 酒井章子(京大・人環)・大井和之(九州環境管理協会)・井上民二(京大・生態研セ)ショウガ科における送粉システムと花の形態の進化	C104 木村綾子・中越信和(広島大院・国際協力)環境保全型農業の水田における植物の種多様性
13:30	A105 持田幸良(横国大・教・自然)木道敷設による12年後の植生回復状況-八甲田山地仙人岱湿原の例-	B105 加藤 真・瀧村 淳(京大・人間環境)カンコノキ属における絶対送粉共生と共種分化	C105 宮崎 卓・福嶋 司・星野義延(東京農工大・農)日本との比較における中国海南島の水田雑草群落
13:45	A106 高木麻衣(九大・農・森林)中村太士(北大・農・森林)ダムによる流量調節が河畔林の樹種構成に及ぼす影響について	B106 中野千賀・鷲谷いづみ(東大・農学生命)サンクチュアリの管理と送粉共生系	C106 塩見正衛・菊池葉子(茨城大・理)放棄畑植物群落の耕起に対する反応-空間的分布の視点から-
14:00	A107 野宮治人(森林総研)砂防堰堤上の堆砂面に形成されたハルニレの更新サイト	B107 市野隆雄(信州大・理)・市岡孝朗(名大・農)・Stuart J. Davies (Harvard Univ. Herbaria)アリ植物(マカランガ属)と共生アリの共進化	C107 竹原明秀(岩手大・人文社会・生物)・三浦 修(岩手大・教育・地理)・阿部恵子・村田野人(岩手大・人文社会・生物)農地に孤立した屋敷林における埋土種子群
14:15	A108 吉川正人・星野義延・櫻井恭介(東京農工大・農)扇状地河川の高水敷化が後背水域の形成と植物群落に与える影響	B108 泰中啓一・中桐脊之・竹内康博・吉村仁(静大・工)共生関係が持つ2つの効果:集団の安定化と競争関係の誘発	C108 島田直明(横浜国大院・工学)・小池文人(横浜国大院・環境情報)二次草地植生の分布に与える耕地整理の影響
14:30	A109 小野昌輝・加賀谷隆(東大院・農学生命)河床ランドスケープ - 石礫の配置と集中に対する河川底生動物の反応 -	B109 石原道博・鈴江規子(大阪女大・理・環境理)ヤナギルリハムシの適応度に重要なのは幼虫よりも成虫が摂食する寄主	C109 小室健行・小池文人(横浜国大・工)都市近郊のパッチ状の生育地における種子散布過程
14:45	A110 高村健二(国立環境研)河川流域の陸上環境と水生生物相との関連	B110 青木優和(筑波大・下田臨海)寄主海藻によって変化するコンブノネクイムシの造巣と繁殖	C110 富士田裕子(北大・フィールド科学セ・植物園)・笠木哲也(北大・地球環境)・金子正美(酪農学園大・環境システム・地域環境)色丹島の風衝草原植生とその特徴

3月26日(火)

開始時刻	A会場	B会場	C会場
	<b>保全・景観生態</b>	<b>植物と動物の相互関係</b>	<b>植物群集・群落</b>
15:00	A111 牛山志穂(東大院・農・保全生態)・鷺谷いづみ(東大・農・保全生態)関東地方低地における管理形態の異なる雑木林伐採後に成立する植生の予測	B111 中村誠宏・大串隆之(京大・生態研)タマバエがヤナギの補償的成長を介して植食性昆虫に与えるプラスの間接効果	C111 安田泰輔・塩見正衛・堀 良通・河原崎里子(茨城大・理・生態)・周華坤(中国科学院西北高原生物研)・唐艶鴻(国立環境研)放牧が植生の空間構造に与える影響:中国青海省高地草原の例
15:15	A112 菊池亜希良・中越信和(広島大院・国際協力)湧水湿地の生物種多様性の解釈,地上部現存量の推定によるアプローチ	B112 三浦和美(京大・農・昆虫生態)キンキフキバッタ幼虫の野外における植物利用パターン	C112 U. G. Nachinshonhor(東北大院・理・生物)・他6名 気候と遊牧がモンゴル草原の植物群落到に及ぼす影響
15:30	A113 高村典子(国立環境研)・他6名 ため池の景観・植生と水質・生物群集の関係(予報)	B113 野沢亮吉(北大・低温研)・大串隆之(京大・生態研)ヤナギの補償的成長によるアワフキムシの産卵行動に対する影響	C113 小路 敦・神山和則・佐々木寛幸((独)農業技術研究機構・畜産草地研)わが国における半自然草原の成れの果て 植生メッシュデータによる解析から
15:45	A114 角谷 拓・須田真一・鷺谷いづみ(東大・農・保全生態)学校ビオトープにおけるトンボ群集形成	B114	C114 広木詔三(名大・人間情報)・磯井俊行・平野真也(名城大・農)モンゴリナラの根が地中に真っ直ぐ伸びて行かない理由
16:00	A115 宮下 衛(国立環境研・生物圏)・染谷保(ヒヌマイトトンボ研究会)利根かもめ大橋におけるヒヌマイトトンボ保護対策事後評価	B115 尾崎研一(森林総研・北海道)・斎藤秀之・山室晃司(北大・農)食害時期の違いがエゾマツの光合成速度に与える影響	C115 斎藤範子・渡邊定元(立正大・地球・環シ)・井上 晋(九大・農)九州多良山系のブナ林の成立環境
16:15	A116 石田 健(東大・農生命)・高美喜男(奄美野鳥の会)アマミヤマシギの生息状況と保護	B116 米山千温(名大・生命農)沖縄産オオバギの被食防衛戦略	C116 福嶋 司(東京農工大・農)・西尾孝佳(宇都宮大・野生植物)・松井哲哉(森林総研)・楊良(雲南省環境セ)中国南西部に分布するブナ型森林の植生構造
16:30	A117 西廣 淳・鷺谷いづみ(東大・農学生命科学)霞ヶ浦の水位操作が水辺植物の更新に及ぼす影響	B117 井貝紀幸・伊藤正仁・肘井直樹(名大院・生命農・森林保護)ミズナラとコナラ上のゴール形成昆虫の群集構造—種構成と出現時期—	C117 池田 正(横浜国大院・工)・大野啓一(横浜国大・環境情報)本州中部太平洋側地域におけるブナ林の種組成分化の仕組み
16:45	A118 高川晋一・西廣 淳・鷺谷いづみ(東大・農生・保全)霞ヶ浦におけるアサザのセーフサイトとその復元	B118 前田太郎(京大院・農・生態情報開発)ケナガカブリダニのバッチ滞在時間の決定	C118 内藤俊彦(東北大・植物園)世界遺産白神山地二ツ森モニタリングサイトの森林構造
17:00			

3月26日(火)

開始時刻	D会場	E会場	F会場
	<b>進化・種多様性</b>	<b>遷移・更新</b>	<b>植物の生理生態</b>
12:30			
12:45		E102 佐藤雅俊(帯畜大・畜産環境)・橘ヒサ子(北教大・旭川)・新庄久志(釧路国際ウェットランドセンター)別寒辺牛湿原の植生とその分布構造(第2報)	F102 宮沢良行・菊澤喜八郎(京大・農・森林生物) heterophyllous speciesのBetula grossaにおける葉の光合成能力と光環境の関係
13:00	D103 佐藤 綾(京大院・理・動物生態)・上田哲行(石川県立農業短大)・榎戸良裕(横浜市)・堀 道雄(京大・理・生物) 海浜性ハンミョウ類の共存機構	E103 ホーテス・シュテファン(北大院・地球環境)テフラが湿原植生に及ぼす影響 ムサロベツ湿原における野外実験	F103 Muller, O., Hikosaka, K., Hirose, T. (Tohoku Univ., Life Sci.) Photosynthetic acclimation of an evergreen understory shrub, Aucuba japonica, to seasonal environment in different light regimes
13:15	D104 中嶋美冬・松田裕之(東大・海洋研)・堀 道雄(京大・理・生物科学)シクリッド群集における右利き左利き遺伝子頻度のダイナミクス	E104 山田義裕・藤田 昇(京大・生態研セ)木津川河川敷における地形変化と植生の関係	F104 宮澤真一・寺島一郎(大阪大・理・生物)常緑広葉樹の葉肉組織や光合成の発達には貯蔵物質が重要な役割を果たしている
13:30	D105 田中晋吾・大崎直太(京大・農・昆虫生態)侵入種による環境の攪乱が引き起こす寄生者の広食化と狭食化	E105 藤村善安(北大院・農)・富士田裕子(北大・フィールド科学セ)・加藤邦彦・竹中 眞(農業技術研究機構)ハンノキは何故増えたのか - 釧路湿原久著呂川流域にて	F105 Khan, Md. N. I., Rempei, S., Hagihara, A. (琉大・理), Ogawa, K. (名大・農) Canopy structure and attenuation of photosynthetically active radiation by woody organs in a mangrove stand of Kandelia candel (L.) Druce.
13:45	D106 久保田耕平(東大院・農・森林動物)・多賀敏正(三重県)三重県で新たに発見されたマヤサンオサムシ個体群の由来	E106 山際 豊・表 寿一(創価大・工・生物工)ウェットランド生態系における植物分布と土壌有機成分との関係	F106 ○千葉幸弘(森林総研)・右田千春(筑波大・環境)木登りして枝葉の量を推定する方法
14:00	D107 雨甲斐広康(静大・工)・向坂幸雄(九大・理)・河合孝尚・吉村 仁(静大・工)季節毎死亡率の性比への影響についての一試論	E107 ○本間雅枝・菊池俊一・宮本敏澄・矢島 崇(北大・農)ケショウヤナギを含むヤナギ科河畔林の林分構造と発達過程	F107 右田千春(筑波大院・環境科学)・千葉幸弘(森林総研)・中村 徹(筑波大・農林学系)スギ樹形の発達過程の解読
14:15	D108 前川清人(東大・広域システム)・Yung Chul Park・Jae C. Choe (Seoul National Univ.)・松本忠夫(東大・広域システム)アジア産の亜社会性キゴキブリ類(Cryptocercus spp.)の系統と進化	E108 畑 憲治(都立大・理・生物)・山村靖夫(茨城大・理・生態)・可知直毅(都立大・理・生物)小笠原諸島におけるマツ枯れ後の外来樹種アカギの侵入	F108 韓 慶民・川崎達郎・千葉幸弘(森林総研)富士山アカマツ林にける炭素固定量の推定 I. 個葉の光合成に関するパラメータの樹冠内変化
14:30	D109 正路章子・河田雅圭(東北大・理)グッピーにおけるメスの選好性パターンとその進化的意義	E109 上條隆志(筑波大・農林)・島田和則(森林総研)・加藤 拓(筑波大・生命環境)・樋口広芳(東大・農学生命)三宅島2000-2001年噴火が森林生態系に与える影響	F109 川崎達郎・千葉幸弘・荒木眞岳・韓 慶民(森林総研)アカマツ樹冠内の光環境の異なる一次枝の3次元構造と着葉形態
14:45	D110 Lazaro M. Echenique Diaz (東北大・理・生物)・石橋靖幸(森林総研)・横山 潤・河田雅圭(東北大院・生命科学) Genetic variability within and among the Yaeyama islands in Hiposideros turpis (Chiroptera, Hipposideridae).	E110 米田 健(大阪教育大)・西村 千(国立環境研・地球環境)・藤井伸二(大阪市立自然史博)・Rusdji Tamin (Andalas 大・理) 湿潤熱帯における里山林の構造とその動態インドネシア・スマトラでの事例研究	F110 白石貴子・渡邊定元(立正大・地球環境・森林生態)日本海側および太平洋側ブナの葉の柵状組織

3月26日(火)

開始時刻	D会場	E会場	F会場
	<b>進化・種多様性</b>	<b>遷移・更新</b>	<b>植物の生理生態</b>
15:00	D111 大館智氏(北大・低温研)ユーラシア広域種バイカルトガリネズミの東アジア起源説:分子より見た最終氷期後の東から西への早い分散	E111 足立直樹(JST/FRIM)・Nur Supardi Md. Noor(FRIM)・奥田敏統(国環研)東南アジア低地熱帯林における倒木・落枝の発生の季節変化	F111 菊沢喜八郎(京大・農)・木村一也(京大・生態研セ)熱帯山地林における樹木の葉フェノロジーに関する研究
15:15	D112 田辺 力(徳島県博)・曾田貞滋(京大・理)ババヤスデ属における交尾器形態の多様化:大型化とそのコスト	E112 永野正弘(環境設計)・他5名 IBP水俣照葉樹林の33年間の個体群動態	F112 Laode Alhamd, Hagihara, A. (Ryukyuu Univ.) Relationships between leaf-fall rate, basal area and its relative growth rate on tree species in a broad-leaved forest, Okinawa, Japan
15:30	D113 谷垣岳人(京大・理・動物生態)・山岡亮平(京工繊大・織・化学生態)・曾田貞滋(京大・理・動物生態)ヒメハナカミキリ属の種認知に関わる体表炭化水素の種間変異	E113 前中久行(大阪府大院・農学生命)・他5名・水俣照葉樹林研究グループ 台風によるIBP水俣照葉樹林の大攪乱と回復過程初期	F113 崔驍勇・唐艶鴻・古 松(国立環境研・地球環境・熱帯生態系保全) Water stress and ecophysiological adaption of three species in Tibet alpine meadow
15:45	D114 田中洋之(京大・霊長研)・伊藤誠夫(札幌科学技術専門学校)・湯本貴和・井上民二(京大・生態研セ)東アジア産マルハナバチの分子系統(日本のマルハナバチ相を構成する要素)	E114 小池文人・三上光一(横浜国大院・環境情報)・鈴木誠(東大院・千葉演習林)地形から樹種の最大樹高を予測する-群集を決定する種特性として-	F114 大手信人(京大・農・森林水文)・他5名 臭柏( <i>Sabina vulgaris</i> Ant.)の更新プロセスにおける水分生理の変化とナースプラントとしての烏柳( <i>Salix cheilophila</i> Schneid.)の影響について
16:00	D115 川口勇生・佐々木顕(九大院・理・生物)・Ulf Dieckmann(ADN, IIASA)疫学パラメーターが系統樹に与える影響について	E115 加藤正吾・中村真也・小見山章(岐阜大・農)異なる季節的光環境下に生育する下層木2種の光合成特性の季節変化	F115 齋藤隆実・寺島一郎(阪大院・理・生物科学)葉の水分生理特性を示す体積弾性率と細胞壁の諸特性との関係
16:15	D116 石田孝英・服部耕平(北大院・地球環境)・佐藤宏明(奈良女大・理)・木村正人(北大院・地球環境)寄主昆虫から見た、カシワとミズナラの雑種	E116 大野啓一(千葉県中央博)南関東低地における草本の開芽時期	F116 田中伸治・村岡裕由・小泉 博(岐阜大・流域環境研究セ)マヤブシキ( <i>Sonneratia alba</i> )直立根の冠水頻度に対する可塑性と酸素供給機能
16:30	D117 岩永亜紀子・佐々木顕(九州大・理・生物)抵抗品種多様性によるいもち病最適防除-スーパーレース対マルチライン	E117 矢田 豊(石川県林試)・石田 仁(富山県林技セ)デジタルカメラの自動撮影による林冠フェノロジー観測	F117 松田直子・土谷岳令(千葉大院・自然科学)浮葉植物における換気速度の推定
16:45	D118 武村敏彦(武村研究所)夏芝類品種の膨潤進化についての生態学的研究		F118 ○横山祥佳・土谷岳令(千葉大院・自然科学)浮葉植物ヒシの酸素収支
17:00			F119 山田雅仁・高橋英紀(北大院・地球環境)サロベツ湿原における気象環境とエゾカンゾウの低温障害について
17:15			
17:30	<b>自由集会</b> W1 化学農薬と生物農薬、どちらが生物多様性にやさしいのか?(アグロエコロジー第5弾)	<b>自由集会</b> W2 秒単位で見る動物行動の新展開:データロガーが拓く行動生態研究	<b>自由集会</b> W3 干潟の復元は可能か?
19:30			

3月26日(火)

開始時刻	G会場	H会場	I会場
	<b>植物の個体群生態</b>	<b>物質循環</b>	<b>行動・社会</b>
12:30	G101 佐々綾子(東北大・理・生物)・酒井曉子・酒井聡樹(東北大院・生命科学)雌雄異株低木ミヤマナギにおける繁殖への資源分配~標高と雌雄による違い~	H101 植木昌也(愛媛大・農)・中野伸一(愛媛大・CMES)・川端善一郎(京大・生態研)酸性化攪乱後のpH回復力と藻類の種多様性との関係	
12:45	G102 古川武文・工藤 洋・鈴木準一郎・可知直毅(都立大・理・生物)異なる標高における雌雄異株多年草オンタデの繁殖個体の性比の変異	H102 小島久弥(都立大院・理)・福井 学(都立大・理・生物)硫黄酸化細菌Thioplota と周辺バクテリアの相互作用	I102 永野昌博(横浜国大・環境情報)コクロシデムシ(モンシデムシ亜科、コクロシデムシ属)の子殺し行動
13:00	G103 江副日出夫(大阪女大・理・環境理学)植物の性配分の多様性を生み出す空間構造	H103 保原 達・大園享司・藤原里美(京大・農)・木庭啓介(京大・情報)・亀田佳代子(琵琶湖博)水域由来のN・Pが森林生態系に与える生物地球化学的影響	I103 佐藤幸恵・坂神たかね・齋藤 裕(北大院・農・動物生態)亜社会性ハダニに性比について
13:15	G104 井上みづき(京大・農・森林生物)・石田 清(森林総研・関西)・菊澤喜八郎(京大・農・森林生物)雌雄の違いは無性繁殖に影響をおよぼすのか? ヤマノイモを例として	H104 三木 健(京大・生態研)汚濁物質流入の時間変動パターンが河川の浄化機能を大きく左右する	I104 草原美樹・前園泰徳・宮下 直(東大・農・生物多様性)トリノフンダマシ属における造網時刻の可塑性とその決定要因
13:30	G105 板垣智之(東北大院・理・生物)・石井博・酒井聡樹(東北大院・生命科学)両性植物における花序内の資源分配パターン	H105 長谷川夏樹(北大院・理)・飯泉 仁(北水研)・向井 宏(北大・フィールド科学セ・厚岸臨海)岩礁性海草スガモ群落の窒素動態-スガモ地上部と地下部の窒素吸収-	I105 本間 淳・西田隆義(京大・農・昆虫生態)トゲヒシバツタCrietettix japonicusにおける物理的防衛に有効な体サイズ
13:45	G106 丸丸敦史(総合地球環境研)・板垣智之・石井 博(東北大・理・生物)ツユクサの雌しべのサイズ変異と花アロメトリー	H106 倉田健悟(徳島大院・工)・他6名 港湾などの内湾的環境における物質循環の比較: 徳島県小松島港の防波堤と実験構造物について	I106 遠藤千尋(京大・理・動物生態)地下生活者ケラの利用空間
14:00	G107 柴山弓季(神戸大・自然科学)・角野康郎(神戸大・遺伝子実験セ)異型花柱性植物ガガブタにおける集団の花型構成と種子生産	H107 藤田正雄(自然農法国際研究開発セ)・藤山静雄(信大・理)農地生態系の土壌圏-安定同位体比を用いて食物網を探る- 1. 畑地に生息するミミズ4種のエサ資源推定の試み	I107 澤田浩司(香椎高校)交尾ガードのパラドックス: なぜ長時間交尾の最後に精子を注入するか?
14:15	G108 池田浩明・伊藤一幸(農業環境技術研)絶滅危惧植物タコノアシの種子水散布における着花位置による個体内変異	H108 菊地永祐(東北大・東北アジア研)・他6名 西シベリア・チャニー湖の炭素・窒素安定同位体比を用いた食物網解析(予報)	I108 松浦健二(京大院・農・昆虫生態)シロアリにおける一夫一妻創設の適応的意義: グルーミング仮説の提唱
14:30	G109 鮎川恵理(総研大・極域科学)・伊村智・神田啓史(国立極地研)南極雪鳥沢での環境操作にともなう藓類繁殖体バンクの反応	H109 土居秀幸・高木茂人(東北大院・理・生物)・菊地永祐・鹿野秀一(東北大・東北アジア研)潟沼における安定同位体比を用いたサンユスリカ幼虫の餌資源の年変動	I109 三浦 徹(東大院・総合文化・生命環境)・越川滋行・町田光世・松本忠夫(東大院・総合文化・広域システム)オオシロアリにおける長翅型ニフ齢の欠如・繁殖をめぐるコンフリクトとカースト分化機構の進化
14:45	G110 上村佳孝・加賀屋美津子・工藤 洋・可知直毅(都立大・理・生物)黒穂菌の感染がツルボ(コリ科)に与える影響 1. 寄生菌の特徴と感染経路の推定	H110 本郷裕一(科技団・ICORP)・他6名 食材性高等シロアリ(Microcerotermes crassus)の個体間・コロニー間・地域間での、T-RFLPを用いた腸内共生微生物相の比較	I110 林 良信・北出 理(茨城大・理)ヤマトシロアリにおける幼形生殖虫の分化と単為生殖の可能性

3月26日(火)

開始時刻	G会場	H会場	I会場
	<b>植物の個体群生態</b>	<b>物質循環</b>	<b>行動・社会</b>
15:00	G111 加賀屋美津子・上村佳孝・工藤 洋・可知直毅(都立大・理・生物)黒穂菌の感染がツルボ(ユリ科)に与える影響2.健全個体と病気個体の生活史形質の比較	H111 深澤 遊・大園享司・武田博清(京大・農・森林生態)ブナ材腐朽菌の有機物分解能の多様性	I111 北出 理・林 良信・菊池義智(茨城大・理)カンモンシロアリの野外創設コロニーについて
15:15	G112 西脇亜也(宮崎大・農)・水口亜樹(鹿大連大)・中島 徹(宮崎大・農)日本列島におけるチガヤ2種のニッチシフト	H112 大園享司・武田博清(京大・農・森林生態)14樹種の落葉分解にともなう窒素の不動化-無機化過程とリグニン・ホロセルロースの動態	I112 井上徹志(科技団ICORP/理研)・Chirasak Klangkaew(科技団ICORP)・Charunee Vongkaluang(タイ王立森林局)・Napavarn Noparatnaraporn(カセサート大)・工藤俊章(科技団ICORP/理研/横浜市大院)シロアリの種内行動多型の遺伝的解析
15:30	G113 中桐育之・安田泰輔・塩見正衛(茨城大院・理工)・泰中啓一・吉村 仁(静岡大・工)草地群落における種子分散とクローン増殖の共存問題についての試論	H113 Bhatta Balram Kumar・Takeda Hiroshi・Tokuchi Naoko(京大・農)The Influence of soil removal on decomposition and nutrient dynamics of pine needle	I113 長谷川英祐(北大院・生物生態体系)・佐々木智基(富山大・理)・辻 和希(琉球大・農)アミアリの大型単眼個体は遺伝的なチーターか?
15:45	G114 津田 智(岐阜大・流環研セ)・安島美穂(東大・農学生命科学)斑尾高原沼湿原におけるドクゼリ種子の動態-種子生産と埋土種子集団との関係-	H114 森 早苗・名波 哲・伊東 明・山倉拓夫(大阪市大院・理)奈良県春日山照葉樹林の材分解速度の局所変動	I114 西村欣也・磯田 豊(北大・水産)同一世代内の共食い進化
16:00	G115 保谷彰彦(東大・総合文化・広域システム)・芝池博幸(農環研・景観生態)・森田竜義(新潟大・教育・生物)・伊藤元己(東大・総合文化・広域システム)雑種タンポポの生殖様式と種子発芽特性	H115 武生雅明(森林総研)・相場慎一郎(鹿児島大・理・地球環境)・北山兼弘(京大・生態研セ)キナバル山の熱帯山地林における地形傾度上での炭素貯留量の変化パターン	I115 狩野賢司・山崎由紀(東京学芸大・生物)・桑村哲生(中京大・教養)クモハセの繁殖戦略
16:15	G116 八木橋勉(森林総研)太平洋側と日本海側のブナの発芽時期の違い	H116 賈書剛(岐阜大・流環研)・他5名 冷温帯落葉広葉樹林生態系における炭素貯留量の構成-高山試験林を例として-	I116 畑 啓生(京大・人間・環境)クロソラスズメダイの藻園管理における除藻
16:30	G117 野口英之(大阪市大・理)・他8名 北タイ・インタノン山のコナラ属2種の種子散布	H117 足立龍晴・津田 智・酒井 徹・小泉博(岐阜大・流環研)伐採直後の冷温帯落葉広葉樹林における炭素動態	I117 大田直友・渡慶次睦範(九大・理・臨海)Field observation of feeding in coexisting carnivorous snails
16:45	G118 山田浩雄・生方正俊(林木育種セ)スタジイ, コジイ, オキナワジイの堅果形態の地理的変異		I118 蝦名晋一・松田裕之(東大・海洋研)キューバ海域に生息するタイマイの順応的管理
17:00			
17:30	<b>自由集会</b> W4 植物の生理生態:生理生態学の視点からみた植生のパターンと群落構造	<b>自由集会</b> W5 ミミズの多面的機能~Soil Ecology:土壌のキーストン種. 2	<b>自由集会</b> W6 四次元の生態学-花粉分析は景観復元の道具となりうるか?
19:30			

3月26日(火)

開始時刻	J会場	K会場
	<b>動物群集</b>	<b>動物の個体群生態</b>
12:30		K101 入江貴博・巖佐 庸(九大・理・生物) 防御レベルの可塑性と進化：タカラガイの殻の地理的変異
12:45	J102 河井 崇・渡慶次睦範(九大院・理・臨海) Asymmetric coexistence: an example from the upper intertidal area	K102 和田元樹・巖佐 庸(九大・理・生物) 複合生活環境進化の数理モデル - 寄生虫はなぜ中間宿主をとるか -
13:00	J103 渡慶次睦範・谷口裕美(九大・理・臨海) Habitat architecture and colonization by benthic animal assemblages: a field experiment.	K103 浜崎健児(農環研) 有機農法水田におけるアメリカカブトエビとホウネンエビの発生とそれに及ぼす田面水pHの影響
13:15	J104 新垣誠司・渡慶次睦範(九大院・理・臨海) An experimental study of tidepool assemblages.	K104 長崎緑子・宮下 直(東大・農・生物多様性) ヒメグモ科における繁殖形質の多様性
13:30	J105 三好順也(徳島大院・工)・他7名 徳島県小松島港における実験構造物周辺の付着生物状況と遷移：設置時間等の違いによる差異	K105 竹中 践(北東海大)・森口 一(日本蛇研) 奄美諸島のアオカナヘビの生殖および生息状況
13:45	J106 澤田貴彰(九大・天草実験所) Longitudinal and lateral distribution of macro benthos in an estuarine river	K106 永田尚志(国環研・生物多様性P) 周辺環境およびヨシ原の分布がオオヨシキリのヨシ原選択に及ぼす影響
14:00	J107 金谷 弦(東北大院・理・生物)・菊地永祐(東北大・東北アジア研セ) 底生動物の定着および成長過程に対する遊離硫化水素の影響	K107 水田 拓(京大・理・動物) マダガスカルサンコウチョウの巣の形質と捕食されやすさとの関係
14:15	J108 遊藤正秀(京大・生態研セ)・O. Timoshkin(ロシア陸水研) 湖沼沿岸帯における食物連鎖と生物多様性：バイカル・琵琶・タンガニカ・マラウィ湖の比較からの試論	K108 岡奈理子・佐藤文男(山階鳥類研) 御蔵島繁殖オオミズナギドリ回遊生態 - 衛星対応送信機による渡去期から越冬前半期の索餌移動生態の解明 -
14:30	J109 野澤洋耕・野島 哲・渡慶次睦範(九大・天草) 高緯度サンゴ群集の群集維持機構	K109 千田麻由(北大・低温研)・新妻靖章(科学振興事業団)・高木昌興(大阪市大・理)・綿貫 豊(北大・農) 造卵期におけるウミネコのクラッチサイズ決定機構について
14:45	J110 野島 哲(九大院・理・臨海) 天草西岸におけるサンゴの北上について	K110 森下英美子(東大・生物多様性)・他14名 PHSを利用したハシブトガラスの日周行動パターンの解析

3月26日(火)

開始時刻	J会場	K会場	
	<b>動物群集</b>	<b>動物の個体群生態</b>	
15:00	J111 部奈千晶(琉大・理工・海洋環境)・Robert van Woestik(フロリダ工科大・生物) The impact of two bleaching events and typhoon damages on the survival of juvenile corals in Okinawa, Japan.	K111 吉村 仁・藤木誉行・河合孝尚・雨甲斐広康(静岡大・工・システム)高崎山の奇形サルの発生原因について	
15:15	J112 佐藤香織(自然研)・他5名 東カリマントンにおける森林火災が齧歯類群集に与えた影響	K112 霜田真理子(東大院・農)・南 正人・大西信正(星野リゾート・ビックイ)・高槻成紀(東大・総博)金華山島のニホンジカメスのメスにかかる授乳の負担	
15:30	J113 加藤和弘(東大・農・緑地植物実験所)・藤田 薫(日本野鳥の会サンクチュアリセンター)・樋口広芳(東大・農・生物多様性)三宅島2000年噴火の鳥類への影響	K113 五十嵐知行(東大・農・野性)・高槻成紀(東大・博)尾瀬湿原を利用するシカの食性	
15:45	J114 綿貫 豊・出口智広(北大・農・動物生態)・高橋晃周(英国南極局)・加藤明子(国立極地研)対馬暖流勢力の変動が2種の潜水性海鳥の餌構成を通じて魚資源に影響するか?	K114 門脇正史・遠藤好和(筑波大・農林技術セ)・玉手英利・清水綾子(石巻専修大・理工)・遠藤 徹(筑波大・農林技術セ)静岡県南アルプス地域におけるニホンジカ個体群の遺伝生態的特性	
16:00	J115 出口智広(北大院・農・動物生態)・中多章文(北海道水試)・高橋晃周(British Antarctic Survey)・加藤明子(極地研)・綿貫 豊(北大・農・動物生態)対馬暖流の北上勢力が海鳥の餌と繁殖成績に与える影響	K115 渡辺伸一・中西 希・伊澤雅子(琉大・理・生態)・阪口法明(環境省)・土肥昭夫(九大・理・生物)多時期のLANDSAT TMデータを用いた土地被覆解析とイリオモテヤマネコの生息状況の時系変化	
16:15	J116 岸 大弼(北大院・農・北方森林保全)・村上正志・前川光司(北大・フィールド科学セ)・中野 繁(京大・生態研セ)捕食性魚類・藻類食水生昆虫・付着藻類の3者系に対する水温の影響	K116 松原 幹(京大・理・人類進化論)アメリジェニン遺伝子判定による野生ヒガシローランドゴリラの性判定	
16:30	J117 西田隆義・岡田陽介・本間 淳(京大・農・昆虫生態)鳥の捕食は陸上の植食性昆虫群集にどのくらい影響をあたえているのか?	K117 村上興正(京大・理・動物)・松田道雄・大門 誠(ヴェトナム造林技術開発プロ)・Hiep, E. (FSSIV) ヴィエトナムにおけるメラルーカ樹種の野そ被害とその防除法	
16:45	J118 時 坤・井村 治・森本信生・佐々木寛幸(畜産草地研)放牧草地における鳥類の環境選択	K118 芝田史仁(大阪市立大院・理・動物社会)生息地の飽和度とヒメネズミにおける出生性比操作	
17:00			
17:30	<b>自由集会</b>	<b>自由集会</b>	
	W7 陸上生態系における腐食流入：パターンとプロセス	W8 生態学における数理的手法：21世紀の生態モデリングにむけて	
19:30			

3月27日(水)

開始時刻	A会場	B会場	C会場
	<b>保全・景観生態</b>	<b>植物と動物の相互関係</b>	<b>植物群集・群落</b>
9:00	A201 安田雅俊・山田文雄・川路則友(森林総研・鳥獣生態)・山崎晃司・中島政明(茨城県自然博)汚れつちまつた悲しみに-野生動物におけるダイオキシン類の生物濃縮		C201 沖津 進(千葉大・園芸)南極昭和基地周辺に分布する主要藓類の生態的性質比較
9:15	A202 森 敬介(九大院・理・臨海)・保田淑昭・山口雅子(国立水俣病総合研究セ)その後の水俣湾 ベントスの水銀汚染モニタリング調査		C202 増沢武弘(静大・理・生物)高山植物の生理生態 I- Cassiope (イワヒゲ属)の形態・生理生態的特性 -
9:30	A203 岡 雅文(信州大院・農)・大窪久美子(信州大・農・森林)赤石山脈三峰川水系における帰化植物フサフジウツギ及び在来近縁種フジウツギの分布状況と環境条件	B203 福田淳子・高柳 敦(京大・農・森林生物)大型植食動物による被食とハイイヌガヤの衰退との関係	C203 鈴木和次郎・菊池 賢・金指あや子(森林総研)稀少樹種ハナノキを含む森林群集の組成・構造とその成立過程
9:45	A204 大谷雅人(東大・農学生命科学)・他7名絶滅危惧種カッコソウの保全	B204 内藤俊彦(東北大・附属植物園)・木村吉幸(福島大・教育・生物)尾瀬御池湿原周辺のニホンジカ	C204 高岡貞夫・西川和正(専修大・文・環境地理)地形・地質条件に規定される山地斜面のカラマツ林の分布
10:00	A205 新井隆介(信州大院・農)・大窪久美子(信州大・農・森林)長野県上伊那地方における絶滅危惧種フクジュソウ属2種の自生地分布と群落特性	B205 西本裕美・日野輝明(森林総研・関西支所)・柴田昌三(京大・農)ニホンジカがミヤコザサに与える影響:地上部と地下部の比較	C205 豊原源太郎・黒田有寿茂・向井誠二(広島大院・理)宮島における森林群落の遷移 I. 植生図化による遷移の把握
10:15	A206 土田勝義(信州大・農・森林)天竜川河川敷のカワラノギク(イナノギク)の生態と保全	B206 大谷達也(森林総研・東北)ヤクシマザルの消化管通過による種子生残率の低下	C206 黒田有寿茂・向井誠二・豊原源太郎(広島大・院・理)宮島における森林群落の遷移 II. 遷移系列
10:30	A207 大森威宏(群馬県立自然史博)群馬県西部における絶滅危惧雑草・トキホコリの分布と生育環境	B207 鈴木俊介(滋賀県大院・環境科学)・他5名 タイ・カオヤイ国立公園の熱帯季節林における地上性哺乳類・鳥類の果実利用	C207 平吹喜彦・會田憲之・我妻祐子(宮城教育大・教育)中間温帯北縁域に位置する温帯混交林の地理的変遷:立地に依存した植物種の置換機構
10:45	A208 岩田洋佳(森林総研)・松永壮太(筑波大・農林)・上條隆志(筑波大・農林)・津村義彦(森林総研)三宅島の緑化にむけて-伊豆諸島におけるヤシャブシ、イタドリ、ススキの遺伝的な固有性の評価-	B208 和田 岳(大阪市立自然史博)冬の果実はいつなくなるか? 果実食鳥類の個体数の影響について	C208 本間秀和・福嶋 司(東京農工大・農)山地斜面におけるブナ林・イヌブナ林の分布パターンとその成立要因
11:00	A209 戸田光彦(自然環境研究セ)・他6名西表島における移入種オオヒキガエルの発見状況と対策	B209 内野 敬・西平守孝(東北大院・生命科学)オキナワアナジャコの活動がマングロープ湿地の植生に与える影響	C209 田中涼子(横浜国大院・工・植生)小池文人(横浜国大院・環境情報)都市近郊に残された里地的景観における地域フロアの生態学的特性と群集
11:15	A210 前園泰徳・宮下 直(東大・農・生物多様性)外来魚駆除のジレンマ-ブラックバスが表面化させたアメリカザリガニの水草への影響-	B210 内海俊介・大串隆之(京大・生態学研究セ)穿孔性昆虫が新しい資源を創り出す	C210 那須浩郎(総研大院・国際日本研究)・澤井祐紀・藤木利之(国際日本文化研究セ)後期完新世の海水準変動に対する塩性湿地植物群の消長

3月27日(水)

開始時刻	A会場	B会場	C会場
	<b>保全・景観生態</b>	<b>植物と動物の相互関係</b>	<b>植物群集・群落</b>
11:30	A211 浅沼友子(東大・農)・五箇公一(国環研)・鷲谷いづみ(東大・農)・米田昌浩(アビ(株))・丹羽里美(国環研)マルハナバチの商品化に伴う生態学的問題～遺伝的変異の攪乱のおそれ	B211 塩見正衛(茨城大・理)・王詩平(中国科学院・植物研)・秋山 侃(岐阜大・流環研)内蒙古シリングロ草原のシステムモデル	C211 松下啓佑(千葉大院・自然科学)・百原新(千葉大・園芸)ローム質土壌の花粉分析に基づく山梨県大泉村谷戸城跡の植生復元
11:45	A212 五箇公一(国立環境研)・小島啓史(タイコ・エレクトロニクス)輸入クワガタの脅威 - クワガタ商品化における生態学的問題		C212 紀藤典夫(北教大・函館)・新谷世生子 気候の急激な温暖化にตอบสนองする植生の変化速度: 最終氷期/完新世境界の例
12:00	<p>この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています</p>		
14:00	<b>企画シンポジウム</b> S1 生物多様性への生態学的アプローチ	<b>企画シンポジウム</b> S2 Community Ecology 2002: deciphering community patterns.	<b>企画シンポジウム</b> S3 森林群集における階層間の相互作用
17:00			

3月27日(水)

開始時刻	D会場	E会場	F会場
	<b>数理生態</b>	<b>遷移・更新</b>	<b>植物の生理生態</b>
9:00	D201 中道礼一郎(東大・農) 遺伝的アルゴリズムによる自然集団のQTL解析手法	E201 勝又暢之(千葉大院・自然科学)・沖津進(千葉大・園)・南 佳典(玉川大・農) 富士山亜高山帯大規模風害跡地における蘚苔類群落の動態	F201 上原 崇・伊野良夫(早稲田大・教・生物) 遷移の進行に伴うハイイロキゴケの光応答性の変化
9:15	D202 吹田正治・堀田真一・岸野洋久(東大・農) 遺伝子拡散距離の最尤推定:不完全データに基づく父性解析	E202 杉村康司(千葉大院・自然科学)・沖津進(千葉大・園芸) 筑波山における樹幹着生蘚苔類の分布と森林構成樹種との関係	F202 野田 響(東大院・農生命)・村岡裕由(岐阜大・流域環境研セ)・鷲谷いづみ(東大院・農生命) 異なる光・土壌水分環境におけるサクラソウのバイオマス蓄積と形態的・生理的特性
9:30	D203 横溝裕行・巖佐 庸・山下 仁(九大・理・生物) 変動環境における最適保全戦略の数理的研究	E203 Zhou, Jin・Tachibana, H.(北教大・教・旭) Natural recovery of mire vegetation of Tennyogahara, the Taisetsu Mountains, Japan	F203 磯海のぞみ・鈴木絵美・山村靖夫(茨城大・理・生態)・中野隆志(山梨県・環境科学研) 亜高山帯の常緑性草本ベニバナイチヤクソウの標高にともなう貯蔵物質の動態について
9:45	D204 大澤恭子(奈良女大・人間文化)・川崎廣吉(同志社大・工)・高須夫悟・重定南奈子(奈良女大・理) 再帰的攪乱と多様性	E204 森 章・武田博清(京大・農・森林生態) 亜高山性針葉樹稚樹の成長に対する針広混交の影響	F204 谷 享・工藤 洋・可知直毅(都立大・理・生物) 光の増加に対する林床草本オサバグサの根系の反応
10:00	D205 杵崎のり子(奈良女大院・人間文化)・川崎廣吉(同志社大・工)・高須夫悟・重定南奈子(奈良女大・理) 格子状分断環境における侵入生物の伝播速度	E205 矢野慶介・高橋邦秀・渋谷正人・斎藤秀之(北大院・農・造林) 腐朽倒木上でのエゾマツとトドマツ実生・稚樹の生育ハビタットの違い	F205 小見山章・大根瑞江・加藤正吾(岐阜大・農) 同一斜面に生えるヒノキとミズナラの根系解析
10:15	D206 木村紀雄(東大・海洋研) 水産資源モデルにおけるアグリゲーション	E206 丸山立一(岩大院・農)・丸山まさみ(北広島市松葉町)・紺野康夫(帯広畜産大・生態系保護) トドマツ-エゾマツ林における針葉樹稚樹の倒木更新について - 10年間の観察 -	F206 サシトーン・ボンバーン(岐阜大・連農)・小林正典・加藤正吾・小見山章(岐阜大・農) Root analysis for a mangrove (Xylocarpus granatum )
10:30	D207 吉山浩平(京大・生態研セ)・中島久男(立命館大・理工) 植物プランクトン空間パターンにおけるカストロフ	E207 杉田久志(森林総研・東北)・高橋利彦(木工舎「ゆい」) 八幡平における密なササ型林床のオシラビソ林の更新過程 - 林冠下のササ刈り部分がオシラビソの定着・成長に及ぼす影響 -	F207 竹田真知子(滋賀県立大院・環境科学)・籠谷泰行・野間直彦・荻野和彦(滋賀県立大・環境科学) プナ林構成樹種の無機元素の樹体内分布
10:45	D208 田中嘉成(中央大・経) 捕食者と被食者の共進化による三種系モデル群集の崩壊	E208 蒔田明史(秋田県大・生物資源)・斎藤智之・陶山佳久(東北大院・農)・西脇亜也(宮崎大・農)・牧田 肇(弘前大・農学生命) ササ群落は20年間で回復したか? ... 一斉開花枯死後のチシマザサ実生由来個体群のクローン動態	F208 小池孝良(北大・生物圏フィールドセンター)・松木佐和子(北大・農・北方森林保全) Yamaji, K. (Univ. Joensuu, Dept. Biol.)・丸山 温(森林総研・北海道) 高CO <sub>2</sub> 条件で生育したシラカンバとブナの被食防衛物質
11:00	D209 山内 淳・山村則男(京大・生態研セ) 植物の最適フェノロジーから見た Grazing Optimization の進化的背景	E209 水野一晴(京大・アジア・アフリカ)・山縣耕太郎(上越教育大・社会系) ナミブ砂漠における植物分布と環境	F209 香山雅純(北大・農)・他9名 蛇紋岩土壌に植栽したアカエゾマツ、エゾマツ、ヨーロッパトウヒの生育特性
11:15	D210 石井励一郎(京大・生態研)・Michael J. Crawley (Imperial College, Dept. Biology) 植食を介した植物の多種共存: 防衛投資と隣接効果についての考察	E210 小倉明子(東邦大院・理)・由良 浩(千葉県立中央博) 砂浜における内陸性植物の生育阻害要因 1. フィールド編	F210 清野嘉之(森林総研・森林植生)・他5名 スギ林の間伐と間伐1年目の花粉生産量

3月27日(水)

開始時刻	D会場	E会場	F会場
	<b>数理生態</b>	<b>遷移・更新</b>	<b>植物の生理生態</b>
11:30	D211 山村則男(京大・生態研セ)・谷内茂雄(地球研・研究部)生態系レベルの多様性を説明する自己組織化モデル:生産者と分解者の共進化	E211 由良 浩(千葉県立中央博)・小倉明子(東邦大院・理)砂浜における内陸性植物の生育阻害要因 2. ラボ編	F211 ○長尾精文(科学技術振興事業団)・清野嘉之・九島宏道・奥田史郎(森林総研)スギの花芽着生数と成長量に及ぼす温度の影響
11:45	D212 奥野由美子(奈良女大・人間文化)托卵系の卵模様の共進化に関する個体ベースモデル	E212 大野啓一(横浜国大院)・宋鍾碩(韓国・安東大)・安永熙(韓国・中央大)日本と韓国の河口干潟の塩生植生	F212 表 寿一・澤田晃子・鈴木清久・押金健吾(創価大・工・生物工)ビスフェノールA・BESが植物の細胞および形態学的に及ぼす影響
12:00	この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています		
14:00	<b>企画シンポジウム</b> S4 生態学とIT その2	<b>企画シンポジウム</b> S5 フィールドの寄生虫生態学	<b>企画シンポジウム</b> S6 エコインフォマティクス:化学生態学の新展開
17:00			
17:30	<b>自由集会</b> W9 半島マレーシアにおける一斉開花2001	<b>自由集会</b> W10 周防灘と長島(上関原子力発電所建設予定地)の生物多様性	<b>自由集会</b> W11 Matter Flow and Ecosystems
19:30			

3月27日(水)

開始時刻	G会場	H会場	I会場
	<b>植物の個体群生態</b>	<b>物質循環</b>	<b>行動・社会</b>
9:00	G201 原島 高・渡邊定元(立正大・地球・環シ)ハイマツ束生稚樹の種内関係	H201 下川元三(愛媛大・農・生物資源)モミ・ツガ林の森林バイオマス	
9:15	G202 加藤悦史(北大院・地球環境)・日浦勉(北大・北方生物圏フィールド科学セ)大量開花に関連したハクウンボクの繁殖のコスト	H202 田邊裕美(千葉大院・自然科学)・中野隆志・阿部良子・大塚俊之(山梨県環境科学研)富士山溶岩流上に成立したアカマツ林の物質生産、物質分配と窒素利用	
9:30	G203 石田 清(森林総研・関西)ホオノキの結実に現れる近交弱勢とその集団間変異	H203 安立美奈子(岐阜大・流環研)・別宮有紀子(都留文科大)・W. Rashidah (FRIM)・奥田敏統(国立環境研)・小泉博(岐阜大・流環研)マレーシアの天然林、二次林、ヤシ園における土壌呼吸速度の季節変化	I203 浅井芝樹・山岸 哲(京大・動物)・江口和洋(九大・生物科学)協同繁殖するアカオオハシモスの条件的性比操作
9:45	G204 宮崎祐子・船田 良(北大院・農)・日浦 勉(北大・苫小牧研究林)光合成同化産物の果実への転流パターン-13Cトレーサ法による追跡-	H204 梁乃申・藤沼康実・井上 元(国立環境研・地球環境研セ)多点自動開閉式チャンパーを用いた苫小牧カラマツ林での土壌呼吸の連続測定	I204 江口和洋(九大院・理・生物)・山岸哲(京大院・理・動物)アカオオハシモスの抱卵行動と孵化パターン
10:00	G205 生方正俊・上野真一・山田浩雄(林木育種センター)ケヤキ天然林の遺伝的構造	H205 李 美善・中根周歩・中坪孝之(広島大院・生物圏)・小泉 博(岐阜大・流環研セ)冷温帯落葉広葉樹林における総土壌呼吸量に占める根の呼吸量の季節変化および年推定	I205 藤岡正博(中央農研・鳥獣害)集団サイズを決める資源動態モデルとサギ類での実証
10:15	G206 石原正恵・菊喜真八郎(京大・農・森林生物)カンバ4種における繁殖とシュート(長・短枝)の分枝	H206 広田 充・加藤知道(筑波大院・生物科学)・唐艶鴻(環境研)・関川清広(玉川大・農)・鞠子 茂(筑波大・生物)中国青海高山湿地における土壌ガス環境と植生分布・水生植物のガス交換機能からの考察	I206 佐藤喜和(東大・農)・高槻成紀(東大・博物館)北海道東部浦幌地域におけるヒグマのエゾシカ採食割合の増加
10:30	G207 皆川礼子・中村武久(東農大・環境・森林)Xylocarpus granatum の繁殖生態	H207 鞠子 茂(筑波大・生物)CO <sub>2</sub> ・CH <sub>4</sub> ・N <sub>2</sub> Oガスの収支から評価される生態系の温暖化影響力	I207 揚妻直樹(北大・フィールド科学セ・苫小牧)自然林と人工林におけるヤクシカの生息密度・食物選択および植生に与える影響の比較
10:45	G208 山田俊弘(熊本大・環境共生)・鈴木英治(鹿児島大・理)淡水湿地林におけるDryobalanops rappa の萌芽特性	H208 関川清広(玉川大・農)・広田 充(筑波大・生物科学)・唐艶鴻(国立環境研・生物圏環境)・小泉 博(岐阜大・流環研)・鞠子 茂(筑波大・生物科学)中国青海高山草原における土壌呼吸速度の日変化	I208 沓掛展之(日本学術振興会、東大・総合文化)野生チンパンジーのピジランス行動
11:00	G209 宮本尚子(北海道育種場)・生方正俊・飯塚和也(林木育種セ)・半田孝俊(北海道育種場)茨城県十王町におけるサクラバハハノキ天然林の萌芽特性および局所集団の動態	H209 莫文紅(筑波大・生物)・他6名 中国内蒙古草原における耕地化に伴う土壌CO <sub>2</sub> 放出の変化	I209 杉浦秀樹・藤田志歩・光永総子・清水慶子(京大・霊長類研)雌ニホンザルにおける交尾相手の選択性
11:15	G210 片桐 章(茨城大・理・生態)・他5名異なる2つの放牧条件下におけるテリハノイバラ個体群の生長様式	H210 古 松(国立環境研)生物圏環境研究領域チベット高原草原生態系におけるCO <sub>2</sub> とH <sub>2</sub> Oフラックスの日変動特徴	I210 伊藤 悠(静岡大・理工)・泰中啓一(静岡大・工)パッチモデルでの囚人のジレンマゲームにおけるallC戦略の優位

3月27日(水)

開始時刻	G会場	H会場	I会場
11:30	<b>植物の個体群生態</b> G211 安部哲人(森林総研)密度の異なる生育地におけるアオキの個体群動態	<b>物質循環</b> H211 矢崎至洋(岐阜大・流環研セ)・鞠子茂(筑波大・生物科学)・三枝信子(産業技術総研)・小泉 博(岐阜大・流環研セ)菅平ススキ草原における炭素の動態および収支	<b>行動・社会</b> I211 坂田智之(静岡大院・理工)・泰中啓一(静岡大・工・システム)モデル生態系における単食・雑食種の共存
11:45	G212 小川一治(名大院・生命農学)スギ人工林におけるY-N曲線と自己間引き曲線		
12:00	12:00~13:00 自由集会 W21 「群落談話会」の説明会		
	この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています		
14:00	この時間帯(14~17時)は、 A・B・C・D・E・F 会場で 企画シンポジウムです		
17:00			
17:30	<b>自由集会</b> W12 第7回植生地理学の視点：ナラ型森林の植生地理	<b>自由集会</b> W13 森の学校 / 田んぼの学校：協働の科学への誘い	<b>自由集会</b> W14 魚類の繁殖をめぐる代替戦略・戦術
19:30			

3月27日(水)

開始時刻	J会場	K会場	M・N・O・P 会場
	<b>動物群集</b>	<b>動物の個体群生態</b>	
9:00		K201 長田智史(琉大・理工・海洋環境)沖縄島残波岬の礁池及び礁斜面における定着板実験	<b>ポスターは9:00~12:00の間に展示して下さい</b>
9:15	J202 丹羽 慈(東大・農・森林動物)・加賀谷 隆(東大院・農学生命・森林動物)ニホンジカの糞が落葉分解及び土壌動物群集に与える影響	K202 磯村尚子・浜田圭子(東北大院・理・生物)・西平守孝(東北大院・生命科学)Anthopleura sp.の局所的適応-保育幼稚体の動態に基づく検討-	
9:30	J203 山本哲也(広島大院・国際協力)森林に生息する大型土壌動物とその環境嗜好性-主としてカニムシ目とワラジムシ目について-	K203 田中克彦(志津川町自然環境活用セ)シカツノウミクワガタにおける環境性決定とその意義	
9:45	J204 網崎裕子・加賀谷隆(東大院・農学生命・森林動物)林道法面露岩帯の無脊椎動物群集2-ハビタット構造と外来性リターは造網性クモ類の密度制限要因か?	K204 Carolus Paruntu・渡慶次睦範(九大院・理・臨海)Intraspecific variation in growth and reproductive characteristic among population of Nerita japonica	
10:00	J205 古知 新(京大・農・昆虫生態)糞虫の資源嗜好性と生息場所選択	K205 福田朱里(筑波大・バイオシステム)・内海真生(筑波大・農工)沼沢生態系における淡水産巻貝サカマキガイおよびモノアラガイ個体群の季節動態	
10:15	J206 大澤正嗣(山梨森総研)中部山岳地帯におけるカラマツ人工林と広葉樹天然林の甲虫相の比較	K206 田中哲夫(姫工大・自然環境研)・山科ゆみ子(兵庫陸水生物)・三浦靖弘(柏原工業高)カワバタモロコの個体群動態-生活史と生産量-	
10:30	J207 大野慎介・城本啓子・菅野格朗・八木立夫・桜谷保之(近畿大・農・昆)木津川(京都府京田辺市)における植生別に見た昆虫類バイオマスの季節的变化	K207 立川賢一(東大・海洋研)ウナギの漁獲量減少率とダム建設との関連	
10:45	J208 玉沢智人(山形大院・農)・安田弘法(山形大・農)アブラムシを中心としたヨモギ節足動物群集構造の場所間比較	K208 平松和也(大阪府淡水試)・萩原智和・豊島淳暢・細谷和海(近畿大・農・水産)大阪府安威川におけるアジメドジョウの河川内分布と分布制限要因	
11:00	J209 滝澤 匡(岩手大・農)・安田弘法(山形大・農)アブラムシとアリの共生関係がテントウムシの種間関係におよぼす影響	K209 田淵 研・天野 洋(千葉大院・自然科学・応動昆)イヌツゲタマバエは寄生蜂をどのように回避しているのか?	
11:15	J210 梶田幸江・安田弘法(山形大・農)2種捕食性テントウムシがアブラムシ捕食者群集におよぼす影響	K210 渡部 健・谷垣岳人・西 浩孝・竹内剛(京大・理・動物)・丑丸敦史(京大・生態研セ)オオセンチコガネとセンチコガネの地理的な色彩変異について	

3月27日(水)

開始時刻	J会場	K会場	M・N・O・P 会場
11:30	<p><b>動物群集</b></p> <p>J211                      瀧本 岳(京大・生態学研セ)                      Apparent Competition, Apparent Mutualism, and Optimal Habitat Choice of Predators</p>	<p><b>動物の個体群生態</b></p> <p>K211                      河合孝尚・雨甲斐広康・吉村 仁(静大・工・システム) 昆虫の山頂集中行動の流れ進化プロセス</p>	<p><b>ポスターは9:00~12:00の間に展示して下さい</b></p>
11:45		<p>K212                      椿 宜高(国立環境研) 野生生物の生息地の好適性評価と大スケール分布の地図化の試み: カワトンボを例に</p>	
12:00	<p><b>この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています</b></p>		<p>M: 保全・景観生態 M202-224                      M: 動植物の相互関係 M225-239                      N: 植物の個体群生態 N201-218                      N: 遷移・更新 N219-227                      N: 植物の生理生態 N228-240                      O: 植物群落・群集 O201-218                      O: 分子生態 O219-227                      O: 数理生態 O228-234                      P: 物質循環 P201-212                      P: 行動・社会 P213-220                      P: 動物の個体群生態 P221-229                      P: 動物群集 P230-237</p>
14:00	<p><b>この時間帯(14~17時)は、 A・B・C・D・E・F 会場で 企画シンポジウムです</b></p>		<p><b>ポスターは14:00~17:15の間に撤去して下さい</b></p>
17:00			
17:30	<p><b>自由集会</b></p> <p>W15                      アジア・太平洋地域の植生の分布と分化</p>	<p><b>自由集会</b></p> <p>W16                      思わぬところから間接効果</p>	
19:30			

3月28日(木)

開始時刻	A会場	B会場	C会場
9:00	<b>企画シンポジウム</b> S7 進化生態学における分子生物学的アプローチ	Annals of Botany Lecture 10:00 ~ 11:30 L1 Stuart Chapin, III. Impact of plant traits on ecosystem and global processes	<b>企画シンポジウム</b> S8 資源獲得戦略としての樹木の形作
12:00	この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています		
14:00			

3月28日(木)

開始時刻	D会場	E会場	M・N・O・P 会場
9:00	<b>企画シンポジウム</b> S9 生態学におけるデータマイニング - 労して得たデータは最大限に活かす	<b>企画シンポジウム</b> S10 環境行政に果たす景観生態学の役割	<b>ポスターは9:00~12:00                      の間に展示して下さい</b>  M: 保全・景観生態 M301-325 M: 動植物の相互関係 M326-339 N: 植物の個体群生態 N301-321 N: 遷移・更新 N322-330 N: 植物の生理生態 N331-340 O: 植物群落・群集 O301-315 O: 物質生産 O316-325 O: 物質循環 O326-336 P: 古生態 P301-305 P: 行動・社会 P306-312 P: 動物の個体群生態 P313-327 P: 動物群集 P328-334
12:00	この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています		
14:00	<b>*** 仙台国際センター ***</b> <b>総 会</b>		<b>ポスターは14:00~17:15                      の間に撤去して下さい</b>
15:30	宮地賞授賞式 論文賞授賞式		
16:00	宮地賞受賞記念講演		
17:00			
18:00	<b>*** 江陽グランドホテル ***</b> <b>懇 親 会</b>		
20:00			

3月29日（金）

開始時刻	A会場	B会場	C会場
9:00	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T1 生態系間の相互作用</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T2 植物とポリネーターの相互作用</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T3 物質循環駆動系における種間相互作用と群集動態：R. L. Lindemanを越えて</p>
12:00	<p>この時間帯（12～14時）は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています</p>		
14:00	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T6 生態学における道具としての分子マーカー</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T7 Systematic Conservation Planningの理念と課題</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T8 動物による種子散布過程における制限とその変動</p>
17:00			

3月29日（金）

開始時刻	D会場	E会場	F会場
9:00	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T4 植物の被食防御反応をめぐる生態系の相互作用</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T5 大自由度系の生態学</p>	
12:00	<p>この時間帯（12～14時）は、 M・N・O・P 会場で ポスター発表を行なっています</p>		
14:00	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T9 環境変動に対する生物集団の応答</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T10 植物と動物におけるエネルギー消費</p>	<p><b>公募シンポジウム</b></p> <p>T11 子供サイズ変異の進化</p>
17:00			
17:15	<p><b>自由集会</b></p> <p>W17 生態系ネットワーク計画を目的としたランドスケープ評価のためのアプローチ：茨城県水戸近郊をケーススタディー地域として</p>	<p><b>自由集会</b></p> <p>W18 中国の乾燥・半乾燥地の水・養分環境と植物の生理生態学</p>	<p><b>自由集会</b></p> <p>W19 日本における外来種の実態と外来種管理法制定に向けて</p>
19:15			

3月29日(金)

開始時刻	G会場	M・N・O・P会場
9:00	この時間帯(9~12時)は、A・B・C・D・E会場で 公募シンポジウムです	ポスターは9:00~12:00 の間に掲示して下さい  M:保全・景観生態 M401-424 M:動植物の相互関係 M425-437 N:植物の個体群生態 N401-424 N:遷移・更新 N425-434 N:植物の生理生態 N435-439 O:植物群落・群集 O401-415 O:分子生態 O416-419 O:進化・種多様性 O420-432 O:物質循環 O433-438 P:行動・社会 P401-409 P:動物の個体群生態 P410-429 P:動物群集 P430-437
12:00		
14:00		
14:00	この時間帯(12~14時)は、 M・N・O・P会場で ポスター発表を行なっています	ポスターは14:00~17:15 の間に撤去して下さい
17:00	この時間帯(14~17時)は、A・B・C・D・E・F会場で 公募シンポジウムです	
17:15	自由集会 W20 日本人のふるさと尾瀬・保護戦略	
19:15		

3月30日(土)

開始時刻	仙台市近郊雑木林	仙台国際センター	川渡共同セミナーセンター
9:00	自由集会 W21 群落談話会		
12:00			
13:00		公開シンポジウム 生態学とは— 生態学が解き明かす世界	
16:00			
19:30			自由集会 W22 フェノロジー研究会「DNAで見る 植物の生活史」
21:30			

「宮地賞」「論文賞」授賞式・受賞講演

3 月 28 日(木) 15:30～17:00 仙台国際センター

第 6 回宮地賞受賞者・受賞記念講演演題

宮竹貴久 (岡山大学農学部)  
「種分化を引き起こす遺伝相関」

鎌田直人 (金沢大学大学院自然科学研究科)  
「ブナ林の昆虫をめぐる生物間の相互作用」

日本生態学会 第 5 回公開シンポジウム

3 月 30 日(土) 13:00～16:00 仙台国際センター

## 生態学とは - 生態学が解き明かす世界

企画者 日本生態学会公開講演会実行委員会

平成 13 年度文部科学省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」補助事業

現在、日本では、エコロジーという言葉は、「環境に配慮する」という意味で使われている。しかし、生態学的なさまざまな自然現象は、かならずしも「人間にとって好ましい自然状態」に「配慮」がなされているわけではない。

生態学 (ECOLOGY) は、環境と生物との関わり、生物間の相互作用など、生物個体とその集団や群集を扱う科学の基礎分野の一つである。生態学では、地球上の環境をふくめたマクロなレベルでの生命現象を解明することをめざしている。さらに、生態学で様々な現象が解明されることで、環境問題や生物保全に対する重要な指針を与えることになる。

今回の公開講演会では、生態学の第一線では、どのようなテーマでどのようなことが明らかになっているのかを、一般の方々に紹介することが目的である。また、科学の一分野としての生態学を理解してもらっただけでなく、地球環境の保全などに生態学はどのような役割を果たせるのかを紹介したい。内容的には、高校生の方々でも理解できるような講演を企画している。

プロローグ：生態学とエコロジー・・・酒井 聡樹 (東北大学)  
生物多様性の共存メカニズムをさぐる・・・甲山 隆司 (北海道大学)  
環境と生物のかかわりをさぐる・・・占部城太郎 (京都大学)  
生物多様性の進化のしくみをさぐる・・・河田 雅圭 (東北大学)  
生物保全の指針を示す・・・松田 裕之 (東京大学)

質問および討論

企画シンポジウム 3月27日(水) 14:00~17:00 A会場

## S1 生物多様性への生態学的アプローチ

企画者 永田 俊・宮本 康(京大・生態研センター)・丑丸敦史(地球研)・戸田正憲(北大・低温研)

今日、生物多様性は生態学のみならず、分類学、進化学、分子生物学など様々な分野の研究対象となっています。このとき生態学はどのような視点からの生物多様性へのアプローチが可能かつ有効なのでしょう。

今回のシンポジウムでは、多様な種の共存下で生物間相互作用などの群集プロセスを通じて生態系機能が生み出される過程に注目します。このテーマに関して近年おこなわれた研究を若手の研究者を中心に発表していただきます。また、生物多様性の持つ生態系機能がさらなる生物多様性を再生産していく過程についても議論します。さらに、生物多様性-生態系機能の研究から生物多様性の保全研究につなげるために、これから何が必要なのかを議論します。

### 演 題

#### オープニングコメント

戸田正憲(北大・低温研)

#### 1. アジア熱帯における植物 送粉者共生関係の多様性

百瀬邦泰(京大・アジア・アフリカ研)

#### 2. 森林 河川相互作用系が生み出す生物多様性

村上正志(北大・苫小牧演習林)

#### 3. シロアリの多様性と生態系機能

兵藤不二夫(京大・生態研センター)

#### 4. 生物多様性と生態系の安定性

谷内茂雄(地球研)

#### コメント

永田 俊(京大・生態研センター)

#### 総合討議

企画シンポジウム 3月27日(水) 14:00~17:00 B会場

## S2 Community Ecology 2002- deciphering community patterns

*Organizer:* M Tokeshi (Kyushu University)

Following the last year's successful symposium ("Community Ecology 2001") on the theme of linking ecosystems and ideas in the study of community ecology, this symposium aims to provide an opportunity to discuss various aspects of community ecology in its broad sense.

The theme for this year is 'deciphering community patterns'. There are many issues involved in analysing and interpreting community patterns on different scales of space and time and these issues are often crucial in making inferences about community structure in various assemblages. Invited speakers have been asked to identify those issues and/or factors considered to be important for the particular systems that they are familiar with and present a general picture of the community organization in those systems. As usual, the symposium will be conducted in English only. All are welcome; graduate researchers are particularly encouraged to participate in the discussion.

Chair : M. Tokeshi (Kyushu University)

1. Teiji Sota (Kyoto University)

“Patterns in species assemblage and evolutionary history: a case study of Japanese *Carabus*”

2. Tsunenori Koga (Nara University)

“Parasites in a crab: does infection by digenean trematodes imply high species richness in a local assemblage?”

3. Teruyoshi Nagamitsu (Forestry and Forest Products Research Institute)

“Mechanisms of coexistence in intertidal scavenging-predatory snails: a new perspective”

4. Masahiro Nakaoka (Chiba University)

“Regional variation in species coexistence pattern of seagrasses in multispecific meadows”

5. Nobuko Tuno (Nagasaki University)

“Community ecology of mycophagous insects: importance of mutualistic association with fungi”

企画シンポジウム 3月27日(水) 14:00~17:00 C会場

### S3 森林群集における階層間の相互作用

企画者 清和研二(東北大院・農)・原登志彦(北大・低温研)・箕口秀夫(新潟大院・農)

成熟した森林は垂直方向に発達した階層構造をもつ。近年、階層間の相互作用が樹木の更新成功や群集構造に大きな影響を与えていることが明らかになってきている。今回は特に森林の下層を優占するササを介した階層間の相互作用に関する最新の知見をもとに、森林の群集構造の決定メカニズムについて考えてみたい。近年、樹木実生の更新成功は林冠を占める高木層よりも、むしろ下層を占めるササ・低木層の種組成や空間分布パターンがよりダイレクトに影響を与えることが報告されている。一方、ササや低木の分布も又、上層林冠木の動態や種組成などに強く影響されると考えられ、高木層はササへの直接的な影響を介して最下層の実生の動態に間接的に影響していると考えられる。一方、ササ・低木層はその旺盛な代謝活動によって、水分・養分などの資源を巡る競争を引き起こし、逆に上層林冠木の成長や動態にも影響することも示唆されてきている。本シンポジウムでは、生物的・非生物的な様々な要因を介した階層間の相互作用が樹木の更新成功さらには森林全体の群集構造に大きな影響を与えている事例を報告し、森林の群集構造を考える上で、いかに階層間の双方向の相互作用といった視点が重要であるかを議論したい。

#### 演題

1. 生理的統合機能をもつチマキザサの空間分布パターン

齋藤智之・清和研二・陶山佳久(東北大院・農)・西脇亜也(宮崎大・農)

2. 林冠層とササ層がブナの更新成功に及ぼす影響 ギャップ・林冠木の組成による違い

富田瑞樹・清和研二(東北大院・農)

3. 生物間相互作用に焦点をあてたササの一斉枯死に伴う階層構造の変化が森林の再生過程に与える効果

阿部みどり(新潟大院・自然科学)・箕口秀夫(新潟大・農)

4. 林床チシマザサの除去がダケカンバ林の水分動態に与える影響

石井弘明・小林剛・田畑あずさ・隅田明洋・原登志彦(北大・低温研)・植村滋(北大・フィールド科セ・森林)・高橋耕一(信大・理)

5. 林床チシマザサの除去がダケカンバ林冠葉のフェノロジーを変える:

土壤条件の変化と個葉~シュートレベルでの光合成生産

小林剛・石井弘明・田畑あずさ・隅田明洋・原登志彦(北大・低温研)・植村滋(北大・フィールド科セ・森林)・高橋耕一(信大・理)・半場祐子(岡大・資生研)・中谷暢丈(広大院・生物圏)・及川真平(東北大・理)

企画シンポジウム 3月27日(水) 14:00~17:00 D会場

## S4 生態学とIT, その2

企画者 樋口広芳(東大・農・生物多様性科学)・安田雅俊(森林総研)

最近の科学技術の発達により、これまで不可能であったいろいろな生態情報の収集や解析が可能になってきている。情報通信技術をいかに有効に利用するかは、今後の生態学研究・教育が抱える最重要課題の一つである。昨年3月の大会で、「生態学とIT」と題したシンポジウムを開いた。ここでは、長距離の渡り追跡、広範囲にわたる生息環境解析、遠隔地からの生態・行動情報の収集・蓄積などに焦点をあて、これらの技術や方法の現状や将来について紹介し、議論した。今回の「生態学とIT, その2」は、その続編である。ここでは、第1回目で取り上げた関連分野のその後の発達や、生物多様性にかかわる情報のコンピュータデータベースの構築と利用などについて紹介し、議論していきたい。

### 演題

#### 1. はじめに

樋口広芳(東大・農・生物多様性科学)

#### 2. 衛星追跡データに基づく鳥の渡り戦略の解明

植田睦之(日本野鳥の会・研究センター)・樋口広芳(東大・農・生物多様性科学)

#### 3. GPSによる野生動物の追跡の現状と課題

梶 光一・宇野裕之(北海道環境研・自然環境)・伊吾田宏正(北大・北方生物圏)

#### 4. 自動遠隔記録装置による生物季節情報の収集と解析

中北 理(森林総研・森林管理)

#### 5. 地理情報システムを用いた自然系博物館での研究と環境教育

三橋弘宗(兵庫県立人と自然の博物館)

総合討論

企画シンポジウム 3月27日(水) 14:00~17:00 E会場

## S5 フィールドの寄生虫生態学

企画者 横畑泰志(富山大・教育)・浦部美佐子(科学技術特別研究員・土木研究所自然共生研究センター)

### 演題

#### ・淡水域の指標生物としての寄生虫

浦部美佐子(科学技術特別研究員・土木研究所自然共生研究センター)

#### ・魚類に寄生する鉤頭虫の個体数を決定する要因

長澤和也(水産総合研究センター・養殖研究所)

#### ・野ネズミの寄生線虫の生物地理学入門

浅川満彦(酪農学園大学・獣医)

#### ・温血性脊椎動物の寄生蠕虫の群集生態学

横畑泰志(富山大・教育)

企画シンポジウム 3月27日(水) 14:00~17:00 F会場

## S6 エコインフォマティクス：化学生態学の新展開

企画者 高林純示(京都大学・生態学研究センター)

生態系における生物間の相互作用は、「食う-食われる」という関係が最も馴染みが深く、生態学もこの様な関係を主軸として構築されてきた。しかし、1980年代より化学物質を介した情報のやりとりが、種内のみならず種間においても行われているという事が様々な系で明らかになってきた。このような知見は、生態学を「食う-食われる」関係に加えて、「情報をやりとりする」関係をも考慮して再構築するという仮題をつきつけている。

本企画では、生態系における「情報をやりとりする」関係に注目する。「環境中で多様な生物が化学情報によって相互作用し情報ネットワーク構造を形作っている」と考えた場合、それを「解析や理解、応用するための方法や技術」に対しエコインフォマティクスという用語を提唱する。最新のエコインフォマティクスがどのように生態系の理解につながるのかについて、有機化学的視点(西田律夫)、操作実験的視点(戒能洋一)、生理学的視点(尾崎まみこ)に立って話題提供を頂き、エコインフォマティクスをすこしでも身近な利用可能な技術として理解してもらおうというのが企画の意図です。

### 演題

- ・イントロ・司会  
高林純示(京都大学・生態学研究センター)
- ・昆虫と植物の仲をとりにつ化学情報  
西田律夫(京都大学大学院・農学研究科)
- ・寄生蜂の学習行動と風洞を用いた定量化  
戒能洋一(筑波大学・農林学系)
- ・化学感覚に基づく昆虫の行動決定神経機構  
尾崎まみこ(京都工芸繊維大学・繊維学部)
- ・総合討論

企画シンポジウム 3月28日(木) 9:00~12:00 A会場

## S7 生態学における分子生物学的アプローチ2：性決定・性表現の分子生態学

企画者 矢原徹一(九大院・理)・河田雅圭(東北大院・生命科学)

分子生物学的アプローチは、いまや生物学全体の共通の道具となりつつある。これまで分子生物学ともっとも縁が遠いと考えられてきた生態学においても、分子生物学的アプローチの活用は急速に進み、「分子生態学」と呼ばれる分野がほぼ確立されたと言って良い。しかし、多くの生態学研究者にとっては、分子生物学的アプローチが生態学においてどの程度革新的な役割をになうものか、よくわからないというのが実状ではないだろうか。

本シンポジウムでは、熊本大会におけるシンポジウムの趣旨を受け継ぎ、生態学における分子生物学的アプローチの有効性について紹介し、わが国における分子生態学に貢献したい。昨年のシンポジウムでは、幅広いテーマを取り上げて、さまざまな分子生物学的アプローチの有効性を紹介した。本シンポジウムでは、「性決定・性表現の分子生態学」に焦点をしぼる。生物の性比や性表現は、進化生態学的研究が大きな成功をおさめたテーマとして代表的なものである。一方で、生物の性決定や性表現に関しては、遺伝子レベルでの研究が大きく発展しつつあり、分子生物学的な研究と進化生態学的な研究の接点が拡大している。本シンポジウムでは、性決定や性表現に関して遺伝子レベルで研究を行っている分子生物学者と、分子生物学的アプローチを活用して成果をあげている生態学者が同席して討論することで、2つの分野の意思疎通をはかり、統合的な研究を進展させるきっかけを作りたい

## 演 題

- ・ Evolution of sexual dimorphism in *Silene dioica*  
Lynda Delph (Indiana University) (日本生態学会海外招待講演者)
- ・ *Silene dioica* の性染色体に関する分子生物学  
松永幸大 (東大・新領域創成)
- ・ ツチガエルの性染色体・性決定機構の進化  
三浦郁夫 (広島大・両生類研究施設)
- ・ ツチガエルの季節的性比調節  
向坂幸雄 (九大・理・生態)
- ・ ダイコンの細胞質雄性不稔性の分子生物学  
寺地 徹 (京都産業大・工)
- ・ ハマダイコンにおける雌株頻度と細胞質雄性不稔性の関係  
村山恵子 (九大・理・生態)
- ・ マメゾウムシにおける *Wolbachia* 遺伝子の伝達様式  
今藤夏子 (東大・総合文化)・深津武馬 (産業技術総研)・嶋田正和 (東大・総合文化)
- ・ 討 論

企画シンポジウム 3月28日(木) 9:00~12:00 C会場

## S8 資源獲得戦略としての樹木の形作り - 「枝葉末節」から本質へ

企画者 竹中明夫 (国立環境研)・甲山隆司 (北海道大学)

本シンポジウムの目的は、樹木の形作りのプロセスを資源獲得戦略としてとらえた研究を持ち寄り、樹木の生き方の統合的な理解へとつなげていく方向を議論することである。動物は空間中を動きまわって資源を獲得するが、植物は空間中に葉や根を配置して資源を獲得する。植物の形作りは動物のエサ採り行動になぞらえることができる。生物の生き方を理解するうえで、資源の獲得のしかたを明らかにすることの重要性は論を待たない。

これまで、植物のマクロな形の機能的な側面の研究は、個体の高さ、投影面積、葉面積の垂直分布などに注目してきた。しかし近年、とくに樹木の地上部を中心に、形作りのプロセスにより深く踏み込んだ研究が盛んになってきた。個々のシュートの茎と葉のバランス、分枝パターン、枝の伸びる方向などを調べ、その資源獲得上の意義を考える研究である。「枝葉末節」の挙動が樹木の形作りと生き方に密接に関連しているとの思いがこうした研究を支えている。

けれども、そうした研究の成果を、樹木の生き方の生態学的な文脈のなかでの理解へとつなげるのはそう容易ではない。本シンポジウムでは、形態の形成プロセスだけではなく、生理的な視点、力学的な視点、モデルによる統合のありかたなども含めて広い視野から今後の研究の方向をさぐっていきいたい。

## 演 題

- ・ 個体の中の個体群：シュート動態と幹の成長  
鈴木 牧 (京都大学)
- ・ 茎の性質は植物の生長速度を変えるのか？  
種子田春彦 (東京大学)
- ・ ヤマハンノキ当年枝の繁殖における資源的独立性と当年枝動態からみた豊凶現象  
長谷川成明 (京都大学)
- ・ 「樹形のパイプモデル」で「樹形」を理解してもいいのだろうか？ - スギとヒノキの事例  
城田徹央・作田耕太郎 (九州大学)
- ・ 個体間の相互作用と樹冠のダイナミクス  
梅木 清 (北海道立林試)

- ・木を見て森も見る - 幹・枝構造の成因と群落動態へのかかわり  
隅田明洋（北海道大学）
- ・木の形づくりとその機能的意味 - 研究の流れと今後の展望  
竹中明夫（国立環境研）
- ・総合討論

企画シンポジウム 3月28日（木） 9:00～12:00 D会場

## S9 生態学におけるデータマイニング—労して得たデータは最大限に活かす

企画者 粕谷英一（九大・理・生物）

せっかく汗してデータを集めても、興味深い傾向を見出せなかったり、仮説は立てられても検証できなかったりする場合は少なくないが、そんな時、どうもデータを有効に利用していないのではないかと、もどかしい気分になる事もある。本シンポジウムでは、実際の生態学のデータに対して、既存の統計手法に新しい工夫を凝らす、あるいは新しい手法を開発するなどしながら新しい発見やより確かな仮説の検証等を試みている研究を発表する。

### 演 題

- ・はじめに  
オーガナイザー
- ・生物の形を計る - 形の定量的評価とその遺伝研究 -  
岩田洋佳（森林総合研究所）
- ・繰り返し測定データの扱い方  
山村光司（農環研）
- ・ヤンバル亜熱帯林の遷移系列に沿った空間構造解析  
久保田康裕（鹿児島大・教育）・島谷健一郎（統計数理研究所）
- ・複雑巨大なデータを解析する計算生態学的手法  
久保拓弥（FRSGC）
- ・データ解析がパターンを隠すとき  
粕谷英一（九大・理・生物）

企画シンポジウム 3月28日（木） 9:00～12:00 E会場

## S10 環境行政に果たす景観生態学の役割

企画者 中越信和（広島大・総合）・森本幸裕（京都大・農）

景観生態学は、すでに欧米では土地利用計画や地域開発計画及び自然保護行政に応用され、多くの実績を挙げてきている。その特徴は研究者の知見を行政が巧みに計画に組み込んでいることや、環境問題の解決の主要な手段として用いていることにある。しかし、景観生態学の研究業績の少ない我国では、この状態にはない。ところで、1997年の法アセスでは、新たな評価項目として「生態系」が加わり、景観生態学というエコトープが保全の対象となった。この「生態系」の評価をめくり、現在様々な調査・研究がなされてきているが、本来景観生態学からの貢献は大きなものと考えられる。そこで今回、今後の我国の環境行政にどのように景観生態学が関与してゆくべきか、実際に行われている調査・研究の成果を中間的にまとめることで検討したい。本シンポジウムは環境省が取り組んでいる事業と、これらに国際景観生態学会日本支部会のメンバーが関係している複数の件案を題材としている。実学としての生態学を嗜好している方々の多数の参加を期待している。

## 演 題

1. 趣旨説明 景観生態学の使命  
中越信和 (広島大・総合)
2. 景観生態学: 理論・実際・応用  
原慶太郎 (東京情報大・環境情報)
3. 自然環境データ整備と GIS—自然環境保全基礎調査を中心として  
笹岡達男 (環境省自然環境局生物多様性センター)
4. 自然環境分野の環境アセスメントへの GIS の活用  
増澤 直 (朝日航洋株式会社)
5. 景観生態学の概念を用いた環境影響評価手法 - 広島県山県郡加計町温井ダムを事例として  
日笠 睦 ((財)自然環境研究センター)
6. まとめと展望  
大島康行 ((財)自然環境研究センター)
7. コメンテーター  
上杉哲郎 (環境省総合環境政策局環境影響評価課)  
鎌田磨人 (徳島大・工)  
和田秀次 ((財)広島県環境保健協会)  
逸見一郎 ((株)地域環境計画)

招待講演 3月28日(木) 10:00~11:30 B会場

### L1 Annals of Botany Lecture

企画者: 広瀬忠樹 (東北大院・生命科学)

講 師: F. Stuart Chapin (University of Alaska, Fairbanks, USA)

演 題: Impact of plant traits on ecosystem and global processes

コメンテーター: 舘野正樹 (東大・理・日光植物園)

#### Annals of Botany Lecture について

Annals of Botany は植物科学のすべての分野をカバーする国際誌で、編集事務局はイギリス、アメリカ、オーストラリア、日本に置かれています。Annals of Botany Lecture は植物科学の交流と発展のために、植物科学関連の学会に対して、世界の第一線で活躍している研究者の講演会を支援しようとするものです。論文は Annals of Botany に掲載されることになっています。F. Stuart Chapin はアラスカ大学極地生物学研究所教授で、植物の生理生態、とくに資源利用の研究でよく知られています。今回は地球レベルでの生態系機能における植物の役割についてお話していただきます。

公募式シンポジウム 3月29日(金) 9:00~12:00 A会場

## T1 生態系間の相互作用

企画者 向井 宏(北大・フィールド科学センター)

陸上生態系と河川生態系、河川生態系と沿岸生態系など allochthonous inputs が無視できない生態系間の相互作用について、いろんな立場からその影響の大きさや影響のあり方を報告・議論する。

### 演 題

1. 土壌生態系が支える地上生態系の捕食者：野外実験による検証  
宮下 直・島崎 彩(東大・農・生物多様性)
2. アオサギを介した海洋から陸上への物質供給機構  
堀 正和・上野裕介・野田隆史(北大院・水産・多様性生物)
3. 質の異なる生息地間の移動が巻き添え競争の結果に及ぼす影響  
難波利幸(大女大・理・環境理)・石田真紀(大女大・学芸・基礎理)
4. 流域物質循環におよぼす河畔ヤナギ林の影響の定量的評価  
佐々木晶子・中坪孝之(広島大院・生物圏)
5. 溪畔林から溪流に供給される有機物の季節変化とその要因  
河内香織・加賀谷隆(東大院・農学生命)・長坂晶子(北海道立林業試験場)・柳井清治(北海道工業大学)
6. 河川における河原の重要性について - 千曲川中流域における河原の植生と羽化昆虫の利用状況  
平林公男・中本信忠(信州大・繊維・応生)
7. 長良川下流域における河口堰運用後の魚類群集の変化  
~ 淡水性魚類群集と汽水性魚類群集の推移様式について ~  
竹門康弘(京都大学水資源研究センター)・新村安雄(フォトエコロジスト)
8. 森林で生産された落ち葉は河口域の生物にどのような影響を与えるのか?  
柳井清治(道工大)・長坂晶子(道立林試)・櫻井 泉(道立中央水試)
9. 森林生態系の伐採管理が河川・湖沼生態系へ及ぼす影響  
草加伸吾(琵琶湖博物館)・濱端悦治(琵琶湖研究所)
10. 厚岸水系における定常時と非定常時における陸域からの物質移動  
向井 宏(北大・フィールド科学センター・厚岸臨海)・飯泉 仁(北水研)・岸 道郎(北大院・水産)
11. 森林 - 溪流 - 海域に至る有機物の流出過程  
長坂晶子(道立林試)・柳井清治(道工大)・河内香織(東大院・農)

公募式シンポジウム 3月29日(金) 9:00~12:00 B会場

## T2 植物とポリネーターの相互作用

企画者 石井 博・酒井聡樹(東北大院・生命科学)

植物を訪れるポリネーターは、植物の特性に応じて、最適に採餌するような行動をとるだろう。一方、植物もポリネーターの行動に応じた特性を進化させている。中には、ポリネーターの行動を、自分に都合の良いようにコントロールする特性を身につけているものもある。本シンポジウムでは、植物とポリネーターの相互作用が、「ポリネーターの行動」や「植物の特性」に与えてきた影響について議論したい。「動物行動学」と「植物の繁殖生態学」両立場からの視点で、議論が深まることを期待する。植物とポリネーターの組み合わせごとに様々な「植物とポリネーターの相互作用」が、一般的な法則でとらえられるようになれば幸い。

## 演 題

- ・植物のポリネーション戦略：何が問題か？何を測ればよいのか？  
工藤 岳（北大院・地球環境）
- ・花に訪れる虫の理屈 - 昆虫からみた花との相互作用 -  
横山 潤（東北大院・生命科学）
- ・ヤマハッカ属 (*Isodon*) の送粉システムをめぐって  
鈴木和雄（山口県立大）
- ・北陸の丘陵地における送粉系の特性  
宇都宮大輔（金沢大院・生態）・中村浩二（金沢大・理）
- ・植物の開花スケジュールの個体間変異を記述する  
鈴木まほろ（京大・生態研セ）
- ・花の寿命を介した、植物によるポリネーター行動の操作  
石井 博（東北大院・生命科学）
- ・アレチヌスビトハギにおけるツルガハキリバチの訪花直前飛行  
後藤晴美・川窪伸光（岐阜大・農・多様性）
- ・二種類の送粉者によるフタバガキの花散布パターンの違いとその意義 - 一斉開花で送粉促進されるか -  
田中健太（京大・生態研）・井鷲裕司（広島大・総合科学）・中静 透（地環研）

公募式シンポジウム 3月29日（金） 9:00~12:00 C会場

## T3 物質環境駆動系における種間相互作用と群集動態：R.L.Lindeman を越えて

企画者 占部城太郎・高津文人（京大・生態研センター）

食物網は物質循環の中心的駆動系にもかかわらず、前者を扱う群集生態学と後者を扱う生態系生態学の乖離は今だ大きく、地球・地域環境の保全にはこの乖離を埋めることが急務である。このような観点から、物質循環に果たす種間相互作用の役割や生物多様性と物質循環の関係に焦点をあてた、陸域・水圏の研究を広く紹介する。

## 演 題

### 1. はじめに（問題提起）

占部城太郎（京大・生態研）

### 生食連鎖

### 2. 植食が海藻多様性へ及ぼす影響は栄養塩レベルによって変化するか？

野田隆史（北大院・水産科学）

### 3. モンゴル草原生態系における食物連鎖構造の安定同位体比による解析

空間スケールからみた食物網の独立性の評価

高津文人・西川絢子・藤田 昇・和田英太郎（京大・生態研）

### 4. 昆虫が食物網内の物質流を制御する ヤナギ群集におけるステムゴールの役割

宮本 康・大串隆之（京大・生態研）

### 5. カワウの採食行動によって形成される物質輸送経路 -琵琶湖地域におけるカワウの胃内容物分析からの考察-

亀田佳代子（琵琶湖博）・川村めぐみ（近畿大・農・水産）

### 腐食連鎖

### 6. 微生物ループの研究には夢がいっぱい 湖沼・海洋から河川の超マイクロハピタットまで

中野伸一（愛媛大・CMES）

7. ピナツボ火山泥流地帯の植生回復過程に植物—微生物間相互作用を見る  
齊藤雅典 (畜産草地研)・W. Barraquio (Univ. of Philippines)
8. 分解者群集の駆動力による森林生長の周期変動  
金子信博・伊藤雅道・橋本みのり・豊田 鮎・松田久美子 (横浜国大・環境情報)
9. 北部アルゼンチンの水田耕作地におけるオオアリの塚形成と土壤動物相の変化、及びその食性  
陀安一郎 (LEST, IRD, France)・P. Folgarait (Quilmes Univ., Argentina)・  
F. Thomas, T. Desjardins, P. Lavelle (LEST, IRD, France)
10. 土壤分解系における炭素の動態と土壤動物の機能群の関係  
武田博清 (京大院・農学)

公募式シンポジウム 3月29日(金) 9:00~12:00 D会場

## T4 植物の被食防御反応をめぐる生態系の相互作用

企画者 鎌田直人 (金沢大・理)・市岡孝朗 (名大院・農)

植食者に対して植物が無防備ではないことが注目されるようになって久しい。1970年代に行われた Feeny や Baltensweler の研究に刺激され、1980年代以降多くの研究が行われてきた。最近では、環境傾度と誘導防御の関係、植食者に対する誘導防御が別の植食者に及ぼす影響、アリ類や菌類などの共生者が植物に与える防衛効果の評価、植物 植食者 捕食者という三つの栄養段階にまたがる系の動態など、新しい観点から研究が展開されている。防御する植物の側からも、防御にかかるコストや、生長と防御の間での資源分配パターンに関する研究が行われている。このシンポジウムでは、植物の被食防御反応をめぐる生物間の相互作用に焦点を当てながら、植物・昆虫・動物・物質循環など、さまざまな材料、手法、切り口をもって、さまざまな観点から研究をおこなっている人たちに発表していただき、生態系において被食防御反応がもつ役割の重要性に対する一般的な理解を深め、今後の新しい研究の展開に寄与することを目指す。

### 演 題

1. ブナの葉の被食レベルにみられる個体内変異  
山崎理正 (京大・農)
2. オノエヤナギ(*Salix sachalinensis*)のフェノール性成分に関する種内変異が植食性昆虫の群集構造に与える影響  
林 珠乃・大串隆之 (京大・生態学研究センター)
3. 青葉アルコール雰囲気下のシラカバ葉で生合成されるフェノール類のマイマイガに与える影響  
渡邊定元 (立正大・地球・環シ)
4. コナラ・アベマキにおける奪葉後の窒素経済  
彦坂幸毅・高島輝之・壁谷大介・広瀬忠樹 (東北大院・生命科学)・鎌田直人 (金沢大院・自然科学)
5. ブナの誘導防御反応：化学的防御 VS 物理的防御  
國久有希・鎌田直人 (金沢大院・自然科学)・和田直也 (富山大)
6. オオバギ属植物における被食防御戦略の多様性  
野村昌弘 (科学技術振興事業団)・畑田 彩 (京大・生態研)・村瀬 香・市岡孝朗 (名大・生命農)・  
市野隆雄 (信州大・理)
7. 防御戦略の多様性が植物の共存を可能にする？ アリ植物オオバギ属におけるアリ防衛強度の種間比較  
畑田 彩 (京大・生態研)・野村昌弘 (科学技術振興事業団)・村瀬 香・市岡孝朗 (名大・生命農)・  
市野隆雄 (信州大・理)・中静 透 (総合地環研)・北山兼弘 (京大・生態研)
8. 植物の最適防御戦略～不確かな情報を利用して～  
首藤絵美・巖佐 庸 (九大・理・生物)

## T5 大自由度系の生態学

企画者 巖佐 庸(九大・理)・嶋田正和(東大院・総文)

熱帯林に限らず私達の周りの自然には非常に多数の種が存在し、それぞれ相互作用をしている。また多数の個体が環境等に応じて分布する中で互いに影響し、複雑な空間構造をつくりだす。

これまで生態学では、比較的少数の自由度をもつシステムの挙動を参考にして、ダイナミックスや共存、パターンの生成を理解してきた。しかし、近年いくつかの対象系で、多数の個体、多数の種を同時に追跡して把握することができるようになるとともに、コンピュータの高速化により大自由度のシステムが示す挙動を追求める方法が可能になってきた。それに対応した新しい生態学コンセプトが求められている。

非会員である複雑系科学の専門家を講演者をまじえて、新しい可能性について議論したい。

### 演 題

1. 企画の意図説明を含めて

時間空間データから生態プロセスを知る：大きなバイアスとモンテカルロ法による除去、熱帯季節林 50ha プロットを例に

巖佐 庸・佐竹暁子(九大・理・生物)・箱山 洋(北海区水産研)・Hubbell, S. P. (Georgia 大, Botany)

2. 大規模で複雑なシステムは安定か？ - 生態学のパラドックスへの解答 -

時田恵一郎(阪大・サイバー)

3. 自由度の可変的なレプリケータ方程式

安富 歩(東大・総文)

4. 多様性は偶然に変動するか？

吉田勝彦(国環研・多様性P)

5. 固着性生物の共存メカニズム：空間競争と環境変動の影響

向草世香・巖佐 庸(九大・理・生物)・Sean Connolly (James Cook 大)

6. 植物-1 植食者-2 捕食寄生者系の動態：自由度可変性と進化の影響

津田みどり(九大院・農)

7. メタ群集の時空間動態：ソノラ砂漠のマメゾウムシ - 寄生蜂群集

嶋田正和・阿部大雅(東大・広域システム)

8. 総合討論

嶋田正和(東大院・総文)

## T6 生態学における道具としての分子マーカー

企画者 陶山佳久(東北大院・農)・牧 雅之(東北大院・生命科学)

生態学者にとっての分子マーカーも、今や巻き尺や天秤と同じようにあたりまえに使われる「単なる道具」として認知される時代がやってきた。それぞれの研究者がそれぞれの研究対象種に分子マーカーを用いることで、似たようなデータを目にするようになった反面、目的にあわせた分析手法のスタンダードがはっきりしてきたといえる。さらに、一歩進んだ分子マーカーの利用法も見られるようになり、第二世代の分子生態学的研究が始まりつつあると言える。そこで本シンポジウムでは、生態学者が分子マーカーを道具として用いた研究を概観することにより、我が国における分子生態学的研究の現状を把握するとともに、新しい研究アプローチの糸口を見いだす機会を提供したいと考えている。

## 演 題

1. 北海道での male-killing 系統マイマイガの mtDNA ハプロタイプ  
小野菜々子・時下進一・山形秀夫・ 東浦康友 (東京薬大・生命)・石原通雄 (兵庫医大・生物)
2. イチイ・キャラボクにおける葉緑体 DNA の超多型塩基配列と地理的分布  
近藤俊明 (広島大院・国際協力)・陶山佳久 (東北大院・農)・井鷲裕司 (広島大・ 総)
3. 発芽時期別のブナ実生の遺伝的多様性と生存率  
高橋 誠 (林育セ・東北)
4. 豊岡盆地におけるコブシ集団の遺伝的組成  
内藤和明 (姫路工大・自然研)・井鷲裕司 (広島大・総合科学)
5. プロット内全個体位置図プラスそれらの遺伝子という型のデータの応用例  
島谷健一郎 (統計数理研究所)
6. 単コロニーからの DNA 増幅法を用いたプランクトン藻類の遺伝子交流解析の可能性  
鈴木祥弘・岩谷直博・村上 悟 (神大・理・生物科学)
7. 分子マーカーによるニホンジカ個体群構造の調査  
玉手英利 (石巻専修大・理工)
8. マイクロサテライトをベースとしたオガサワラグワ、シマグワ及びその雑種を識別する共優性 SCAR  
マーカーの開発と実生および成木集団の解析  
谷 尚樹・吉丸博志・河原孝行 (森林総研)
9. *Neobalanocarpus heimii* (Dipterocarpaceae)における繁殖時期と交配距離の関係  
小沼明弘 (新潟大院・自然科学)・内藤洋子 (京大院・農)・津村義彦 (森林総研)・  
Lee, S. L.・Norwati, M. (Forest Research Institute, Malaysia)・奥田敏統 (国立環境研)
10. オニグルミ自然個体群における花粉親としての繁殖成功の実測  
木村 恵・陶山佳久・清和研二 (東北大院・農)・Keith Woeste (USDA Forest Service)
11. ブナ天然林におけるブナ当年生実生の種子親特定  
陶山佳久 (東北大院・農)・高橋淳子 (東北大・農)・高橋 誠 (林育セ・東北)・  
富田瑞樹・上野直人・清和研二 (東北大院・農)

公募式シンポジウム 3月29日(金) 14:00~17:00 B会場

## T7 Systematic Conservation Planning の理念と課題

企画者 松田裕之 (東大・海洋研)・石浜史子 (東大院・農)・黒田啓行 (遠洋水研)・高橋 亮 (理研)

生物多様性の保全は、一意的な最適解が得られる問題ではない。かといって恣意的な保全策では客観性に欠ける。昨年 の Nature では豪州研究者により Systematic Conservation Planning が取り上げられ、目標設定から事後調査、保全措置に至るプロセスを明確にしようという取り組みが紹介された (Margules ら 2000)。このような手続きは、生態学固有の特徴である保護区の規模と隣接関係、メタ個体群動態、遷移と攪乱の釣合い、回遊と移動、source - sink 動態、生息地改変の効果、進化プロセスそのものの保全を考慮すべきである。また、不確実性と予防原理に基づくリスク管理、多様な恵みを社会にもたらす中での合意形成の問題も避けては通れない。そこには、答えが出てから社会に提言する 20 世紀型の科学を超えるものが求められている。

保全策では理念よりも適用例が先行している側面がある。本シンポでは具体的な諸問題と Systematic Conservation Planning の概念を比較しつつ、望ましい科学的保全策の姿と問題点を明らかにすることを目的とする。

## 演 題

1. 流域管理のための新しい総合調査方法と Systematic Conservation Planning  
田中拓弥・谷内茂雄・和田英太郎 (総合地球環境学研究所)

2. 生息場所保全を計画するためのプロセスの提案 - 付着珪藻群集を対象として  
加藤和弘 (東大・農・緑地植物実験所)
3. 小笠原における外来樹種アカギの侵入と保全的森林管理指針  
田中信行 (森林総研・植物生態)・山下直子 (森林総研・北海道)・加茂皓一 (JIRCAS)
4. Irreplaceability を用いた評価 ; “ 里山 ” の生物多様性  
辻 宣行・椿 宜高 (国立環境研・生物多様性プロジェクト)
5. 人里水辺における合理的な生物多様性再生 - レッドリスト高次消費者個体群再生までの段階的ベースライン  
日鷹一雅 (愛媛大・農・附属農場)
6. ニホンジカの個体群動態と狩猟・農業・森林の関係性の解析と保護管理計画の検討  
坂田宏志 (姫工大/人自博)・濱崎伸一郎・岸本真弓 (WMO)・三橋弘宗 (人自博)・三橋亜紀 (神戸市)・  
横山真弓 (人自博)・三谷雅純 (姫工大/人自博)
7. 集団サイズと環境のゆらぎからみた大型哺乳類の保護地域のデザイン  
三浦慎悟・岡 輝樹・正木 隆 (森林総研・東北)・堀野真一 (森総研・つくば)
8. 総合討論  
司会 : 松田裕之 (東大・海洋研)・高橋 亮 (理研)

公募式シンポジウム 3月29日(金) 14:00~17:00 C会場

## T8 動物による種子散布過程における制限とその変動

企画者 野間直彦 (滋賀県立大学)・小南陽亮 (森林総研)

動物による種子散布プロセスには様々な制限が存在する。例えば、果実サイズと口径の関係にみられるような形質の組み合わせによる物理的な制限はかなり普遍的なものである。実際の種子散布プロセスにおいては、このような普遍的な制限以外に、わずかなロケーションや年によって変動する制限がみられ、種子散布プロセスに地域的な変異や年変動を生じさせる要因となっている。ここでは、その具体例をもとに、微妙に変動する制限によって植物や動物の特性がどのように変わりうるか、また、種子散布の成否にどのように影響するかについて討論する。

### 演 題

1. 大きな果実 / 種子を利用する動物はなーに？  
北村俊平・湯本貴和 (京大・生態研)・丸橋珠樹 (武蔵大・人文)・野間直彦 (滋賀県大・環境科学)・  
Pilai Poonswad (マヒドン大・理)
2. 果実資源の年変動によって、種子散布と捕食を使い分けるブタオザル  
丸橋珠樹 (武蔵大・人文)・北村俊平・湯本貴和 (京大・生態研)・野間直彦 (滋賀県大・環境科学)・  
Pilai Poonswad (マヒドン大・理)
3. ミズキの結実と散布パターンの年変動 - 東北から関東まで -  
正木 隆 (森林総研・東北)・中静 透 (京大・生態研センター)
4. ザゼンソウ種子のサイズ変異と野ネズミの貯食行動の関係  
杉浦康裕・植村 滋・野上啓行 (北大・農・北方森林保全)
5. 金沢市の里山におけるガマズミ属 (スイカズラ科) 5種の空間分布とフェノロジー  
横山将光 (金沢大院・生態)・中村浩二 (金沢大・理・生態)
6. 綾照葉樹林における鳥散布によるシードレインに対する台風攪乱の影響  
小南陽亮・永松 大・佐藤 保・齊藤 哲 (森林総研・九州)
7. 鳥散布植物樹冠下のシードレインに与える要因  
高橋一秋 (新潟大院・自然)・紙谷智彦 (新潟大・農)
8. タイ・カオヤイ国立公園におけるサイチョウの給餌パターン  
野間直彦 (滋賀県大・環境)・Pilai Poonswad (マヒドン大・理)・北村俊平・湯本貴和 (京大・生態研)

公募式シンポジウム 3月29日(金) 14:00~17:00 D会場

## T9 環境変動に対する生物集団の応答

企画者 斎藤 隆(北大・フィールド科学センター)

生物の集団は、空間的にも、時間的にも、これまで考えられていたよりも、多岐にわたる環境の変動に応答することが明らかにされつつある。近年、El Nino、the North Pacific Oscillation、the North Atlantic Oscillation など地球レベルでの環境変動がどのように生物集団に影響するのかが注目されているが、ランドスケープレベルや従来から研究されてきた地域レベルでの環境変動の重要性が減じているわけではない。また長期間にわたる個体群の隔離が遺伝的な多様性の喪失をもたらす具体例が報告されるなど、環境変動の時間的側面についてもこれまでの認識を改める必要に迫られている。このセッションでは、空間的、時間的に多様な環境変動に対して、生物集団が分布、個体数、生活史、形態などの変化を通じて、多様な応答を示していることを認識し、様々なスケールの効果を考えたい。

### 演 題

1. パイカル湖における水の鉛直混合が植物プランクトン群集に与える影響

加藤元海(京大・生態研)・野崎健太郎(滋賀県大)・P. P. Sherstyankin, N. P. Logacheva, I. V. Khanaev, N. A. Bondarenko (LIN SD RAS, Irkutsk, Russia)・日野修次(山形大・理)・中西正己(地球研)

2. 60年間の環境変動に対するミヤベイワナの形態的变化

小林春毅・前川光司(北大・フィールド科学センター)

3. 地球温暖化に対する植生の応答—特に日本列島の湿地植生を例として

藤原一繪・原田敦子(横浜国大院・環境情報)

4. グローバルな環境変動とローカルな花粉結合との交互作用が種子量の強い同調をつくりだす

佐竹暁子・巖佐 庸(九大・理・生物)

5. 気候要因がニホンジカの生活史に与える非対称な影響

立澤史郎(京大・理・動物生態)

6. 生息地破壊によって植食性昆虫のアウトブレイクがもたらされる可能性の理論的考察

近藤倫生(京大・生態研)

7. 変動環境と密度依存的性質の進化

河田雅圭(東北大院・生命科学)・澤田 寛(東北大院・理・生物)・横山 潤(東北大院・生命科学)

8. 季節性の地理的な違いがエゾヤチネズミの密度依存性に与える影響

斎藤 隆(北大・フィールド科学センター)

公募式シンポジウム 3月29日(金) 14:00~17:00 E会場

## T10 植物と動物におけるエネルギー消費

企画者 綿貫 豊(北大・農)・久米 篤(九大・農)

地球規模での二酸化炭素循環における生物活動の寄与を明らかにするため、陸上植物群落や海洋生物での呼吸を含む二酸化炭素放出過程の測定とモデルによる研究が進められている。その一方で、個体レベルの生存においても、繁殖への投資・蓄積と維持への分配を計算する上で呼吸によるエネルギー消費は重要な要素である。植物個体の生活史戦略研究における呼吸要素の重要性については、日本においても1960-70年代に盛んに研究されてきた伝統がある。また、動物においても様々なレベルのエネルギー消費の調節機構が明らかにされつつある。

このように、エネルギー消費は異なるスタンスで異なる材料を使って幅広く行われてきているが、その相互関係について議論される機会は少なかった。このシンポジウムは、呼吸とエネルギー消費をキーワードとして、研究テーマの差と材料の特異性を明確にし、新しい発想をもたらすことを目的とする。生態系の様々なレベルの研究者の参加を期待し、参加者間での発想の交換を歓迎する。

## 演 題

1. 異なる環境下における稚魚の代謝率と成長の関係：サケ科魚類を用いて  
山本俊昭（北大・農）・前川光司（北大・フィールド科学センター）
2. エネルギー制約下における動物の生理的調節  
新妻靖章（科学技術振興事業団）
3. 1960-70年代における日本の植物生態学での呼吸研究  
横井洋太（北里大・基礎科学センター・生物）
4. イネ科の作物とマメ科の作物の生産性の違い - 呼吸の観点から -  
信濃卓郎（北大・農）
5. 一年草の一生におけるエネルギー消費 - 呼吸消費も考慮に入れた物質分配 -  
衣笠利彦・彦坂幸毅・広瀬忠樹（東北大院・生命科学）
6. 根を含めた樹木個体呼吸の一般則 - 実生～老齢木、熱帯～亜寒帯 -  
森 茂太（森林総研・東北）

公募式シンポジウム 3月29日（金） 14:00～17:00 F会場

## T11 子供サイズ変異の進化

企画者 工藤慎一（鳴門教育大・学校教育）

生物分類群を問わず、種間あるいは個体群間で子供サイズ（と数）が大きく変異することは良く知られた事実であり、Smith-Fretwell モデル以降、この「子供サイズ問題」は進化生態学の古典的課題となった感がある。しかし、子供サイズの変異は、同一個体群に属する個体間あるいは同一個体内の子供間にさえ観察されることがある。このような子供サイズ変異の「適応」を疑問視する意見がある一方、その適応的進化を説明する理論も数多く発表されてきた。しかし、その検証は未だ十分とは言えず、新たな説明仮説の提出が現在も続いている。このシンポでは、個体間あるいは個体内の子供サイズ変異の進化に関する理論と実証両面の研究成果を対象生物の分類群に関わらず持ち寄り、我々の理解の到達点を明かにしてみたい。

## 演 題

1. 子供サイズ変異の進化：クラッチ内卵サイズ変異と位置効果仮説  
工藤慎一（鳴門教育大・学校教育・生物）
2. 大きさと数のトレードオフに関する理論的解析  
酒井聡樹（東北大院・生命科学）
3. キクイムシ類の子供サイズ  
梶村 恒（名大院・生命農・森林保護）
4. アユ卵サイズの個体群内変異  
井口恵一朗（中央水研）
5. ハブ（クサリヘビ科）の卵のクラッチ間・クラッチ内変異  
西村昌彦（沖縄県衛環研・ハブ）
6. 鳥類の卵サイズのクラッチ間（個体間）とクラッチ内の変異 - 簡単なレビューとモズの例  
高木昌興（大阪市大・理・生物）
7. 個体群内部の子供サイズ変異の理論  
原田泰志（三重大・生物資源）

自由集会 3月26日(火) 17:30~20:00 D会場

## W1 化学農薬と生物農薬、どちらが生物多様性にやさしいのか？ (アグロエコロジー第5弾)

企画者 日鷹一雅(愛媛大・農・農場)・鷺谷いづみ(東大院・生圏システム)

近年、地球にやさしい持続的農業というキャッチフレーズのもとで、減化学農薬、減化学肥料といった農業技術の開発・普及が進められている。2000年の農業基本法の改定に伴い、化学農薬の使用量を大幅に減らすことが国民的課題とされ、化学農薬による病害虫・雑草個体群の管理手段の代替技術として、生物農薬の技術開発・普及が重要視されている。と同時に人里の生物多様性保全が新しい農業基本法下で農業の多面的機能の一つにあげられ、直接支払い制度が導入されはじめている。

化学農薬は、環境ホルモンに代表されるような様々な環境問題を起こしてきているが、一概に、生物農薬のほうが「環境にやさしい」ともいえない。実用化されようとしている生物農薬の中には、在来種でない種が多く含まれており、生物多様性や生態系への影響が心配される。本シンポジウムでは、化学農薬と生物農薬には、生態学的にみてどのように異なる特性があるのか、またどちらが環境、特に生物多様性へのリスクを小さくできるのかについて討議の場を設け、生態学に基礎をおいた、本当の意味で環境にやさしい農業技術を構築するための方向性を探ってみよう。

### 演 題

#### I. 生物的防除の現状と最前線

##### 1. 生物農薬と化学農薬の研究と技術の最前線

鈴木芳人(独立法人中央農業研究機構)

##### 2. 環境稲作の現場から

宇根 豊(農と自然の研究所)

#### II. 生物多様性へのリスク

##### 1. 水田各種殺虫剤とカブトエビ、スクミリンゴガイ、合鴨についての影響評価

日鷹一雅(愛媛大・農・農場)

##### 2. 生物農薬による共生系の攪乱

加藤 真(京大・総合人間科学)

##### 3. 生態遺伝学から見た生物農薬のリスク

五箇公一(環境研)

#### III. 総括と総合討論

##### どちらがやさしいか？

鷺谷いづみ(東大院・生圏システム)

自由集会 3月26日(火) 17:30~20:00 E会場

## W2 秒単位で見る動物行動の新展開：データロガーが拓く行動生態研究

企画者 佐藤克文(極地研)・赤松友成(水工研)

従来観察が難しく、電波という媒体を用いた情報通信が出来ない水中を3次的に行動する動物の研究は、マイクロデータロガー(動物に装着可能なほど小型の記録計)の発達により、めざましい研究成果が挙がりつつある。1980年代より始まったデータロガーを用いた野外調査では、まず深度記録計が様々な潜水動物に用いられた。結果的に動物達が予想を上回る潜水能力を有することが明らかになってきた。その後、データロガーの小型化、データ容量の増大、センサーの多様化など、装置自体の性能が大きく向上すると同時に、装置の動物への装着・回収方法にも大

きな進展が見られ、対象動物も魚類（サケ、ヒラメ）・爬虫類（ウミガメ）・鳥類（海鳥）・哺乳類（アザラシ、イルカ、クジラ）へと広がりを見せつつある。例えば、これまでは回収が困難であったイルカやクジラからも、世界初のデータが得られつつある。深度と同時に、遊泳速度や体の細かい動きを表す加速度といった新たなパラメータも、秒以下の細かい時間スケールで測定できるようになった。また、水中の動物を取り巻く周辺情報として画像が得られるようになったことで、餌生物の分布情報に対応させて潜水捕食動物の行動を論ずることが可能となってきた。得られるデータの質・量の向上に伴い、研究の内容も、それまでの記述の段階を越えて、様々な理論の提示や仮説検証型の研究成果が挙がりつつある。現時点では水生動物のみを対象に用いられているデータロガーであるが、温度や心電、加速度や画像など、陸上動物や空を飛ぶ動物にも応用の可能性は広がっている。魚類から哺乳類を対象に現在研究を進めている講演者に、最新の研究成果を発表してもらおう。これらを題材として大いに議論を深めたい。データロガーを現在用いていない人々の聴講を特に歓迎する。

#### 演 題

- ・オーストラリアアシカの採餌潜水：遊泳速度の理論予測と潜水深度の予測可能性  
南川真吾（遠水研・科学振興事業団）
- ・母河回帰中のシロサケのエネルギー節約行動  
田中秀二（京大・情報・日本学術振興会）
- ・最適採餌理論による予測とその実証  
森 貴久（京大・理）
- ・マッコウクジラの潜水行動  
天野雅男（東大・海洋研）
- ・イルカのソナー行動  
赤松友成（水工研）
- ・アザラシ・ペンギンの潜水様式の比較行動学  
佐藤克文（極地研）

自由集会 3月26日（火） 17:30～20:00 F会場

### W3 干潟の復元は可能か？

企画者 野原精一（国立環境研究所）

干潟を取り巻く様々な状況の中で、復元事業が実施されています。このような時期に、生態学会以外の研究者の方に生態学者・学生へ話題提供していただき、「干潟の復元は可能か？」について議論をしたいと思います。内容は復元事例、人工干潟・自然干潟の比較、アセスの問題点、評価法のレビューです。

#### 演 題

- ・趣旨説明  
野原精一（国立環境研究所）
- ・アサリ生息地評価適性評価モデル（仮題）  
田中昌宏・柵瀬信夫（鹿島技術研究所・環境技術研究部）
- ・干潟の環境アセスメントの問題点（仮題）  
風呂田利夫（東邦大・理）
- ・生物環境の評価手法  
中村義治・齊藤 肇・明田定満（水産総合研究センター・水産工学研究所）

自由集会 3月26日(火) 17:30~20:00 G会場

## W4 植物の生理生態：生理生態学の視点からみた植生のパターンと群落構造

企画者 小林 剛(北大・低温研)・村岡裕由(岐大・流環研)・宮澤真一(阪大・理)

植物群落の分布や種組成、またその成り立ちや維持機構などを課題としている研究者にとって、生理生態は目にはっきりと見えないような細かいことを扱ったり、厳密な理論に基づいた難しいことをしているようで取りつきにくい、といった印象があるようです。

実際に、器官レベルでの生理的な環境応答などを主な測定対象としたような研究は精密なものではありますが、多種からなる野外の植物群落の分布や構造のイメージとは直結しにくいかも知れません。この一方で、生理生態学の研究で得た結果を理解するためには、対象とした材料の分布や生育地の群落構造などに関するデータが非常に重要な情報として頻繁に活用されています。それでは、生理生態学的なデータは、植物群落の分布や成立・維持機構などを理解するためにどのように役立てることが可能なのでしょうか？また、生理生態学的手法や理論をより大きなスケールにおける現象の理解のために応用することは可能なのでしょうか？

本集会では、植物の生理生態的特性に基づいて植物群落の振る舞いを理解しようとする試みが生態学全般に対して大きな影響力を持たらしてきたことについてあらためて概観するとともに、「植物の生理生態と分布との関連性」を重視したり、「構成種の生理生態的な側面を考慮しながら群落構造を調査」している研究者に話題を提供していただきます。そして、「ある植物がどうしてそこに存在しているのか」あるいは「どのように植物群落が形成されていったか」などの問題に対する生理生態的手法と考え方を活用したアプローチについて、様々なスケールを対象に考えてみたいと思います。

### 演 題

- ・スギ人工林における土壌の窒素無機化および硝化に関する性質と下層植物の分布との関係  
～植物の硝酸態窒素利用に関する特性は種の分布域に影響するか～  
小山里奈(京大・農)
- ・凍結融解によるエンボリズムは常緑広葉樹と常緑針葉樹との分布域の違いを説明できるか？  
種子田春彦(東大・理・日光植物園)
- ・林床の光環境にもとづいた日本海型-太平洋型ブナ林の更新様式の相違：ブナ実生の光合成生産から考えてみる  
島野光司(電中研・我孫子)

自由集会 3月26日(火) 17:30~20:00 H会場

## W5 ミミズの多面的機能～Soil Ecology：土壌のキーストン種．2．

企画者 伊藤雅道・金子信博(横浜国大・環境情報)

昨年はちょうど大発生を迎えたばかりのキシヤスデをとりあげたが、今年はミミズをとりあげる。ミミズ類はそこに存在しさえすれば他の土壌動物をはるかに圧倒する現存量を誇り、土壌微生物と密接な関係を持ちながら分解系の動きに大きな駆動力を与えている。単に分解に寄与するばかりでなく土壌の物理的構造にも大きな変化をもたらし、名実共に土壌での最大のエコシステムエンジニアと考えられ、不耕起農業やミミズコンポストなどミミズの機能を有効に利用する応用研究もさかんに行なわれている。また、食虫類、鳥類などの餌資源としても重要で、最近では異なった系を繋ぐインターフェイスとしての機能も注目されつつある。今回はこうしたミミズの持つ多面的な機能をさまざまな角度から明らかにする。

## 演 題

1. 日本産ミミズ類の多様性および種同定の問題点  
伊藤雅道 (横浜国大・環境情報)
2. 有珠山における火山灰からの土壌層形成に対するミミズの役割  
山口高志 (北大・地球環境)
3. 形態と行動 - ミミズ捕食者としての食虫類の適応進化  
横畑泰志 (富山大・教育・環境生物)
4. 生態系のなかのミミズ - 生物濃縮に注目して -  
安田雅俊 (森林総研)

## コメンテータ

渡辺弘之 (京大・農)

自由集会 3月26日(火) 17:30~20:00 I会場

## W6 四次元の生態学 - 花粉分析は景観復元の道具となりうるか? -

企画者 高原 光 (京都府大・農・演習林)・佐々木尚子 (京大院・農・森林科学)

古生態学は時間軸に重点をおいた生態学であるが、従来、空間スケールが広く、現生の生態学の対象とはかけ離れている場合が多かった。近年、堆積盆の大きさ、花粉組成と植生の関係、花粉堆積量などを十分に考慮し、空間スケールを明確にした研究が行われており、現世を対象とする生態学と古生態学との間で、共通の議論が可能となりつつある。この集会では、そのような研究例を紹介し、“四次元の生態学”の可能性および課題を明らかにしていきたい。

## 演 題

- ・現在の花粉組成と現存植生との比較による湿原植生の空間配列復元  
米林 伸 (立正大・地球環境科学)
- ・他分野資料との相互検証による過去数百年の植生復元  
佐々木尚子 (京大院・農)
- ・ブナ分布域の変遷：年間花粉堆積量と百分率からの推定  
紀藤典夫 (北海道教育大・教育)

自由集会 3月26日(火) 17:30~20:00 J会場

## W7 陸上生態系における腐食流入：パターンとプロセス

企画者 宮下 直 (東大・農)・金子信博 (横浜国大・環境情報)

古典的な陸上生態系の概念では、生食連鎖と腐食連鎖という2つの流れが別個に存在し、前者は後者に有機物を提供する一方、後者は有機物を無機化して植物に還元することで後者と連結しているとされてきた。ところが、最近の研究により、腐食連鎖由来の生物が、生食連鎖のなかに直接取り入れられるという「腐食流入(detrital infusion)」の事例が報告されてきている。水界では「微生物ループ」の概念の普及に伴い、腐食流入の考えがほぼ定着していると言えるが、陸上においては、その重要性がPolis & Strong (1996)のなかで指摘されているにもかかわらず、その実体とプロセスを定量的に明らかにした研究例は未だにきわめて少ない。陸上では「地上生態系 = 生食系、土壌生態系 = 腐食系」という暗黙の思いこみが多くの研究者にあり、それぞれの枠組みの中だけで研究が進められてきたことが主な理由であろう。今後、陸上生態系における生物間相互作用や群集動態の予測、及びそれらをもとにした生物多様性の保全を考えるうえで、腐食流入の普遍性や時空間的変動性を明らかにすることの意義は大きいと思われる。本集会

では、4種類の異なる陸上サブシステムにおける腐食流入のパターンとプロセスについて話題提供していただき、その共通性や変異性をもたらす要因について議論する予定である。

#### 演 題

1. 腐食流入の概念：研究史と現状  
宮下 直（東大・農）
2. 打ち上げ海藻が沿岸生物群集に及ぼす影響：腐食流入と生食流入およびその波及効果  
野田隆史・赤星智子・宮下典丈（北大・水産）
3. 河川 - 森林相互作用：生食連鎖と腐食連鎖  
村上正志（北大・苫小牧研究林）
4. 地上と土壌をつなぐ multichannel omnivory とその時空間変動：造網性クモと飛翔昆虫を例に  
島崎 彩（東大・農）
5. 土壌生態系のエネルギーチャンネル - 土壌動物は「腐食連鎖」の代表か？  
金田 哲（横浜国大・環境情報）
6. まとめ  
金子信博（横浜国大・環境情報）

自由集会 3月26日（火） 17:30～20:00 K会場

### W8 アジア・太平洋地域の植生の分布と分化

企画者 村上雄秀・中村幸人（(財)国際生態学センター）

日本列島の植生に関する地理学的研究は生態学の様々な分野で行われている。その研究分野のひとつに植物社会学がある。日本の植生の植物社会学的体系化は進み、全体像がようやく展望できる段階に入ったが、日本列島の資料のみでは体系化に判断の迷う植生型も少なくない。また、植生の系譜を理解するうえで、日本の植生がどこから由来しているか確かめるべき時代にもきている。今後、日本列島を取り巻くアジア・太平洋地域の植生の地理学的比較研究から期待されるのは広域に及ぶ国際的な植物社会学的な群落の体系化にとどまらず、植生の系譜、景観生態、植物分類の再整理、気候変動に伴う植生移動、生物多様性、環境保全などの分野にも大きな成果をもたらすと考えられる。

今回は、第48回生態学会熊本大会に引き続き、自由集会の形で、アジアや極東地域で広域的に研究されている方々に、現段階における知見を報告していただき、本地域における植生の特性（特に日本との関係）現時点における研究上の課題を明らかにするとともに、研究者相互の情報交換を図るものである。

#### 演 題

- ・広域的な植生研究の進捗状況  
中村幸人（作新学院大）
- ・熱帯アジアにおけるマングローブの植生と分布特性  
中村武久（東京農大）
- ・大陸と日本における汎針広混交林の植生地理  
石川幸男（専修大）
- ・日本の高山植生の植生地理  
小泉武栄（東京学芸大）
- ・華東地域と日本間における非帯状植生の共通性  
村上雄秀（国際生態学センター）
- ・暖温帯夏緑広葉樹林の日中比較 - アベマキ、クヌギ、コナラ林を中心に -  
鈴木伸一（国際生態学センター）

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 D会場  
W9 半島マレーシアにおける一斉開花 2001

企画者 沼田真也(東京都立大・理)

東南アジア熱帯林の特徴として、多くの植物種が2-10年に一度の間隔で、同調的に開花・結実する現象(一斉開花)が挙げられる。近年、一斉開花における環境や動植物の調査が進み、一斉開花の適応的意義やメカニズムについて様々な角度から検討が行われつつある。しかし、一斉開花は東南アジアの広い地域で見られる現象であるにもかかわらず、これまで明らかになっている情報は断片的かつ局所的なものがほとんどである。2001年8月から、半島マレーシアにおいてフタバガキ科樹種を含む一斉開花が観察された。そこで、今回の自由集会は半島マレーシアで観察されたフタバガキ科植物の開花、結実状況の報告をもとに、一斉開花に興味を持つ多くの研究者の間で一斉開花に関する情報交換や議論を行いたいと考えている。

#### 演題

1. 2001年半島マレーシアの一斉開花  
沼田真也(都立大)
2. パソ森林保護区における一斉開花  
小沼明弘(新潟大)
3. 一斉開花における人為攪乱の影響  
西村 千(環境研)

#### コメンテーター

- ・東マレーシアにおける一斉開花  
酒井章子(京大)
- ・東南アジアにおける一斉開花情報ネットワークの必要性  
安田雅俊(森林総研)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 E会場  
W10 周防灘と長島(上関原子力発電所建設予定地)の生物多様性

企画者 安溪遊地(山口県立大)

#### 演題

- ・原発計画の現状と中国四国地区会報「長島の自然 - 瀬戸内海周防灘東部の生物多様性」の発刊について  
中根周歩・中坪孝之(広島大院)
- ・山口県のRDBから500余種の汽水域貝類が削除された理由  
福田宏(岡山大)・佐藤正典(鹿児島大)
- ・バイオリージョナリズムから見た周防灘と環瀬戸内海会議  
野間直彦(滋賀県立大)・安溪遊地(山口県立大)
- ・住民参加の自然保護とアセスメントの模索 - 山口県の場合  
鈴木和雄(山口県立大)・安溪貴子(山口大・非常勤)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 F会場

## W11 Matter Flow and Ecosystems

企画者 鞠子 茂(筑波大・生物科学系)・横沢正幸(農業環境技術研究所)

Matter Flow and Ecosystemsが今回取り上げるテーマは「湿地生態系において生き物が動かす炭素と窒素」です。湿地生態系を特徴づけているのは、言うまでもなく水という媒体です。水は土壌とともに植物の高い生産力を補償し、それが豊かな生き物たちを支えています。湿地の多様な生き物は食物連鎖を通じて陸上生態系とは異なる物質循環系をつくりだしています。湿地生態系の物質循環は、人間活動によって汚染された水を浄化する機能だけでなく、二酸化炭素、メタン、亜酸化窒素などの温室効果ガスのシンク・ソース機能をもたらすという点で注目されています。これらのガスは植物による光合成・呼吸や微生物による硝化・脱窒などの生物学的プロセスを通じて生成・消費されていますが、最近では、このプロセス研究が湿地生態系の機能評価に対して重要な貢献をしています。しかし、この種の研究は生態学分野においてはまだメインストリームを形成するには至っていない感があります。そこで、湿地における炭素・窒素の動きを研究している4人の研究者に様々な視点から話題を提供していただき、湿地生態系の物質動態に関する研究の現状と今後の展望について議論したいと思います。

### 演 題

1. 大型水生植物を介したフラックス定量化の問題点について  
広田 充(筑波大・生物科学)
2. 湿地生態系における窒素動態  
戸田任重(信州大・理・物質循環)
3. 微気象学的手法による湿地状ツンドラのCO<sub>2</sub>フラックス観測とモデルによる収支解析  
吉本真由美(農業環境技術研・生態系影響ユニット)
4. 熱帯泥炭湿地の三日月湖における有機物の流れ  
岩熊敏夫(北大院・地球環境)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 G会場

## W12 第7回植生地理学の視点：ナラ型森林の植生地理

企画者 野寄玲児(神戸女学院大)・星野義延(東京農工大・農)

ミズナラやコナラなどが優占するナラ型森林は、日本に最も広範に成立する重要な森林植生であり、その存在は最近の里山ブームによって各方面からも再び注目を集めている。日本のナラ型森林植生については1990年代以降に全国レベルでのまとまった研究が発表され、その全容がほぼ把握されてきた。さらに、最近、中国や韓国などの大陸域において日本の植生研究者との共同研究としてナラ型森林の研究が進められ、日本と大陸におけるナラ型森林の組成的な共通点や相違点も次第に明らかになりつつある。

今回は、ナラ型森林を題材にして、日本と大陸の森林の植生地理学的関係を検討してみたい。

### 演 題

- ・ミズナラ林の植生地理  
星野義延(東京農工大・農)
- ・日韓のナラ林に関する植生地理学的考察  
大野啓一(横浜国大院・環境情報)
- ・ナラガシワ林の立地と組成  
野寄玲児(神戸女学院大・人間科学)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 H会場

## W13 森の学校/田んぼの学校：協働の科学への誘い

企画者 鷲谷いづみ(東大・農学生命科学)

地域の人々とともに自然を理解するための協働は、保全生態学の重要なテーマの一つといえます。メディアで科学論を展開して大活躍の宇宙物理学者の池内了さんは、今、新潟県のある山村で「森の学校」の開講準備を進めています。一方、「ただの虫」を疎かにすることなく減農薬運動を進めてきた宇根豊さんは、田んぼの「生物多様性」を見直す百姓の運動をリードしています。今回の自由集会では、それぞれユニークな活動に取り組んでいらっしゃるお二人をゲストとしてお招きし、それぞれの熱い想いを存分に語っていただきます。お話をうかがってから、地域における協働に生態学の研究者がどのように係わるべきか、お二人を交えて話し合います。

ゲスト

池内 了(名大・理) 「森の学校」

宇根 豊(農と自然の研究所) 「田んぼの学校」

司 会

鷲谷いづみ(東大・農学生命科学)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 I会場

## W14 魚類の繁殖をめぐる代替戦略・戦術

企画者 狩野賢司(東京学芸大)・桑村哲生(中京大)

同じ環境にすむ同種の個体でも、異なる性質や行動を示すことがしばしばある。たとえば、ブルーギル・サンフィッシュのオスには、産卵床を防衛するなわばりオスと、そのオスとメスとのペア産卵の際に飛び込んできて、精子をかけて逃げるスニーカーオスという2タイプの存在が知られている。これらは代替戦略・代替戦術と呼ばれ、その共存機構は、Maynard Smithらがゲーム理論を進化生物学に取り入れることによって、進化的に安定な戦略、あるいは状態(Evolutionarily Stable Strategy or State :ESS or ESS<sub>T</sub>)として説明されてきた。しかし、Gross(1996: TREE)の総説が出たあとは、必ずしも活発に研究が行われてきたとはいえない。その1つの原因として、遺伝的に異なる「戦略」と状況に応じて使い分けられる「戦術」を、現実には厳密に区別することが困難であることが考えられる。しかし、そのような厳密な区別はつかなくとも、代替戦略・戦術という分野にはまだまだ開拓すべき大きな研究テーマがあると考えられる。今回は若手の魚類研究者を中心に、繁殖をめぐる代替戦略・戦術に関する最新的话题を提供していただくと同時に問題点を探り、今後、この分野でどのような研究ができるか議論してみたい。

演 題

- ・イントロダクション; Gross(1996: TREE)の紹介  
小北智之(九大)
- ・サケ科魚類の繁殖をめぐる代替戦略・戦術  
小関右介(北大)
- ・シクリッド魚類の繁殖をめぐる代替戦略・戦術  
安房田智司(大阪市大)
- ・ベラ科魚類の繁殖をめぐる代替戦略・戦術  
桑村哲生(中京大)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 J会場

## W15 生態学における数理的手法：21世紀の生態モデリングにむけて

企画者 巖佐 庸(九大院・理)

このたび、生態モデリング・数理生態学の大御所ともいえる2人に、これまでの道のりについてまたいまの生態学観などについてじっくりとお話をうかがい、21世紀前半での生態モデリングの発展方向について考えたい。

演 題

1. 生物集団のダイナミクスと進化：生き物の観察と構造化モデルの連携  
嶋田正和(東大・総合文化)
2. 空間生態学の展望  
重定南奈子(奈良女大・理)

自由集会 3月27日(水) 17:30~20:00 K会場

## W16 思わぬところから間接効果

企画者 宮本 康・近藤倫生(京大・生態研)

近年、生態系における食物連鎖構造を考える上で、間接効果の重要性が指摘されている。この観点については理論的研究が先行していたが、さまざまな生態系において、間接効果の実体が明らかにされつつある。そして、我々の予想以上に間接効果が生物群集の維持に強く関わっていることが分かってきた。そこで、本集会では、さまざまな生態系における間接効果の実証例を紹介し、これまでの間接効果に関する知見と比較検討を行い、今後の間接効果に関する研究の方向性を探りたい。

演者は4、5人を予定

自由集会 3月29日(金) 17:30~20:00 D会場

## W17 生態系ネットワーク計画を目的としたランドスケープ評価のためのアプローチ—茨城県水戸近郊をケーススタディー地域として

企画者 金子弥生(国総研・緑化生態)・日置佳之(鳥取大・環境樹木)

近年、生物多様性の減少要因として、生息地分断化(habitat fragmentation)が問題とされている。その防止のためには、生態系ネットワーク、すなわち野生生物の生育・生息環境を確保するとともに、生息地を機能的につなげるためのランドスケープ計画が注目されつつある。しかし、わが国では、生物情報や環境情報の蓄積についてのノウハウや解析についての技術はまだ充分とはいえないのが現状である。国土交通省国土技術政策総合研究所では、茨城県水戸近郊をケーススタディー地域として、環境情報のGISデータベース作成および鳥類、両生類、哺乳類などの生態学的調査を行なっている。

この自由集会では、水戸地域で行なってきたランドスケープ評価のための接近方法を主として紹介する。生態系ネットワークに興味を持っておられる方はもちろんのこと、種群の壁を越えてさまざまな分野の方々から議論に参加していただければ幸いである。

## 演 題

1. 生態系ネットワークと水戸地域における研究企画  
日置佳之
  2. 水戸地域の環境情報の GIS データベース化  
松林健一（セントラルコンピューターサービス）
  3. ギルドから見た鳥類の生息適地図化  
中村忠昌（生態計画研究所）
  4. 群集構造から見た両生類の生息適地図化  
大澤啓志（日大・緑地・環境計画研）
  5. 哺乳類の注目種リスとテンの生態から見た水戸地域哺乳類の注目種選定  
金子弥生（国緑研・緑化生態）
  6. 分断林におけるリスの生息状況と影響要因  
矢竹一穂（電中研・応用生物）・金澤晴子（須崎市役所）
  7. 遺伝的情報と生態学的情報のオーバーレイによるテンの環境選択  
黒瀬奈緒子（北大・先端研）・金子弥生
  8. 路傍空間を利用した生息環境の分断防止策の提案  
飯塚康雄（国総研・緑化生態）
- コメンテーター  
高橋紀夫（遠水研・温帯性まぐろ研）・藤原宣夫（国総研・緑化生態）

自由集会 3月29日（金） 17:30～20:00 E会場

## W18 中国の乾燥・半乾燥地の水・養分環境と植物の生理生態学

企画者 大手信人（京大・農）

乾燥・半乾燥地における植物の生理生態学的特徴は、厳しい水分環境と乏しい養分環境にどのような戦略をもって適応しているかによって理解されるだろう。データそのものが少ない、中国中西北部の乾燥地域をフィールドに調査をしている研究者らに、1) 水文環境、2) 養分環境、3) 生理生態、4) 更新プロセス、5) 生態系の保全という5つの切り口で研究成果を語っていただき、植物の乾燥環境への適応様式、それに立脚した半乾燥地緑化や生態系保全に関する議論を行いたい。

## 演 題

1. 乾燥・半乾燥地の水文環境：河西回廊での観測から  
玉川一郎（岐阜大・工）
2. 半乾燥地において植物が創り出す土壌の空間的異質性と植物の生理・生態的特性  
廣部 宗（京大・農）
3. 臭柏の更新・遷移シナリオを水利用様式の変化から考える  
大手信人・松尾奈緒子（京大・農）
4. 乾燥地植物の更新における plant-plant interaction  
山中典和（鳥取大・乾燥地研）
5. 半乾燥地緑化に必要な生理生態学的情報とは？  
吉川 賢（岡山大・農）

自由集会 3月29日(金) 17:30~20:00 F会場

## W19 日本における外来種の実態と外来種管理法制定に向けて

企画者 村上興正(京大院・理・動物生態)・鷺谷いづみ(東大院・農)

外来種の管理は生物多様性の保全上、最重要でかつ緊急な課題となっている。生物多様性条約の技術会議においても2001年3月に外来種に関する中間原則指針案が策定され、現在各国で内容を検討中である。この中で締約国のなすべきこととして、15の原則が書かれている。この中でもっとも重要とされているのが、外来種の導入の阻止すなわち予防的な措置である。とくに意図的な導入に関しては権限ある当局の許可無くして行われるべきでないこと、導入の許可に際しては、環境影響評価を含むリスク評価を行うことなどが記述されている。生態学会自然保護専門委員会外来種検討委員会においては、法的な措置をとるためには外来種の実態を広く市民に知って貰うことが必須であるとして、1作年以来外来種ハンドブックの作成に着手してほぼ完成している。ここではこの内容を簡略に伝えと共に、外来種の管理に関してどのような法律が望ましいのかについて論議を行いたい。

### 演 題

- ・外来種ハンドブックの概要  
村上興正(京大院・理・動物生態)・鷺谷いづみ(東大院・農)
- ・外来種ハンドブックの問題点  
編集委員から数名(未定)
- ・外来種の法的規制のあり方 - 国際的な見地から  
磯崎博司(岩手大・人文社会)(予定)
- ・日本における外来種管理法の特異性は何か?  
村上・鷺谷ほか編集委員

自由集会 3月29日(金) 17:30~20:00 G会場

## W20 日本人のふるさと尾瀬・保護戦略

企画者 星 一彰(福島県自然保護協会)

環境 NGO として福島県自然保護協会が尾瀬にかかわった経過をたどりながら、群馬、新潟、福島の関係3県によって設立された産学官民による尾瀬保護財団の5年間の保護戦略について報告します。

尾瀬の生物多様性および生態系の機能解明と保護理論のため、今後の諸問題について、生態学会会員の皆さんに参集していただき、多方面からのアプローチについてご意見を提供していただけたらと考えます。環境問題について社会科学的アプローチを加味しながら、実践的、現実的な話し合いを展開してゆきたい。

日本人の心のふるさとのように考えられている尾瀬湿原の永遠の保護プランについて模索したいと思います。

自由集会 3月30日(土) 9:00~12:00 仙台市近郊雑木林

## W21 群落談話会

企画者 星野義延(東京農工大・農)

今年の群落談話会は3月30日の午前中(9時から12時)に雑木林のエクスカージョンを企画しました。仙台市近郊の丘陵地の雑木林は、コナラ林を中心とした落葉広葉樹林ですが、その林内にはアラカシやシラカシといった常緑

カシ類が混交しています。仙台市が最近開設した公園で仙台市役所の福與聡さんに公園内の植生の特徴や植生管理計画について解説していただく予定となっています。

3月27日(水)12時から、H会場で、エクスカージョンの説明会を行ないます。

自由集会 3月30日(土) 19:30~21:30 川渡共同セミナーセンター  
**W22 フェノロジー研究会「DNA で見る植物の生活史」**

企画者 黒沢高秀(福島大・教育)・大野啓一(千葉県立中央博)

東北大学大学院農学研究科附属農場(川渡農場)内、川渡共同セミナーセンター(宮城県玉造郡鳴子町大口字原75、TEL 0229-84-7309)で、合宿形式で行います。

フェノロジーや生活史を研究している人の中にはDNA分析に興味を持ちつつも、何となく敷居の高さを感じている人は多いのではないのでしょうか。そこで、生態学分野への「分子マーカーの伝道師」陶山佳久氏を迎え、これまで氏が手がけてきたマイクロサテライト、AFLP分析等の手法を用いた植物の生活史へのアプローチについてわかりやすく解説していただきながら、最新のDNA分析の手法によって植物の生活史やフェノロジーに何が見えてきつつあるのか、あるいは今後どういった可能性が考えられるのかお話ししていただく予定です。翌日には研究室の実験設備等も見学させていただき、実際のDNA分析研究の現場を体験させていただく予定です。

演 題

- ・ DNA で見る植物の生活史 - 花粉・種子・個体群構造の動きが見える -  
陶山佳久(東北大院・農)

終了後は簡単な懇親会を行い、翌日はセミナーセンターに隣接する農学研究科附属農場内にある施設を見学する予定です。雪の状態等が良ければ希望者を対象にクロスカントリースキーで農場内の草地や二次林内のエクスカージョンも予定しています。会場での宿泊をお勧めします(二食付き約3000円)。宿泊/エクスカージョン参加を希望される方は、下記へハガキ、ファックス、電子メールのいずれかでお申込ください。申込期限は3月20日とします。事前に申し込まれた方は、公開シンポ終了後、会場(仙台国際センター)より車で送迎予定です。車で来られる方はその旨お知らせください。宿泊しない場合は、申込なしの飛び入り参加も可能ですが、セミナーセンターまでの足と食事は基本的に各自にて願います。セミナーセンターは陸羽東線川渡温泉駅よりタクシーで10分、仙台から古川まで新幹線を使うと1時間強です。

申込先: 〒960-1296 福島市金谷川1 福島大学教育学部 黒沢高秀  
e-mail. [kurosawa@db2.educ.fukushima-u.ac.jp](mailto:kurosawa@db2.educ.fukushima-u.ac.jp) TEL. 024-548-8201 FAX. 024-548-3181

# ポスター賞新設のお知らせ

本大会より、優秀なポスター発表講演に賞を贈ります。審査内容は、研究の質の高さとポスターのプレゼンテーションの仕方の二点です。ポスター講演をなさる方は、どうぞ張り切ってポスターを用意して下さい。

最優秀ポスター賞：1日につき数点

優秀ポスター賞：1日につき10点前後

審査は日毎に行いますが、賞金・記念品はありません。

## \*\*\*ポスター発表者へのお願い\*\*\*

ポスターは、発表当日の9～12時までの間に展示を完了し、同日の17時15分までに、必ず撤去してください。

各ポスター会場（M・N・O・P会場）のポスターボードの上辺に、講演番号が貼られていますので、その場所に展示してください。

ポスターボードはクリーム色で（一部、他色のボードも混じる）、面積は90cm×180cm（縦長）です。

ポスター貼付用のピンや画鋏は、なるべく各自で用意してきてください。

なお、セロテープ類は使用できません。

12～14時の時間帯は、必ずポスターの前で発表をお願いいたします。

## 保全・景観生態 M202～224、植物と動物の相互関係 M225～239

M202	井下田寛・加藤賢隆・鎌田直人(金沢大院・生態)・江崎功二郎(石川県林試)光環境がカシノナガキクイムシ(Platypus qercivorus MURAYAMA)の林分内における分布に及ぼす影響	M221	橋本啓史・夏原由博(大阪府立大院・農学生命)大阪市におけるシジュウカラの生息条件
M203	井村 治・森本信生・時 坤・佐々木寛幸(畜草研)放牧草地の昆虫の多様性をもたらす立地環境	M222	遠藤知二(神戸女学院大・人間科学)・坂田宏志・橋本佳明(姫工大・自然環境科学研)都市化の空間勾配に沿った管住性ハチ相の変化
M204	池田 透・阿部 豪(北大院・文・地域システム)外来種アライグマの箱ワナへの反応と効果的捕獲方法の検討	M223	大矢陽一(筑波大・第二・生物)・五箇公一(国立環境研)・徳永幸彦(筑波大・生物科学)隔離されたhabitatに訪花するマルハナバチの遺伝的多様性
M205	園田陽一(明大院・農)・倉本 宣(明大・農)神奈川県都市近郊域におけるホンダタヌキのロードキル発生要因の解明	M224	川村みゆき(信州大院・農)・大窪久美子(信州大・農)チョウ類群集及び植物との関係からみた水田地域の生物生息地としての評価(II)
M206	加藤知訓・中越信和(広大院・国際協力)広島県中部におけるオオタカ生息域の景観生態学的研究	M225	寺門万里子・桜谷保之(近畿大・農・昆虫)捕食性昆虫ナホシテントウの生息植物の季節的变化とその要因
M207	真野秋綱・日鷹一雅(愛媛大・農・農場)レッドリスト昆虫タガメの卵の生命表解析	M226	戸田裕子・桜谷保之(近畿大・農・昆虫)在来種、外来種別にみた植物・アブラムシ・捕食性テントウムシの関係
M208	Teoh Peir Yan・日鷹一雅(愛媛大・農)レッドリスト種タガメを含む水生生物に対する殺虫剤のインパクト	M227	五味淵編(京大・理・動物生態)ゴール形成性アブラムシの定着成功、ゴール形態および次世代個体数に対する寄主の影響
M209	小島拓也・日鷹一雅(愛媛大・農)レッドリスト昆虫タガメへの人工照明の影響評価(その2)灯火飛来個体の生存率と産卵能力に対するインパクト	M228	阪本真由美・部坂和代・石原道博(大阪女大・理・環境理)ヤナギの質に見られる季節変化がヤナギリハムシのパフォーマンスに及ぼす影響
M210	西原昇吾(東大・農・生物多様性)絶滅危惧種シャープゲンゴロウモドキ個体群の衰退	M229	松岡美智子・阪本真由美・部坂和代・石原道博(大阪女大・理・環境理)ヤナギンバイはヤナギリハムシに負の影響を及ぼしているか?
M211	西城 洋(愛媛大院・連合農・環境昆虫学)水田生態系におけるゲンゴロウ科甲虫の水域利用様式	M230	海原 要(東北緑化環境保全)・中村浩二(金沢大・理)金沢市湯涌におけるハクサンアザミとカガノアザミの植食性昆虫相の比較
M212	後藤 章・須田真一(東大・農学生命)・飯島 博・矢野徳也(NPO法人アサザ基金)・鷲谷いづみ(東大・農学生命)ピオトープ池を利用した水生昆虫の調査と周辺環境の評価～保全教育と運動して～	M231	大秦正揚(京大・農・昆虫生態)・古本敦子(伊丹市昆虫館)・大崎直太(京大・農・昆虫生態)エゾスジグロシロチョウの種内卵サイズ変異と食草の防衛形質
M213	加藤秀男・高村典子(国立環境研)・角野康郎(神戸大)・三橋弘宗・田中哲夫(兵庫県人と自然の博物館)・村上俊明(地域生態系保全)景観と植生の異なったため池における底生動物相の比較	M232	高部直紀(名大院・生命農・森林保護)・山崎恭子(京大院・人間・環境)・梶村 恒(名大院・生命農・森林保護)イタドリにおけるオトシブミ類3種の揺籃数の季節変化
M214	高山 肇(阿寒町教育委)・斎藤和範(旭川大・女子短大)・若菜 勇(阿寒町教育委)・蛭田真一(北海道教育大・釧路校)釧路湿原の小河川におけるウチダザリガニの流路分布	M233	福田秀志(日本福祉大・情社科)・佐野 明(三重県・林技セ)キバチ亜科とAmylostereum 菌との共生関係成立過程
M215	中村雅子(島根大・生資)・神谷 要(米子水鳥公園)・相崎守弘(島根大・生資)水鳥による水質汚濁負荷に関する研究	M234	伊藤正仁・肘井直樹(名大院・生命農・森林保護)トップダウン効果を及ぼす生物群集の寄主植物個体内・個体間変異タマバチの一種Andricus moriokae 両性世代を対象に
M216	五十嵐美穂(横浜国大・工)・小池文人(横浜国大院・環境情報)東京都大田区における水鳥群集とランドスケープの関係について	M235	村瀬 香(名大・生命農)・市岡孝朗(名大・生命農)アリ植物オオバギ属における被食防衛戦略の変異が、絶対共生アリとの関係に与える影響
M217	天野一葉(九大院・比較社会文化・生物多様性)・江口和洋(九大院・理・生物)国内移入鳥類の現状	M236	赤石大輔(金沢大院・生態)金沢市の里山のキノコ類と訪茸昆虫の生態的相互関係ノとくにキノコの発達段階による双翅目相の変化
M218	阿部聖哉・目黒伸一(国際生態学セ)・原田 洋(横国大・教育人間科学)環境保全林と残存孤立林の越冬期鳥類相の比較	M237	澤島拓夫・相馬 潔・大政正武(信州大・農)カシヨクヒメトビムシの生活史とハラタケ目子実体への集合活動との関連
M219	布和敖斯爾・樋口広芳(東大院)・金子正美(酪農学園大)・田村正行(国立環境研)東アジア植生指数季節変動(green move)とコウノトリの季節移動	M238	寺本純子(京大・農・生態情報)・有村源一郎(生研機構)・高林純示(京大・生態研セ)同属2種ハダニと植物の誘導的匂い成分の関係
M220	齋藤大輔(広島大・総合科学)・内藤和明(姫路工大・自然研)・中越信和(広島大・総合科学)コウノトリの野生復帰の場としての水田地帯の景観構造の解析	M239	塩尻かおり(京大・生態研セ・生研機構)・小澤理香(生研機構)・高林純示(京大・生態研セ)植物の匂い生産日周性と昆虫の日周性との関係～トウモロコシ・アワヨトウ・カリヤコマユバチにおいて～

植物の個体群生態 N201~218、遷移・更新 N219~227、植物の生理生態 N228~240	
N201 山城富美子(富大院・生物圏)・和田直也(富大・理・生物圏)標高の異なるチングルマ個体群間における種子発芽特性の変異	N221 郡 麻里(広島大院・国際協力)河畔域低木類の群落形成における生活史戦略と更新立地の動態
N202 荻津英也・堀 良通(茨城大・理・生態)海浜植物コマツヨイグサの発芽特性	N222 石井智陽・石原修一・ミイン アウン・藤原一繪(横浜国大・環)西表島マングローブ林における植生の遷移初期過程とその立地との関係
N203 本田裕紀郎(明大院・農)・倉本 宣(明大・農)埋土種子集団を形成する性質の欠如に関するゲーム理論的解釈	N223 澁谷千尋・神田房行(北海道教育大・釧路校・生物)釧路湿原におけるハンノキ林の更新パターン
N204 大野啓一・馬場明子(横浜国大・環境情報)埋土種子と河辺草本群落の生態	N224 嶋村鉄也・百瀬邦泰(京大・AA研)熱帯泥炭湿地林における実生の更新
N205 崎尾 均(埼玉農林総合研究セ・森林支所)15年間のシオジの種子生産	N225 白川勝信(広大院・国際協力)中間湿原の消失に関わる生態特性
N206 北本尚子(筑波大・環境)・大澤 良(筑波大・農林)・上野真義・津村義彦(森林総研)・鷲谷いづみ(東大・農学生命)八ヶ岳サクランソウ自然集団における遺伝的変異の空間分布	N226 中村 誠・中越信和(広島大院・国際協力)盛土法面における植物群落の成立過程
N207 山田悦子・大原 雅(北大・地球環境)スズラン( <i>Convallaria keiskei</i> )の繁殖様式と集団の遺伝的構造	N227 松瀬研也・広木詔三(名大・人間情報)愛知県豊田市八草地域における二次林へのアラカシの侵入過程の解析-地形による死亡率と成長の違いについて-
N208 荒木 悟・國井秀伸(島根大・汽水研セ)汽水域の稀少植物3種でみられるアロザイム変異	N228 田中さやの・山村靖夫・中野隆志(茨城大・理・生態)光環境の異なるアカマツシュートにおける窒素経済の比較
N209 内藤洋子(京大院・農)・他7名 <i>Neobalanocarpus heimii</i> (フタバガキ科)におけるマイクロサテライトマーカーを用いた繁殖様式及び近交弱勢の評価	N229 安村有子(東北大・理・生物)・彦坂幸毅・広瀬忠樹(東北大院・生命科学)ブナ林構成種の異なる光環境に展開する葉からの窒素回収
N210 竹内やよい・田中健太(京大・生態研セ)・中静 透(総合地環研)花粉・種子散布距離の異なるフタバガキ科4種の空間分布パターン	N230 村岡裕由・小泉 博(岐阜大・流環研)・R.W. Pearcy(U.C. Davis)落葉広葉樹5種の実生における光の獲得と利用
N211 藤森直美(京大・生態研セ)・他5名 ハリギリの成木密度と繁殖との関係	N231 小澤 創(福島県林業研究セ)・小菅進吉(栃木県林業セ)・伊藤佳世・山村靖夫・堀 良通(茨城大・理)冷暖温帯移行域における落葉広葉樹3種の樹冠部と稚樹の生理生態
N212 宮本和樹・甲山隆司(北大院・地球環境)インドネシア・中央カリマンタンにおける熱帯ヒース林構成種10種の形態的特性	N232 田畑あずさ(北大・低温研)・他8名 ダケカンバの光合成機能の環境ストレスに対する応答
N213 目黒伸一(財)国際生態学セ)・長谷川直人・辻 毅(桐蔭横浜大・工)樹木の力学的物性値による樹種特性	N233 関 剛(森林総研・東北)アオモリトドマツの開葉に影響を与える温度条件
N214 長美智子・武田博清(京大・農・森林生態)二次林における常緑広葉樹2種の樹形と成長様式	N234 逢沢峰昭(東大院・新領域・環境)・丸田恵美子(東邦大・理・生物)・梶 幹男(東大院・新領域・環境)北八ヶ岳における亜高山性モミ属樹種の分布に関する生理生態学的研究
N215 横沢正幸(農環研)・他5名 植生のサイズ分布動態と物理環境変動との相互作用のモデル化2-落葉樹への応用-	N235 宗原慶恵・戸丸信弘(名大院・生命農)・西村尚之(佛光大・通信)・山本進一(名大院・生命農)大山ブナ老齢林におけるブナ稚幼樹の分布パターン
N216 相川真一・堀 良通(茨城大・理・生態)コゴメウツギにおける萌芽更新の生態的特性	N236 石川真一・高橋和雄・吉井弘昭(群馬大・社会情報)巨大帰化植物オオバクサの利根川中・上流域における分布とその拡大要因
N217 伊藤 哲(宮崎大・農・森林科学)・高木正博(宮崎大・農・フィールドセンター)・魏 敦祥(宮崎大・農・森林科学)・野上寛五郎(宮崎大・農・フィールドセンター)絶滅危惧種ヤクシマサルスベリ個体群の成立環境	N237 矢守 航(静岡大・理・生物)・吉村義隆・辻 堯(三菱・生命研)・小神浩幸・増沢武弘(静岡大・理・生物)高山植物の生理生態 II~蛍光色素、SFDA染色・FDA染色による高山植物の生存と耐凍性の解析~
N218 平尾 章・工藤 岳(北大・地球環境・地域生態)雪田草本植物のメタ個体群構造	N238 大石真智子(北大院・農)・小池孝義(北大・フィールド科学セ)未成熟火山灰土壌におけるアカエゾマツの養分動態と光合成
N219 新井伸昌(新潟大院・自然科学)・紙谷智彦(新潟大・農)海岸クロマツ林における雌雄異株シロダモの侵入・定着過程	N239 船津勇一・藤吉正明・佐々木晶子・中坪孝之(広島大院・生物圏)硫黄荒原におけるVA菌根の分布と土壌要因
N220 井上純大・玉泉幸一郎(九大・農)海岸性クロマツ稚樹の更新様式	N240 藤吉正明・中坪孝之・堀越孝雄(広島大院・生物圏)生育環境異なるマメ科植物に形成されたVA菌根に対するリンの影響

〇会場

ポスター発表：3月27日(水) 12:00～14:00

植物群落・群集 O201～218、分子生態 O219～227、数理生態 O228～234	
O201 伊村 智(極地研)・他5名 昭和基地周辺における湖沼底水生蘚類の分布	O221 工藤 充(広島大・総)・崎尾 均(埼玉県農林総合研究セ)・大住克博(森林総研)・井鷲裕司(広島大・総)マイクロサテライトマーカーを用いた深畔林構成樹種カツラの遺伝的構造の解析
O202 中村隆俊・植村 滋(北大・農・北方森林保全)・矢部和夫(札幌市立高専)スゲ属植物の分布特性からみた北海道低地湿原の無機環境	O222 兼子伸吾(広島大院・国際協力)・井鷲裕司・中越信和(広島大・総合科)AFLP法による広島県帝釈峡におけるフクジュソウメタ個体群の遺伝解析
O203 伊藤祥子・谷本丈夫(宇都宮大・農)奥日光戦場ヶ原湿原におけるミズゴケ類の分布に及ぼす高等植物群落と微地形構造の影響	O223 本城正憲(筑波大・生命環境)・上野真義・津村良彦(森林総研)・大澤 良(筑波大・生命環境)・鷲谷いづみ(東大・農学生命)日本のサクラソウ集団における葉緑体DNA変異
O204 水野 梓(宇大院・農)・谷本丈夫(宇大・農)日光戦場ヶ原湿原の固定植生調査地における種組成と群落構造の変化	O224 鳥丸 猛・戸丸信弘(名大院・生命農)・西村尚之(佛教大)・山本進一(名大院・生命農)大山ブナ老齢林のヒメモチバッチのクローン構造
O205 津山幾太郎(筑波大・環境科学)・上條隆志(筑波大・農林学系)・小川みふゆ(森林総研)・福田廣一(栃木県立博物館)奥鬼怒地域の山地帯・亜高山帯の自然林植生と群落構造	O225 亀山慶晃(広島大院・国際協力)植物個体群の維持機構と遺伝子流動に関する集団生物学的研究
O206 阿部 真(森林総研・北海道)・他5名 大雪山系の針葉樹林におけるモミ・トウヒ属の群集動態	O226 杉阪次郎・工藤 洋・鈴木準一郎・可知直毅(都立大・理・生物)森林の更新様式は林床植物カニコウモリの遺伝構造を規定するのか?
O207 久保博之・久保田康裕(鹿児島大・教育)知床針広混交林における最近10年間の成長・枯死動態	O227 塚越智子・井鷲裕司(広島大・総・自然環)・Donald Franklin・David Bowman(Northern Territory Univ., Australia)オーストラリアにおけるBambusa arnhemicaの集団開花現象に関する遺伝的解析
O208 長池卓男・林 敦子(山梨県森林研)・阿部みどり・新井伸昌(新潟大院・自然科学)林齢の異なるカラマツ人工林における植物種多様性の比較	O228 徳永幸彦(筑波大・生物科学)Evolution of Modesty(遠慮の進化)
O209 斉藤 修(東京農工大・連合)・星野義延(東京農工大・農)・辻 誠治(日本女子大・豊明小)・菅野 昭(宮城県産業経済部)関東のコナラ二次林の変貌に関する研究	O229 徳永幸彦(筑波大・生物科学)・鈴木ゆかり(筑波大・生命環境科学)Three faces of Hamilton's rule
O210 川西基博(横国大・環境情報)・崎尾 均(埼玉県農林総合研究セ・森林支所)・大野啓一(横国大・環境情報)奥秩父大山沢の植生と種多様性	O230 竹中靖人(筑波大・生物科学)文化の進化
O211 鈴木伸一(国際生態学セ)日本の夏緑広葉樹二次林の群落体系について	O231 中村 裕(筑波大・生命環境)・徳永幸彦(筑波大・生物)The greatest profit of the greatest number is the foundation of colonization
O212 相川高信・館野隆之介・武田博清(京大・農)冷温帯落葉広葉樹林における主要構成樹種の開葉・落葉フェノロジー	O232 真野浩行(筑波大・生命環境)・徳永幸彦(筑波大・生物科学)Binary Model of Host Adaptation
O213 汪正祥・藤原一繪(横浜国大院・環境情報)中国湖北の西部山地における常緑・落葉広葉樹混生林の植生に関する研究	O233 松井哲哉(科学技術振興事業団)・八木橋勉・田中信行(森林総研)・埜田 宏(森林総研・四国)Improving the accuracy of predicted distribution on <i>Fagus crenata</i> forests using regression tree analysis (RTA)
O214 蛭間 啓・福嶋 司(東京農工大・農)太平洋側、日本海側の冷温帯における特定草本種の生育立地のズレについて	O234 伊藤 洋・嶋田正和(東大・広域システム)資源利用パターンに基づくモデルにおける多様な適応放散ダイナミクス
O215 坂千代福治・大野啓一(横浜国大・環)西日本に分布するカワラハンノキ群落の植生生態学的研究	
O216 雷 耘・大野啓一(横浜国大院・環境情報)ハンノキ若齢林の群落構造と立地	
O217 小島 覚(東女大・文理・生物)アラスカ、チュガチ山脈における「 <i>Alnus sinuata</i> 」群落の生態地理学的位置づけ	
O218 〇小平真佐夫・櫻村精一(愛媛大・農)DELTAシステムを用いた木本種データベースの試作	
O219 松本麻子(森林総研)・錦織正智・清水 一(道立林試)・津村義彦(森林総研)マイクロサテライトマーカーによる北海道ミズナラ集団の遺伝的変異の解析	
O220 吉丸博志(森林総研)・三浦真弘(名大院・生命農)・上野真義(森林総研)・真鍋 徹(北九州市自然史博)・山本進一(名大院・生命農)マイクロサテライトを用いた照葉樹林におけるシイの遺伝構造の解析 - 林分間比較 -	

物質循環 P201～211、行動・社会 P212～219、動物の個体群生態 P220～228、動物群集 P229～236	
P201 田内裕之・宇都木玄(森林総研・北支)植生データを用いた日本の森林の炭素固定量推定	P221 大脇 淳(金沢大院・生態)・中村浩二(金沢大・理)金沢の里山におけるササ食ジャノメチョウ類の生態—とくに、生息地の断片化と成虫の移動について
P202 内藤太輔・杉本敦子(京大・生態研セ)東シベリアタイガ林における二酸化炭素の炭素・酸素安定同位体比の変動	P222 松尾 洋(都立大・理・生物)飛び出た眼は何のため? エゴヒゲナガゾウムシの雄間闘争
P203 里村多香美・中根周歩(広島大院・生物圏)・堀越孝雄(広島大・総合科)非破壊的手法による根系研究	P223 長行司大也(京大・理・動物生態)ヤマトシジミ成虫の消長とニッチ利用の変化
P204 平野恭弘・金子真司(森林総研・関西)スギ林における樹幹周囲と樹幹間の土壤溶液化学特性	P224 菅野格朗・八木立夫・大野慎介・城本啓子・桜谷保之(近畿大・農)木津川植生域における昆虫類の生態学的研究-在来種ジャコウアゲハと外来種ホソアゲハの種間関係について-
P205 長谷川元洋(森林総研・木曽試験地)・伊藤雅道(横浜国大)・岩本宏二郎(森林総研・木曽試験地)・北山兼弘(京大・生態研)根系の切断が落葉分解過程における土壤動物群集の遷移に与える効果-キナバル山下部山地林における調査-	P225 加藤浩志(東大院・理)・松本忠夫・三浦 徹(東大院・総合文化)シロアリの有翅虫分化と繁殖戦略-複眼形成の比較生物学-
P206 稲垣善之(森林総研・四国)・長谷川元洋(森林総研・木曽)アカマツとブナの落葉分解における窒素の動態-リターの混交と優占樹種の違いによる影響-	P226 柳 真一(岡山大・自然科学)・及川卓郎・宮竹貴久(岡山大・農)アズキノウムシにおける生活史形質の量的遺伝学的パラメーターの推定
P207 古澤仁美・日野輝明・伊東宏樹・高畑義啓・上田明良(森林総研・関西)シカとササが表層土壌の窒素無機化速度におよぼす影響	P227 中山木綿・勝川俊雄・松田裕之(東大・海洋研)変動環境における最適戦略:エネルギー分配の最適化モデル
P208 山田明德(京大・生態研セ、理研・微生物)・井上徹志(理研・微生物、科技団・ICORP)・杉本敦子(京大・生態研セ)・大熊盛也・工藤俊章(理研・微生物、科技団・ICORP)熱帯林の物質循環におけるシロアリの重要性を探る	P228 伊藤 桂(北大・農・動物生態)Inbreedingが初期産卵および休眠覚醒パターンにおよぼす影響
P209 周 承進・林 明姫・中根周歩(広島大院・生物圏)スギ林における葉リター分解速度に及ぼす生物的要因の定量的評価	P229 倉島 治(東大院・総合文化)・須田知樹(宇都宮大・農・野生鳥獣)・小金澤正昭(宇都宮大・演習林)齧歯類の個体数がニホンテンの食物利用へ与える影響
P210 豊田 鮎・金子信博・伊藤雅道・橋本みのり(横浜国大・環境情報)キシャヤステの活動は、カラマツ林表層土壌の物質循環にどのように寄与するか?	P230 福井 大・村上正志(北大・苫小牧研究林)・中野 繁(京大・生態研セ)水生昆虫の分布がコムリ類の採餌に及ぼす影響
P211 赤松史一・沖野外輝夫(信州大・理・物質循環)河川敷の食物網におけるクモ類の位置付け	P231 ○上野裕介・堀 正和・野田隆史(北大院・水産)アオサギによる水域から陸域への物質輸送が林床の食物網構造に及ぼす影響
P212 佐藤真澄・小林 彩・嶋田正和(東大・広域システム)寄生蜂ゾウムシコガネコバチの2地域個体群の配偶行動の比較	P232 多々良和佳(北大・農・苫小牧研)落下昆虫の減少による河川内のTrophic cascadeの変化
P213 木下智章(九大・理・生物)イチジクコバチの性比を決めるのは誰	P233 八木立夫・桜谷保之・菅野格朗・大野慎介・城本啓子(近畿大・農・昆虫)木津川植生域における昆虫類の生態学的研究-昆虫類を中心とした食物網と季節的変動-
P214 安部 淳(東大・広域システム・生物)・上村佳孝(都立大・理・生物)・嶋田正和(東大・広域システム・生物)雄間闘争を行う寄生バチMelittobiaにおける先手及び後手産卵雌の性比	P234 加賀田秀樹(北大・低温研)・大串隆之(京大・生態研セ)ヤナギを利用する潜葉性昆虫の資源分割様式
P215 樹元敏也(奈良県立医科大)アリグモにおける鋏角サイズの役割	P235 六車秀士・野田隆史(北大院・水産)潮下帯からの一次生産物供給が潮間帯生物群集の食物連鎖長に及ぼす影響
P216 千葉 晋・五嶋聖治(北大院・水産)漁業に対するエビの進化的応答	P236 中内ゆかり・古賀庸憲(和歌山大・教育)吸虫の感染はコメツキガニの摂食量や呼吸量に影響を与えているか?
P217 黒田 香(北大・水産・ベントス)寄生されたイソガニHemigrapsus sanguineusの行動パターンの季節変化	
P218 小野田剛・富山清升(鹿児島大・理・地球環境)同所的に生息する巻貝二種の競争関係	
P219 大滝陽美(鹿児島大院・理工・地球環境)・富山清升(鹿児島大・理・地球環境)フトヘナタリの木登り行動	
P220 坂田はな・石原道博(大阪女大・理)ネムノキマメゾウムシの成長過程における死亡要因	

## 保全・景観生態 M301～325、植物と動物の相互関係 M326～339

M301	小泉逸郎・前川光司(北大・フィールド科学セ)オシヨロコマ・メタ個体群の絶滅リスク評価	M321	久米 篤(九大・農)・永淵 修(福岡県保健環境研)・平川 剛(東和科学)・佐久川弘(広島大・総合科学)・手塚賢一(ヤクタネゴヨウ調査隊)屋久島で観測される高濃度オゾンと酸性エアロゾルがヤクタネゴヨウに及ぼしている影響
M302	山下慎吾(広島大・国際協力)・傳田正利(土木研究所)・中越信和(広島大・国際協力)回帰二進木モデルを用いた氾濫原プールの魚類生息場解析	M322	峯松理恵(広島大院・国際協力)・他6名 ダム湖上流域における人工湿地の造成実験
M303	福島路生(国環研)・鈴木 透・岸 大助(北大・農)・金子正美(酪農大)多重空間スケールのもとでの多様性解析 - 北海道の淡水魚類群集を例に	M323	服部昭尚(滋賀大・教育・システム情報)琵琶湖の湖岸形態と沈水植物の多様性: 水中景観の季節変化に水深構造が及ぼす影響
M304	鹿野秀一(東北大・東北アジア)・河野公一(東北大院・情報科学)・工藤純一・菊地永祐(東北大・東北アジア)NOAA画像を利用した西シベリアチャニー湖沼群の環境変動	M325	安部倉完(京大・理・動物生態)京都市深泥池における魚類相の変遷と外来魚駆除による個体群抑制効果
M305	ジャイニ ヨ双・中越信和(広島大院・国際協力)An application of Remote Sensing and GIS Technique for water resource analysis in Pinang Watershed, Peninsula Malaysia.	M326	島岡良治・稲本悦子・香取郁夫・桜谷保之(近畿大・農・昆虫)郊外に移転した大学キャンパスにおける生物群集(10)在来、外来植物に対する訪花昆虫群集
M306	板谷明美・山本進一(名大院・生命農学・森林生態生理)航空写真の画像解析による過去の森林被覆の推定	M327	山崎恭子(京大・人間・環境)由布岳自然草原における送粉昆虫群集
M307	藤原道郎(千葉県立中央博)・菊池多賀夫(横浜国大院・環境情報)旧版地形図、現存植生図、空中写真を用いた長良川流域における景観構造の変遷	M328	堂園いくみ(都立大院・理・牧野標本館)・鈴木和雄(山口県立大)クサボタンの花形態変化に伴うマルハナバチ2種の採餌効率
M308	渡邊園子(広島大・国際協力)・和田秀次((財)広島県環境保健協会)・大竹邦暁(中電技術コンサルタント(株))・山場淳史(広島県林務管理室)・中越信和(広島大・国際協力)グリッドを単位とした植生図作成手法	M329	稲荷尚記(北大・低温)・他5名 樹木開花量に関連したマルハナバチの空間分布、個体数、および季節変動: 北海道苫小牧市の冷温帯落葉広葉樹林において
M309	鈴木邦雄(横浜国大院・環境情報)・原慶太郎(東京情報大・総合情報)・平吹喜彦(宮教大・教育)・富田瑞樹(東北大院・農学)・荒木祐二(宮教大院・教育)タイ沿岸低地の民族生物学的研究1. ナラチワ地区農村生態系の有用植物資源	M330	中本 敦・金城和三・伊澤雅子(琉大・理・生態)オリイオオコウモリの餌利用とフェノロジー
M310	長島啓子(広島大院・国際協力)ニュージーランドにおける林業拡大と資源管理システム-日本の資源管理と木材利用への示唆-	M331	寺西 眞(神戸大・理・生物)・鈴木信彦(佐賀大・農・応用生物)開放花と閉鎖花を同時につけるホトケノザ種子のアリによる散布
M311	Eusebio Villar Angara (Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima Univ.) The Ecology of Fire in The Seto Inland Sea Region, Japan	M332	鈴木信彦・片山 昇(佐賀大・農)・寺西 眞(神戸大・理)世代が重複する一年草コニシキソウにおける季節により異なる種子散布様式
M312	桜谷保之・前田武志(近畿大・農・昆虫)郊外に移転した大学キャンパスにおける生物群集(9)レッドリスト動物種の生息状況	M333	森 洋佑・林田光祐(山形大・農)カスミザクラの多様な種子散布者と散布経路
M313	大久保達弘(宇大・農)・西尾孝佳(宇大・野生植物科学研究セ)・梁 建平・陳 国臣(中国・広西林業科学院)・出村克彦(北大・農)中国におけるもう一つの環境問題「石漠化」-広西壮族自治区における石漠化の現状-	M334	石崎知子・長山泰秀(島根大・生物資源)種子散布者のための枝強度-鳥散布樹種を風散布樹種と比較する-
M314	西尾孝佳(宇都宮大・野生植物研セ)・他6名 中国におけるもう一つの環境問題「石漠化」広西壮族自治区における石漠化がもたらす植生劣化とその修復の展望	M335	山口恭弘(中央農研・鳥獣害研)茨城県つくば市におけるヒヨドリの液果利用様式
M315	大黒俊哉(農業環境技術研)・常学礼・趙哈林(中国科学院・寒区旱区環境工程研)中国ホルチン砂地における過放牧草地の植生回復過程	M336	沼田真也・可知直毅(都立大・理)・奥田敏統(国環研)・N. Manokaran(マレーシア森林研)展葉様式と食害: 遅延緑化は被食防御戦略か?
M316	趙斌・中越信和(広島大院・国際協力)A wetland city enjoys wetlands' services: A case study in Shanghai, China	M337	福井晶子・大串隆之(京都大・生態研セ)葉巻きによる多様性の創出
M317	遠藤康裕・永山啓一・中根周歩(広島大院・生物圏)吉野川流域での広葉樹林と人工林(施行の違い)の治水機能の比較 1. 土壌浸透能	M338	杉浦真治(京大・農)・山崎一夫(大阪市立環境科学研)リーフマイナーの種内競争が空間分布に与える影響
M318	山本菜穂・中根周歩・佐藤高晴(広島大・生物圏)国定公園内における宅地開発の事後アセスメント(II)土砂流亡と逕流水路の改変の影響	M339	中山之穂(鹿大・水産)・打浪聡子(枕崎水産高校)・山本智子(鹿大・水産)造成藻場における動物植物相互作用
M319	藤原一繪・藤間照子(横浜国大・環境情報・植生)・二見健一(横浜国大院・工)埋立地における緑地動態とその集塵効果-製鉄所における集塵効果機能について-		
M320	伊藤江利子・吉永秀一郎・大貫靖浩・志知幸治・松本陽介・埴田 宏(森林総研)関東平野におけるスギ林衰退と土		

植物の個体群生態 N301~321、遷移・更新 N322~330、植物の生理生態 N331~340	
N301 下野綾子・鷺谷いづみ(東大・農・生圏・保全生態)ユキワリソウの種子による繁殖と個体群構造	N321 中川弥智子(京大・生態研)・中静 透(総合地環研)散布前種子捕食者は重要か?
N302 柳川朋美・和田直也(富大理・生物圏)岩を這うチングルマの生態的特性と周辺植生に及ぼす影響	N322 中静 透(総合地球環境学研)・他6名 林冠三次元構造を利用した森林動態パラメータの広域推定
N303 白崎 仁(新潟大・生物)・佐藤政二(湯沢町三保)多雪地域における藓類ヤマコスギゴケの孢子体形成、分布、および環境要因の関連性	N323 上野真義(森林総研)・戸丸信弘(名大院・生命農)・吉丸博志(森林総研)・真鍋 徹(北九州市自然史博)・山本進一(名大院・生命農)龍良照葉樹林におけるヤブツバキの遺伝的分化と林冠ギャップとの関係
N304 館野隆之輔(京大・農)・今泉智之・川口英之(島根大・生物資源)・金子有子(琵琶湖研)トチノキの種子散布と実生の生残	N324 三浦真弘・山本進一(名大・生命農学)龍良山老齢林のシイノキ稚樹集団の構造と3年間の動態
N305 高松 潔・堀 良通(茨城大・理・生態)・中野隆志・安倍良子(山梨県環境研)標高及び光環境の違いが富士山亜高山帯域でのカニコモリの生育に及ぼす影響	N325 真鍋 徹(北九州自博)・藤田孝志・三浦真弘・山本進一(名大・生命農学)龍良照葉樹林における下層樹木群集の構造と動態
N306 野田周央・名波 哲・伊東 明・山倉拓夫(大阪市大院・理)つる植物5種の初期成長と光環境	N326 永松 大・小南陽亮・佐藤 保・齋藤 哲(森林総研・九州)綾照葉樹林主要構成樹種の個体群構造の比較
N307 河村耕史・武田博清(京大・農・森林生態)低木スノキ属地上幹の年齢と光環境に対応した構造変化	N327 坂口 隆(筑波大・修)・上條隆志(筑波大・農林)・本多孝法(筑波大・修)伊豆諸島八丈島の成立年代の異なる2火山における群落構造の発達と現存量及び土壤中の炭素・窒素量の関係
N308 市栄智明・小池孝良(北大・北方生物圏セ)・中静透(地球研)フタバガキ科の巨大高木 <i>Dipterocarpus pachyphyllus</i> の展葉のメカニズム II	N328 谷 雅人(東京農工大・連合農)・他9名 熱帯丘陵地混合フタバガキ林のランドスライド地における土壌硬度分布・サラワ克蘭ビル国立公園の事例-
N309 鈴木 新(京大・農)ヒサカキの繁殖と樹冠発達との関係	N329 菊田綾乃・小林幹夫(宇都宮大・農・森林)御蔵島御山におけるミクラザサ群落内のクマネズミの分布と食性
N310 徳永咲子・藤本征司(静岡大・農)高木性広葉樹の樹形形成パターン	N330 小林幹夫(宇都宮大・農・森林)・Carlos Mejia(ロスアンデス大・理・生物)・伊澤紘生(宮教大・環境教育セ)・コロンビア・マカレナ熱帯林の林床で5年毎に一斉開花枯死をくり返す草本性タケ類の1種 <i>Pharus virescens</i> の個体群動態
N311 黄 双全・高橋佳孝(近中四農研セ・畜産草地) The flower stalk of <i>Pulsatilla cernua</i> bends during anthesis: A way to avoid rain?	N331 郷内 武・吉岡俊人・川原周祐・木村直敬・佐藤 茂・羽柴輝良(東北大院・農)冬季一年草埋土種子のアブシジン酸を介した温度応答による秋発芽タイミングの決定
N312 石井 潤(神戸大・自然科学)・角野康郎(神戸大・遺伝子実験セ)両生植物ヒメホタルイの水深に対する可塑的形態変化	N332 河原田愛(西宮市都市整備公社)・岩崎 寛(姫路工大・自然研)緑化植物の他感作用に関する基礎的研究
N313 田村景子・山村靖夫(茨城大・理・生態)ブナとイヌブナの成り年と肥大成長パターンの関係	N333 石崎伸二郎(東北大・理・生物)・彦坂幸毅・広瀬忠樹(東北大院・生命科学)高CO <sub>2</sub> における葉重/葉面積比の増加は成長の増加につながるか?
N314 野村尚史(京大・理)・菊沢喜八郎(京大・農)・北山兼弘(京大・生態研セ)熱帯山地林における樹木生長フェノロジー:施肥試験の結果	N334 児玉直美(九大・演習林)樹冠上部における光合成速度と蒸散速度のばらつきを定量化
N315 川口英之(島根大・生物資源)・井鷲裕司(広島大・総合科学)・金子有子(琵琶湖研)・館野隆之輔(京大・農)溪流に沿ったトチノキ個体間の遺伝的類似度	N335 松尾奈緒子・小杉緑子・大手信人(京大・農)・木庭啓介(京大・情報)葉の炭素安定同位体比からCi/Caを推定する際のタイムスケールの問題
N316 戸澤宗孝・陶山佳久・上野直人・清和研二(東北大院・農)河川の本流・支流に形成されたオノエヤナギ個体群間の遺伝的多様性比較	N336 小林 元(九大・農演)・井上純大・玉泉幸一郎(九大・農)スギ・ヒノキ樹冠における窒素-光合成直線の季節的変動
N317 紺野康夫・大石善子(帯畜大・生態系保護)幼樹の不在がカシワの個体群動態に与える影響	N337 大曾根陽子・館野正樹(東大・理・日光植物園)植物のPmaxの多様性はどのような要因によってもたらされるのか
N318 小林悟志・広木詔三(名大院・人間情報・環境情報)財賀寺のツブラジイとスダジイの雑種形成における解析	N338 小口理一(東北大院・理)・彦坂幸毅・広瀬忠樹(東北大院・生命科学)木本3種の光合成光順化における葉の解剖学的変化
N319 藤田 卓・工藤 洋・加藤英寿・可知直毅・若林三千男(都立大院・理)小笠原諸島父島におけるフトモモ属3群の実生の死亡要因、および実生の生存率から推定される最適な種子サイズと実際の種子サイズの関係	N339 千葉賢史・椎木菜穂子・堀 良通(茨城大・理・生態)異なる光および水環境下でのオタカラコウの葉群動態と光合成特性
N320 西村 千(JST)・小沼明弘(新潟大・自然)・沼田真也(都立大・理)・奥田敏統(国環研)・Supardi, N. (FRIM) 択伐林におけるサラノキ属8種の開花パターン	N340 小野田雄介(東北大院・理・生物)・彦坂幸毅・広瀬忠樹(東北大院・生命科学)発芽時期がイタドリ光合成特性に及ぼす影響

〇会場

ポスター発表：3月28日(木) 12:00 ~ 14:00

植物群落・群集 O301 ~ 315、物質生産 O316 ~ 325、物質循環 O326 ~ 336	
O301	石原修一(横国大院・環境情報)・持田幸良(横国大・教育人間)・藤本 潔(南山大・総合政策)・宮城豊彦(東北学院大・文)・菊池多賀夫(横国大・環境情報)タイ国および西表島マングローブ林における主要な構成種の分布とその立地
O302	神田房行(北海道教育大・釧路・生物)・内山博之(厚岸町立真龍小)・石岡はるか(北海道教育大・釧路・生物)厚岸湖におけるアッケシソウ群落の分布と微地形
O303	横山政史(横浜国大・環境情報)河口干潟における植生配列と立地特性
O304	川村健介(岐阜大・流環研)・他6名 リモートセンシングを用いた中国内蒙古草原の保全と持続的利用 2. ノア/NDVI によって推定した現存量と植生の関係
O305	川田清和(筑波大院・農)・中村 徹(筑波大・農林)内蒙古ガソウラの草原植生に対する農耕地の影響
O306	磯谷達宏・石本 研(国士館大・文・地理)伊豆半島西部の稜線付近におけるササ草原の分布域の変遷と現在の種組成
O307	高木朝子(筑波大・環境科学)栃木県栗山村土呂部採草地の植生と現状
O308	堤 道生(東北大院・農)・塩見正衛(茨城大・理)・佐藤衆介・菅原和夫(東北大院・農)放牧草地における植物現存量の空間的不均一性が一次生産におよぼす影響：シミュレーションによる解明
O309	馬場生織・小池文人(横浜国大・環)都市緑地の熱環境改善機能と植生との関係
O310	黒川紘子(京大・生態研セ)・中静 透(地環研)人為攪乱が植物群落の特性に与える影響
O311	〇瀬瀬頼子(自然環境研究セ)・長岡総子(横浜植生研究会)多摩川永田地区における河川敷植生の変化と洪水の影響
O312	許・矢内・大野(横浜国大・環境情報)植生劣化と斜面崩壊に関する考察
O313	木原孝志(つくば・第二・生物)デジワールズのIBM化
O314	曾根恒星・寺島一郎(阪大・理・生物)樹形の力学的バランスについて
O315	山倉拓夫・伊東 明(大阪市大・理)等比級数則による地球上の生物総種数の評価
O316	小淵義照(近畿大・農)・長山泰秀・片桐成夫(島根大・生物資源)・岩坪五郎(近畿大・農)落葉広葉樹の当年生シュートの構造と動態
O317	中島弘起・武田博清(京大・農)・Soonorn KHAMYONG(チェンマイ大・農)幼樹の樹冠構造に着目したタイ DoiSuthep山地林における主要構成種の生存戦略の解明
O318	大場信太郎・酒井聡樹(東北大院・生命科学)カエデ属はどのようにして光を獲得しているか? : 成長様式と葉身・葉柄・当年枝への資源分配の関係
O319	荒木眞岳・川崎達郎・韓慶民・千葉幸弘(森林総研)ヒノキの幹における呼吸速度に影響を与える要因の検討
O320	菱 拓雄・武田博清(京大・農)天然ヒノキ林有機質土壌における吸収型細根と二次肥大型細根の季節変化～細根動態の土壌微細形態学的研究
O321	西谷里美(日本医大・生物)・増沢武弘(静岡大・理)北極圏のムカゴトラノオ：フェノロジーに対する温度と栄養塩の効果(1個体群での例)
O322	館野正樹・長嶋寿江(東大院・理・日光植物園)自然間引きの法則の成立メカニズムI - 個体の生長モデルによる解析
O323	長嶋寿江・館野正樹(東大院・理・日光植物園)自然間引きの法則の成立メカニズムII - 草本群落における個体追跡調査による解析
O324	酒井 徹・村岡裕由・秋山 侃(岐阜大・流環研)・芝山 道郎(農環研)3次元デジタイザを用いた群落構造の把握と生産量の推定
O325	鈴木静男(京大・農)・北山兼弘(京大・生態研セ)・相場慎一郎(鹿児島大・理)・武生雅明(森林総研)・菊沢喜八郎(京大・農)熱帯山岳キナバル山における標高・地質・地形の違いによる森林スタンレベルの被食率変化
O326	金 明顯・中根周歩(広島大・生物圏)幹呼吸速度の連続測定法の開発(1)チャンパーの開発など
O327	林 明姫・周 承進・中根周歩(広島大院・生物圏)実験室条件下での土壌呼吸測定法(AA法、DC法、及びOF法)の検討
O328	西村誠一・鶴田治雄(農環研)三種の主要な温室効果ガス(CH <sub>4</sub> 、N <sub>2</sub> O、CO <sub>2</sub> )フラックスの同時測定システムの構築
O329	酒向宏範(岐阜大・流環研)・大塚俊之(山梨環境研)・内田雅己・津田 智・小泉 博(岐阜大・流環研)森林伐採跡地の焼畑前後における土壌CO <sub>2</sub> フラックス
O330	木部 剛・増沢武弘(静岡大・理)富士山森林限界付近における土壌呼吸の特性
O331	新谷健一(筑波大・環境科学)・大塚俊之・安部良子(山梨環境研)・鞠子 茂(筑波大・生物)富士山麓剣丸尾溶岩上に生育するアカマツ林の土壌呼吸について
O332	勝野和美(筑波大・環境科学)・田村憲司(筑波大・応生)・林 一六・鞠子 茂(筑波大・生物)ススキ草原とアカマツ林における土壌呼吸の比較
O333	大橋瑞江(九大・農)・高木正博(宮大・農)・作田耕太郎・玉泉幸一郎(九大・農)・中尾登志雄(宮大・農)暖帯常緑広葉樹林における土壌気相中のCO <sub>2</sub> 濃度分布とその季節変化
O334	松本成夫(国際農研)・Kobkiet Paisanchoen(タイ農業局土壌科学)・袴田共之(農工研)東北タイのトウモロコシ畑における土壌炭素蓄積量と炭素収支への牛糞施用および不耕起の影響
O335	大塚俊之・安部良子・中野 隆(山梨環境研)・鞠子 茂(筑波大・生物)富士北麓剣丸尾アカマツ林における炭素フラックスと生態系純生産量(NEP)
O336	内田雅己(岐阜大・流環研)・他5名 高緯度北極の水河後退域における生態系純生産量の制限要因

古生態 P301～305、行動・社会 P306～312、動物の個体群生態 P313～327、動物群集 P328～334	
P301 江田真毅(東大・農・生物多様性)・馬場芳之・小池裕子(九大・比文)・樋口広芳(東大・農・生物多様性) 完新世後期におけるアホウドリの骨形態の変化	P321 石井弓美子・嶋田正和(東大・広域システム) 寄生蜂による捕食圧とマメゾウムシ2種の共存・消滅パターン：捕食説の検証
P302 高原 光(京都府大・農・演)・真鍋智子(沖縄県庁)・佐々木尚子(京大院・農・森林) 丹波山地蛇ヶ池周辺の植生変遷 1. 最終氷期以降の気候変動による変化	P322 田中絵里・小林隆人(宇都宮大・農・応用昆虫) 寄主植物周囲の植生配置とアリによるオオムラサキ幼虫の死亡率との関係
P303 佐々木尚子(京大院・農・森林)・高原 光(京都府大・農・演)・上嶋雅子(兵庫県庁) 丹波山地蛇ヶ池周辺の植生変遷 2. 過去2500年間の人間活動による変化	P323 小林隆人(宇都宮大・農・応用昆虫) オオムラサキの保護・保全を目的とした森林管理
P304 大井信夫・北田奈緒子・宮川ちひろ・斎藤礼子((財)地域地盤環境研)・岡井大八(大阪ガス(株)) 福井県中池見における最終氷期の植生史	P324 高橋里英子(京大・理・動物生態) モンキチョウ雌における色彩二型維持機構--個体数変動および行動パターンからのアプローチ
P305 小椋純一(京都精華大・人文)・山本進一(名大院・生命農)・池田晃子(名大・年代測定総合研究セ) 微粒炭分析から見た阿蘇外輪山の草原の起源	P325 橋本みのり・金子信博・伊藤雅道・豊田 鮎(横浜国大・環境情報) キシャヤスデ成虫が分解系に与える密度効果の検出-野外エンクロージャーを用いて-
P306 井出純哉(京大院・理・動物生態) クロヒカゲの配偶行動の日周的・季節的变化	P326 熊谷直喜・品川秀夫・佐藤壽彦・土屋泰孝・青木優和(筑波大・下田臨海) イソバナ専住性ヨコエビ個体群の空間構造
P307 鮫島智行・粕谷英一(九大院・理・生物科学) セグロアシナガバチにおいて体サイズが投資効率に与える影響	P327 栗原健夫(西海区水産研究所)・他6名 クロチョウガイ <i>Pinctada margaritifera</i> の稚貝の生残率変動要因
P308 菊地友則・東 正剛(北大・地球環境) 多女王性コロニーにおける女王間のgrooming hierarchy と reproductive condition	P328 三宅 洋(京大・生態研セ)・日浦 勉(北大・苫小牧研究林)・中野 繁(京大・生態研セ) 高頻度の攪乱が河川性ベントス群集の均等度を高める
P309 藤田 愛・杉本敦子・清水 勇・安部琢哉(京大・生態研セ) ヤマトシロアリの栄養交換についての予備的研究	P329 鈴木孝男(東北大院・生命科学) 宮城県広浦の底生動物群集とその分布
P310 〇本田恵理(京大院・理・動物生態) タイワンエンマコオロギ呼び鳴き(calling song)にみられる2つのタイプ	P330 真木英子(鹿児島大院・理工・地球環境)・富山清升(鹿児島大・理・地球環境) ウミナナ類3種のすみわけ
P311 菅野良一(北大院・昆虫体系) サッポロフキバッタ( <i>P. sapporensis</i> )の核型の異なる個体群間の生殖的隔離	P331 高田宜武・洪野拓郎・阿部 寧・橋本和正(西海区水研・石垣) サンゴ礁池において短期の濁度環境変化がサンゴ礁底棲動物群集に与える影響
P312 細川貴弘・粕谷英一(九大・理・生物)・鈴木信彦(佐賀大・農) マルカメムシにおける交尾時間をめぐる雌雄間のコンフリクト	P332 名波 敦(水産総合研セ)・西平守孝(東北大院・生命科学) 塊状ハマサンゴのマイクロアトールに形成されるサンゴ礁魚類群集
P313 菊池陽子・富山清升(鹿児島大・理・地球環境) ヒメカノコガイのサイズ分布の季節変動	P333 洪野拓郎(水研セ・西海水研・石垣)・他5名 フチドリスズメダイの縄張りがサンゴの着生及び生残に及ぼす影響
P314 石村理知・西平守孝(東北大院・理・生物) コモチイソギンチャクの性様式と繁殖行動の関係	P334 五十嵐聖貴(北海道・環境研)・高野敬志(北海道・衛生研) 北海道茨戸湖におけるワムシ類および甲殻類プランクトンの季節的消長
P315 細野隆史(北大院・水)・宗原弘幸(北大・FSセンター) イバラワレカラの移動タイミング	
P316 武田 哲(東北大院・理・臨海)・村井 実(琉球大・熱生圏・瀬底) ミナミコメツキガニの配偶行動	
P317 佐藤 琢(北大院・水産)・五嶋聖治(北大・水産) ヒラトゲガニにおける個体群構造による精子制限の強度とその影響	
P318 石川俊之・成田哲也・上田孝明・占部城太郎(京大・生態研セ) 琵琶湖深底部に生息するアナンデルヨコエビ( <i>Jesogammarus annandalei</i> )の生息密度の長期変化(1966-2000)	
P319 富樫真樹・金子信博(横浜国大・環境情報)・戸田正憲(北大・低温研)・日浦 勉(北大・苫小牧演習林) 植物の多様性の異なる立地における、分解者ニホンヒメフナムシの構成	
P320 木下今日子(東邦大・理・生物)・伊谷 行(京大院・瀬戸臨海)・内野 敬(東北大院・生命科学) ヨコヤアナジャコ <i>Upogebia yokoyai</i> の巣穴構造	

## 保全・景観生態 M401～424、植物と動物の相互関係 M425～437

M401	宮久保知和子（明治大・農）帰化植物オオフサモの分布について	M421	大塚広夫（東農大院・農）・榊田信彌・小林鈴枝・根本正之（東農大・地域環境）耕作管理が谷津田の生物多様性に及ぼす影響
M402	村中孝司・鷲谷いづみ（東大・農・保全生態）鬼怒川砂礫質河原における外来牧草シナダレスズメガヤの侵入と河原固有植物の急激な減少	M422	福岡公平・荒木祐二・平吹喜彦（宮城教育大・教育）・竹原明秀（岩手大・人文社会科学）・三浦修（岩手大・教育）残存型屋敷林が有する種多様性とその創出に係わる林縁効果と林冠効果
M403	Luchman, H.・Nakagoshi N.（広島大院・国際協力）Ecological study of <i>Gigantochloa manggong</i> (Poa.) an Endemic bamboo species at Java Island	M423	土田勝義（信大・農）・三井健一（信大院・農）霧ヶ峰草原の景観管理 2.刈取りによる草原の維持（2）
M404	柴原 崇・馬場多久男・伊藤精吾・大窪久美子（信州大・農・森林）南アルプス北西部におけるシナノコザクラの分布と群落特性	M424	福井晶子（北大・農）・池上佳志（北大・北方生物圏フィールド科学セ）異なる林分下における遊歩道周辺の下層植生変化
M405	名取俊樹（国立環境研・生物圏環境）南アルプス北岳に生育するキタダケソウの生育地環境について	M425	島田卓哉（森林総研・関西）・齋藤 隆（北大・フィールド科学セ）ミズナラ堅果の摂取がアカネズミに与える影響？負の場合と負でない場合？
M406	谷本和久・大窪久美子（信州大・農）長野県における絶滅危惧植物ミカワバイケイソウの群落特性と土壌・水分環境	M426	石若礼子・増田泰久（九大・農・家畜飼料）・衛藤哲次（九大・農・高原農場）大分県久住高原におけるカヤネズミによる採草用牧草地の利用3
M407	森 有希・大窪久美子（信州大・農・森林）本州中部亜高山帯におけるヤナギランの個体群及び群落動態（予報）	M427	姜兆文（日本科学技術振興事業団・山梨環境研・動物）・濱崎伸一郎（野生動物保護管理事務所・関西）・北原正彦・渡辺 牧（山梨環境研・動物）・岸本真弓（野生動物保護管理事務所・関西）Seasonal variation in digestive organs of sika deer as related to feeding strategy
M408	神谷 要（米子水鳥公園）島根県簸川郡大社町におけるポタンウキクサの移入と消滅について	M428	宮木雅美・梶 光一（北海道環境研）エゾシカ高密度地域における森林の動態 - 間伐効果に類似したサイズ構造の変化 -
M409	茂田幸嗣・中越信和・井鷲裕司（広島大・国際協力）西条盆地における絶滅危惧種サギソウ（ <i>Habenaria radiata</i> ）の集団構造	M429	石川葉留奈（名大院・生命農）・横田岳人・佐藤宏明（奈良女大・理）・柴田叡弐（名大院・生命農）シバとノチドメの繁殖戦略に対するニホンジカと食糞性コガネムシの役割
M410	内山憲太郎（信州大・農・森林）・他5名 長野県中南部における絶滅危惧種フクジュソウ属2種の繁殖生態と遺伝的変異	M430	松村光子・横田岳人・佐藤宏明（奈良女大・理・生物）・柴田叡弐（名大院・生命農）ニホンジカによる被食がミヤコザサの現存量・形態・質に及ぼす影響
M411	上杉龍士（東大・農）・五箇公一（国立環境研）・西廣淳・鷲谷いづみ（東大・農）絶滅危惧種アサザの遺伝解析	M431	安藤正規・柴田叡弐（名大院・生命農・森林保護）大台ヶ原におけるニホンジカ（ <i>Cervus nippon</i> ）による樹木剥皮の発生 - 樹種別、サイズ別にみた季節的発生傾向 -
M412	井鷲裕司・齊藤悠子・中越信和（広島大・総合科学・自然環境）絶滅危惧種マルバオモダカ保全のための生活史および遺伝解析	M432	谷本丈夫・佐藤顕信・伊藤祥子・水野 梓・橋本詳平（宇大・農）尾瀬地域の森林及び湿性植物群落の分布とシカの食害との関係
M413	阿部智明・倉本 宣（明治大・農）中国産コマツナギと日本産のコマツナギとの間の遺伝的差異	M433	和田直也（富大・理・生物圏）・鎌田直人（金沢大院・自然科学）ミズナラ堅果における防御物質と窒素量の部位による違い
M414	浅井麻友子・小林幹夫（宇都宮大・農・森林）宇都宮市駒生湿地における絶滅危惧種ゴマクサの生息環境とフェノロジー	M434	北畠琢郎（東大院・農学生命）捕食者ネズミ類がブナ・ミズナラ当年生実生の生残に及ぼす捕食様式の違い
M415	倉本 宣（明治大・農）カワラノギクの多摩川における現状と造成した丸石河原における実生の定着	M435	鎌田直人（金沢大院・自然科学）・他5名 ブナ属4種の高木と稚樹の被食パターンと被食回避戦略の比較
M416	佐久間大輔（大阪自然史博）・柳沢 直（岐阜森林文化アカデミー）京都・大阪周辺の里山植生 クヌギ・アベマキについて	M436	山室晃司・齋藤秀之・渋谷正人・高橋邦秀（北大院・農・造林）・尾崎研一（森林総研・北海道）アブラムシの吸汁がブナ葉の光合成特性とRuBisCO量の季節変化に与える影響
M417	河原孝行（森林総研・北海道）・飯田滋生（森林総研）・中澤 幸（東大・理・植物園）北海道札幌近郊の防風林・都市林における植物の種多様性とその保全の意義	M437	Harrison, R. (Center for Ecol. Res., Kyoto Univ.) Dispersal of fig-wasps in a rainforest environment: Flight height and potential dispersal distances
M418	佐久間智子・中越信和（広島大院・国際協力）アカマツ林型里山の種多様性と植生管理		
M419	村上健太郎（きしわだ自然資料館）・森本幸裕（京大院・農）京都市内孤立林におけるシダ植物の種数と面積の関係		
M420	保田謙太郎・芝山秀次郎（佐賀大・海浜研セ）人はいかなる頻度および種類の攪乱を農耕地周辺の植生に与えているか		

植物の個体群生態 N401~424、遷移・更新 N425~434、植物の生理生態 N435~439	
N401 三宅 崇・長谷川匡弘・矢原徹一(九大院・理・生物)自然集団におけるキスゲ属植物雑種個体の花の香りと繁殖成功	N421 市川百合子・工藤 洋・可知直毅(都立大・理・生物)散布種子の休眠状態の変化と発芽時期: <i>Lysimachia</i> 属 2 種の比較
N402 長谷川匡弘・矢原徹一(九大・理・生物)キスゲ属の雑種集団における花形質および繁殖成功の変異	N422 長谷川孝・小林幹夫(宇都宮大・農・森林)絶滅危惧植物トネハナヤスリの生活史; 胞子体の季節変化と渡良瀬遊水地における分布特性
N403 佐藤 永(九大・生物環境調節研究セ)・矢原徹一(九大・理・生物)自殖性が強い種では、なぜ花寿命が短いのか?	N423 富松 元・堀 良通(茨城大・理・生態)溪畔草本ヤマタイミンガサの土壤水分勾配に伴う光合成および、個体群構造と動態
N404 遠藤隆裕(北大・低温研)・鈴木準一郎(都立大・理・生物)・原登志彦(北大・低温研)同一環境下におけるキツリフネの開花時期の変異	N424 鷲山裕史・吉川康夫・永谷隆行・石渡達也(静岡県水試・浜名湖)浜名湖における1年生アマモ( <i>Zostera marina</i> )の分布と環境条件
N405 阿部恵子・堀 良通(茨城大・理・生態)各モジュールレベルにおける栄養成長と繁殖への分配と成長様式の比較	N425 石井弘明・原登志彦(北大・低温研)・他6名 カムチャッカ半島中央低地帯における山火事後の森林の二次遷移の空間パターン
N406 川越哲博(神戸大・理・生物)・鈴木信彦(佐賀大・農)雌雄同株植物アケビにおける隣花受粉のコスト	N426 安藤伸彦(名大院・生命農)・原登志彦(北大・低温研)・山本進一(名大院・生命農)倒木と林冠ギャップが北方針葉樹林の稚幼樹の出現と成長に及ぼす影響
N407 松村千鶴(筑波大・生物科学)・鷲谷いづみ(東大・保全生態)個体群サイズと送粉者の利用性が異型花柱性植物サクラソウの受粉パターンに与える影響	N427 南 佳典・三角暁子(玉川大・農・生物資源)・梨本 真(電中研)富士山森林限界攪乱地付近の植生と実生動態
N408 三宅康子(東北大・理・生物)・酒井聡樹(東北大院・生命科学)キバナアキギリの花序サイズを決める要因はなにか? ~花序の開花可能期間とディスプレイサイズの影響~	N428 田中厚志・山村靖夫(茨城大・理・生態)・中野隆志(山梨県環境科学研)富士山亜高山帯における攪乱影響下でのカラマツ林からシラビソ林への遷移と更新
N409 森長真一(富山大・理)・辻 和希(琉球大・農)早咲き、遅咲きどちらが有利?-春植物における開花のタイミングに依存した種子生産-	N429 田代直明(九大・農・演習林)樹木個体の生育状況と樹冠内光環境の幅
N410 植村 滋・杉浦康裕・野上啓行(北大・農・北方森林保全)前年の繁殖状況がザゼンソウの個体サイズと開花に与える影響	N430 生川淑子(名大院・生命農学)・飯田滋生(森林総研)・田内裕之・阿部 真(森林総研・北海道)・山本進一(名大院・生命農学)日本の亜寒帯林床の倒木の存在状態と常緑針葉樹種実生の出現
N411 笠木哲也・工藤 岳(北大・地球環境)マルハナバチの訪花行動が同所的近縁種の結実成功に与える影響-エゾノツガザクラとアオノツガザクラの雪解け傾度に沿った比較-	N431 宮所拓自(名大院・生命農学)・西村尚之(佛教大)・山本進一(名大院・生命農学)御岳・亜高山帯常緑針葉樹林における9年間の森林動態
N412 牧野崇司(東北大院・理・生物)・酒井聡樹(東北大院・生命科学)マルハナバチにおける採餌株限定行動の個体差と経日変化-閉鎖系での追跡実験からわかったこと-	N432 加藤京子・山本進一(名大院・生命農)・亜高山帯常緑針葉樹林におけるモミ属稚樹の樹冠形の可塑性と発達
N413 富松 裕・大原 雅(北大・地球環境)オオバナノエンレイソウ個体群間の性配分様式の比較	N433 西村尚之(佛教大・通信)・原登志彦(北大・低温研)・山本進一(名大院・生命農)大山ブナ林における9年間の主要樹種の成長動態と樹木間競争
N414 岩泉正和・酒井聡樹(東北大院・生命科学)ツリフネソウにおける密度に依存した性投資	N434 伊東宏樹・日野輝明・高畑義啓・古澤仁美・上田明良(森林総研・関西)大台ヶ原におけるウラジロモミ実生の生残過程
N415 田中 浩(森林総研・森林植生領域)ウリハダカエデの繁殖開始期における性表現-苗畑での植栽個体の観察から-	N435 松木佐和子(北大院・農)・小池孝良(北大・フィールド科学セ)カバノキ科稚樹における成長、葉の機能に対する春葉ダメージの影響
N416 岡崎純子(大阪教育大・教員養成・生物)・他6名 亜熱帯域植物の繁殖生態: 不完全雌雄異株ハウチワノキ(ムクロジ科)の性表現とフェノロジー	N436 岩崎 寛(姫路工大・自然研)・山田宏樹(姫路市緑化協会)・田邊良忠(淡路景観園芸学校)・新村義昭(姫路工大・自然研)姫路市西御屋敷跡庭園における微気象特性が植栽植物の光合成に与える影響
N417 小澤真弓・工藤 洋・可知直毅(都立大・理・生物科学)林床植物オサバグサの個体群動態を規定する生活史特性	N437 鈴木雅代・尹朝熙・中根周歩(広島大院・生物圏)大気汚染物質の影響を受けているアカマツ成木と若木の針葉の暗呼吸と光合成
N418 河原崎里子(茨城大・理・生態)・他5名 林床草本クルマバグマの光をめぐる競争が個体群に与える影響	N438 尹朝熙(広島大院・生物圏)・他5名 和歌山県田辺市におけるOHラジカル発生水曝露による梅の個葉への生理生態学的影響
N419 石濱史子(東大・総合文化)・鷲谷いづみ(東大・農)サクラソウの種子生産における空間構造の効果-実験個体群における解析-	N439 坂田 剛(北里大・基礎科学セ)・中野隆志(山梨環境研)・横井洋太(北里大・基礎科学セ)富士山五合目のイタドリとオンタデの葉の窒素利用と活性酸素消去能
N420 安島美穂・鷲谷いづみ(東大・農学生命)サクラソウにおける実生の発生と定着の適地	

○会場

ポスター発表：3月29日(金) 12:00～14:00

植物群落・群集 O401～415、分子生態 O416～419、進化・種多様性 O420～432、物質循環 O433～438	
O401 相場慎一郎(鹿児島大・理)・北山兼弘(京大・生態研セ)キナバル山の熱帯山地林における樹木種の生育場所とニッチ	O421 左古寛知・曾田貞滋(京大・理・動物生態)交雑帯および多種共存地域におけるオサムシの体表炭化水素の組成
O402 原 正利(千葉中央博)・他8名 タイ北部ドイインタノンにおける熱帯山地林の種組成と種多様性	O422 横川忠司・粕谷英一(九大・理・生態)・深津武馬(産総研・生物遺伝子資源)カイガラムシにおける父親由来ゲノムロス(PGL)の進化
O403 伊東 明・山倉拓夫(大阪市大院・理)・大久保達弘(宇都宮大・農)・T. Sylvester・H. S. Lee(サラワク森林局)サラワク熱帯雨林稚樹群集の多様性と空間構造	O423 手島裕明(東北大院・理・生物)・桑原康裕(北海道網走水試)・横山 潤・千葉 聡・河田雅圭(東北大院・生命科学)特異的な殻型をもつカドバリヒメマイマイと通常型ヒメマイマイの交雑帯の遺伝的解析
O404 飯島慈裕(都立大・理・地理)・吉田圭一郎(国立環境研)・岩下広和(産総研)・岡 秀一(都立大・理・地理)小笠原諸島父島において乾性低木林の成立に影響する水文気候条件	O424 西 浩孝(京大院・理・動物生態)ツクシマイマイの殻および生殖器官の進化
O405 工藤孝美(琉球大・農・生産環境)・榎木 勉・新里孝和(琉球大・農・演習林)沖縄島の石灰岩地域に成立するイタジイ林と立地環境	O425 奥田夏樹・西平守孝(東北大院・生命科学)アマオブネガイ科腹足類の基盤付着力と生態的特性との関係
O406 山下寿之(富山県中央植物園)・伊藤 哲・大塚久美子(宮崎大・森林科学)ハナガガシ林とイチイガシ林の種組成と立地環境	O426 木村 弘・原田和幸・原 研治・玉置昭夫(長崎大・水産)ハルマンスナモグリ(甲殻十脚目)と、その胃壁上で生育する接合菌Enteromyces callianassaeの共生関係
O407 高木正博(宮崎大・農)常緑広葉樹林の斜面系列上での実生の分布パターンとその規程要因	O427 西野晃子・河田雅圭(東北大・理・生物)水系栄養塩サイクルの安定性に及ぼす進化の影響
O408 松下真実子(愛媛大・農)愛媛県中予地方地方におけるアカマツ、クロマツおよびその雑種の分布について	O428 米倉竜次(京大・生態研)導入生物の適応的表現型分化：湖沼形態と食性がブルーギル集団の表現型分化を引き起こす
O409 甲斐 崇(広島大・教)・向井誠二・豊原源太郎(広島大院・理)宮島における垂直森林帯の研究	O429 高野真人(筑波大・生物科学)ヨツモンマメゾウムシにおける競争様式の進化シミュレーション
O410 寺下史恵(岡山理大・総情院)・越智正樹・能美洋介・波田善夫(岡山理大・総情・生地)岡山県南部の森林植生・地質・土壌と植生	O430 林 岳彦(東北大院・理・生物)・河田雅圭(東北大院・生命科学)繁殖隔離の様式の違いが二次的接触後の進化に与える影響
O411 大住克博・深町加津枝・奥 敬一(森林総研・関西)・鈴木裕子(近畿大・農)琵琶湖湖西の「里山」域の森林植生について(予報)	O431 今井周一郎・長谷川英祐(北大院・農・動物生態)個体群間での形態形質の歴史的な変化パターン
O412 丸岡英生(自然研)・他6名 暖温帯冷温帯Ecotoneにおける植生構造および種多様性と地形との関係	O432 今堀 愛(広島大院・国際協力)・高橋佳孝(近中四農研セ・畜草部)・内藤和明(姫路工大・自然研)・中越信和(広島大院・国際協力)里山放牧地における種多様性と環境要因
O413 吉田圭一郎(国立環境研)・他6名 GISを用いた暖温帯冷温帯Ecotoneにおける植生のモザイク構造の解析	O433 Mabuhay, J.・Nakagoshi N.(広島大・院・国際協力)Comparative Study of Microbial Diversity in Forest Fire and Soil Eroded Sites.
O414 渡邊 修・秋山 侃・西條好迪・張 福平(岐阜大・流環研)航空写真および衛星画像を用いた岐阜県美濃地方における竹林拡大の実態解明	O434 坂本 啓(東北大院・理・生物)・鹿野秀一(東北大・東北アジア研究セ)・川端善一郎(京大・生態研セ)3者マイクロゾムの個体群動態におけるC:N比の影響
O415 富久尾歩・斎藤元也(農環研)分光器を用いた植生解析	O435 野原精一(国立環境研・生物圏)・他5名 干潟生態系の機能評価手法(1) - 2次元空間の均一性と一次生産性 -
O416 中島浩二(石巻専修大・理工)ニホンジカ地域個体群のマイクロサテライト分析	O436 矢部 徹(国立環境研)・他6名 干潟生態系の機能評価手法(2) - 植生と底質環境 -
O417 長谷川理(北大・地球環境)・高木昌興(大阪市大・理)・綿貫 豊(北大・農)・阿部周一(北大・地球環境)同所的に分布するカモメ二種の遺伝的集団構造の違いについて	O437 広木幹也(国立環境研)・他5名 干潟生態系の機能評価手法(3) - 酵素活性の分布と変動 -
O418 早野あづさ(京大・理・動物)・山田 格・倉持利明(国立科学博)マストランドしたカズハゴンドウPeponocephala electra 集団の遺伝的組成	O438 大島詔・北野雅昭・萩原拓幸・新矢将尚・鶴保謙四郎(大阪市立環科研)人工干潟における窒素収支について
O419 越川滋行(東大院・理・生物科学)・松本忠夫(東大院・総合文化・広域システム)・三浦 徹(東大院・総合文化・生命環境)オオシロアリの兵隊分化における形態形成と特異的遺伝子発現	
O420 上田弘則(山梨環境研・動物生態)・高槻成紀(東大・博物館)アカネズミ島嶼個体群の後肢部の形態変異	

行動・社会 P401~409、動物の個体群生態 P410~429、動物群集 P430~437	
P401 中西 希・渡辺伸一・伊澤雅子(琉大・理・生態)・岡村麻生・阪口法明(環境省)・土肥昭夫(九大・理)オスに注目した、イリオモテヤマネコの空間配置とその動態	P421 玉手 剛・前川光司(北大・フィールド科学セ)サクラマスにおける性特異的な生活史形質：摂餌活性、死亡率及び親魚サイズの性差
P402 坂本信介(筑波大・環境科学)・斎藤隆史(筑波大・生物科学系)アカネズミの雌はいつ動くのか？	P423 長 雄一(北海道環境科学研究セ)・中満智史(帯広畜大・ゼニガタアザラシ研究グループ)長期間のセンサステータが語ること - ゼニガタアザラシの四半世紀 -
P403 石田泰子・粕谷英一・矢原徹一(九大・理・生物)ノネコの近親交配の回避: エピソード間での近交係数の変化	P424 上野あや・伊澤雅子(琉大・理・生態)・大橋 智(南西環境研)ツシヤママネコ <i>Felis bengalensis euptilura</i> の定住個体の死亡に伴う他個体の行動圏変化
P404 藤田 剛(東大・農・生物多様性)つがい形成と交尾効率からみた集団繁殖の利益と不利益	P425 野田英樹・鎌田直人(金沢大・理・生物)池間のニホンイシガメ( <i>Mauremys japonica</i> )の平均体サイズの違いと老齢個体の関係
P405 朝倉純子(筑波大・第二・生物)・藤井宏一・徳永幸彦(筑波大・生物科学)つばめのお宿のお引っ越し	P426 伊奈博彦・倉本 宣(明治大・農)谷戸景観の水路におけるホトケドジョウの灌漑期・非灌漑期の生息分布状況と環境要因
P406 牛山克己・天野達也・藤田 剛・樋口広芳(東大・農・生物多様性)マガンの分布を予測する：個体ベースモデルによるアプローチ	P427 横田 啓・金子信博(横浜国大・環境情報)水田に生息するミズミズの増殖要因と内的自然増加率の検討
P407 胡摩ヶ野大介・幸田正典(大阪市立大・理・生物地球)雄親保護魚ハシナガウバウオにおけるフィリアルカニバリズム~我が子を喰ってえられるもの~	P428 水野奈津子・浅見崇比呂(信州大・理・生物)オスになれない雌雄同体の雑種強勢
P408 真鍋尚也(鹿児島大・共通教育)・石村真美・四宮明彦(鹿児島大・水産)・須之部友基(千葉県立中央博)オキナワベニハゼの双方向性転換：どのような状況で性転換するのか？	P429 中道康文(筑波大・生命環境科学)・徳永幸彦(筑波大・生物科学)Broken Stick Model
P409 高橋大輔(滋賀大・教育)・高畑美寿樹(大阪市大・理)琵琶湖に生息するハゼ科魚類ヌマチチブの体サイズの性的二型と繁殖基質量との関連	P430 鮫島弘光(京大・生態研)・永光輝義(森林総研)・中静透(総地環研)熱帯雨林の送粉者昆虫群集が森林の人為的攪乱によって受ける影響とその要因
P410 高木義栄(九大・理・生物)尾羽の成長線サイズとEPFとの関係	P431 菱 拓雄・藤巻玲路(京大・農・森林生態)・McGonigle, T. P. (Idaho state Univ.)・武田博清(京大・農・森林生態)ヒノキ天然林における細根生産と土壌節足動物
P411 相澤七生(宇大院・農)・高野 肇(森林総研・多摩)・谷本丈夫(宇大・農)シジウカラの繁殖成功はなわばりによって決まるか？	P432 山下 聡・肘井直樹(名大院・生命農・森林保護)キノコ食昆虫群集の資源利用様式 - 子実体の存在様式が寄主選択に与える影響 -
P412 森本 元・須藤成人・上田恵介(立教大・理・動物生態)ルリビタキの雄の羽色によって親の繁殖様式は異なるか？	P433 高橋一男(東大院・農学生命・森林動物)・都野展子(長崎大・熱帯研)・加賀谷隆(東大院・農学生命・森林動物)キノコの形質と訪キノコ昆虫群集の対応関係
P413 山岸良子(筑波大・第二・生物)・徳永幸彦(筑波大・生物科学)Heronryの論理	P434 田辺慎一・戸田正憲(北大・低温研)・北山兼弘(京大・生態研セ)・Maklarin, B. Lakim (Res. Educ. Div.・Sabah Parks)・Maryati B. Mohamed (Tropical Biol. Conserv. Unit・Univ. Malaysia Sabah)熱帯高山に生息する昆虫類の個体数変動
P414 太田 宏(東北大院・生命科学)トウホクサンショウウオのオスの繁殖池への出現パターンの個体群間比較	P435 瀧本陽介(金沢大・理)インドネシア、ジャワ島の山地林における大型土壌動物群集
P415 岸田 治(小樽水族館)・西村欣也(北大・水産)エゾサンショウウオ幼生に誘引されたエゾアカガエル幼生の形態変化	P436 金森紀美子・稲泉三丸(宇都宮大・農・応用昆虫)林床管理の土壌節足動物相への影響
P416 道前洋文・若原正己(北大院・理)エゾサンショウウオの共食い型は共食い型ではない	P437 北原正彦・渡辺 牧(山梨環境研・動物生態)富士山北麓森林地帯のチョウ類群集構造：'96年と'99年の年次比較
P417 平井利明(京都市)京都深泥池産ウシガエルの餌構成	
P418 石田裕子(大阪府大院・理)・竹門康弘・谷田一三(大阪府大・総合科学)淀川水系下流域におけるカワヨシノボリとトウヨシノボリ縞鱗型の生息場所選択	
P419 丸山 敦・小野田幸生・遊磨正秀(京大・生態研)低酸素環境に应答する卵保護行動：トウヨシノボリ生活史二型間の比較	
P420 小関右介・前川光司(北大・フィールド科学セ)モツゴの雄における同性内競争と配偶者選択性との関係	

# 日本生態学会50周年記念大会(2003年3月,つくば)について

企画の公募などの最新情報はネットで(<http://jes50.cool.ne.jp/>)

日本生態学会は2003年に創立50周年を迎えます。これを記念してさまざまな事業が計画されていますが、そのひとつに日本生態学会50周年記念大会があります。この記念大会は、例年の大会とはひと味違ったものにして考えています。

会期は2003年3月19日(水)から23日(日)の5日間、開催場所はつくば国際会議場(茨城県つくば市)の予定です。大会実行委員会が企画するプレナリー(全員参加)シンポジウム、テーマを公募する企画シンポジウム、一般ポスター発表、自由集会に加え、50周年記念式典も行います。

プレナリー・シンポジウムは大ホール(1,300人収容)で開催されます。内容は、「集団・社会性」「群集・生態系」「分子生態」「保全生態」の4つの分野に関するもので、各シンポジウムでは4名前後のエキスパート(外国から招聘した演者を含む)の講演を予定しています。最終日のシンポジウムは保全生態分野にあてますが、これは一般市民への公開講演会を兼ねています。

企画シンポジウムのテーマは公募します。企画の採択は大会実行委員会で行います。会場数の関係から採択は12件までとする予定です。採択されたシンポジウムの運営は申請者にお任せしますが、類似した内容のシンポジウムがいくつも行われることのないよう、実行委員会である程度の内容の調整を行うことも考えています。

一般発表は今回はポスターだけで、口頭発表のセッションは設けないことにします。これはプレナリー・シンポジウムを充実させるための措置とご理解ください。ただし、ポスター発表の時間帯は長めに確保し、他の企画と重複しないように配慮します。自由集会に関しては、夕方から夜9時にかけて小会場が利用できます。

記念式典では、学会に貢献された方々による挨拶、顕著な研究業績をあげられた方の表彰、そして受賞講演などを予定しています。

以上「日本生態学会50周年記念大会」の概略を紹介しましたが、詳しいスケジュール、会場の状況およびシンポジウム等の公募要項につきましては、日本生態学会誌4月号に掲載されますので御覧ください。また、ウェブ上でも企画募集などの最新情報を掲載していきますのであわせてご覧ください。

(<http://jes50.cool.ne.jp/>)

日本生態学会会長	巖佐 庸
50周年記念大会会長	椿 宜高
同実行委員長	竹中明夫
50周年記念事業委員会委員長	松本忠夫

# 日本生態学会第49回大会組織委員会

**連絡先（大会前）** 〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉  
東北大学大学院生命科学研究科進化生態学講座（河田雅圭気付）  
日本生態学会第49回大会組織委員会  
Tel. 022-217-6688 Fax. 022-217-3683 e-mail. eco49@meme.biology.tohoku.ac.jp

**連絡先（大会期間中）** 大会本部 3月26日（火）～3月29日（金）  
Tel. 090-9749-8895 e-mail. halcyon-coromanda@ezweb.ne.jp

## 日本生態学会第49回大会組織委員会委員

大会会長：西平守孝（東北大院・生命科学）  
組織委員長：河田雅圭（東北大院・生命科学）  
総務：酒井聡樹・彦坂幸毅（東北大院・生命科学）  
参加受付：彦坂幸毅  
会計：太田 宏（東北大院・生命科学）  
プログラム・要旨集：鈴木孝男（東北大院・生命科学）  
シンポジウム・自由集会：千葉 聡・牧 雅之（東北大院・生命科学）  
懇親会：酒井聡樹  
渉外：広瀬忠樹・内藤俊彦（東北大院・生命科学）、吉岡俊人（東北大院・農）、  
宮原育子（宮城大・事業構想）  
会場：鹿野秀一（東北大・東北アジア研）  
会場設営：菊地永祐（東北大・東北アジア研）  
ポスター：吉岡俊人、酒井暁子（東北大院・生命科学）  
アルバイト担当：平吹喜彦（宮城教育大）  
ホームページ：河田雅圭、依田清胤（石巻専修大・理工）  
託児所：宮原育子、酒井暁子  
公開シンポジウム：河田雅圭  
大会当日担当：清和研二・陶山佳久（東北大院・農）、依田清胤、斉藤千恵美（宮城教育大）、  
酒井暁子、石井 博（東北大院・生命科学）